

自立した女と男を 人間らしい生活を 差別のない社会を  
育み 創り出す

新しい家庭科

We

ウイ

AUTUMN 増刊号 1991

逐次刊行物

平成3年12月18日 成

国立婦人教育会館

婦人教育センター

—'91年We夏季フォーラムの記録—

出合いは歴史をつくるII

—違いとつきあう—

## CONTENTS

■「育つことと育てること」中沢弘幸

■シンポジウム「違いとつきあう」

藤田 進／李 順愛／有光 健／小木曾 友

■分科会・交流会報告



HERITAGE

التراث

ある日曜画家(パレスチナ人)の絵—全体会シンポジウム10頁参照。

ぼくはお祭りが好きだ。人びとが集まり出し物を見、お店をのぞき、人とバッタリ会って散ってゆく。勿論「お酒」も、時には「喧嘩」もある。

そしてぼくはそれ以上に、お祭りを「やる側」が大好きだ。文化祭、コンサート、集会、講演会など、いくつ「お祭りごと」を手がけたらう。

その中で今回のWe夏季フォーラムは、かつてぼくが20歳だった時に企画・演出したコンサートと並ぶ想い出深いお祭りとなった。その時と今とは、多くのコンディションは大いに異なる。その学生コンサートには恋人にしたい女性と共に行きたいからという理由でかわつてもおり、しかもぼくは彼女の気をひこうと「嫌な人間」にもなっていた。恋愛は人を嫌な奴にもする。

今のぼくは、当時と同じようなことを考えたままではあるけれど、それほど嫌な奴ではない(と思う)。勿論、Weにどう人びとの中に、恋人にしたいと願う特定の女性がいるという不純な(?)動機がある訳でもない。しかし、Weにどう全ての人びとにホレていることは告白しなければならぬ。

さう。I Love We!

91年夏季フォーラム実行委員長 諸橋 泰樹

● テーマ  
出会いは歴史をつくるII  
— 違いとつきあう

## '91年We夏季フォーラムの記録

### 全体会

#### ● シンポジウム

「出会いは歴史をつくる」— 違いとつきあう—

— 藤田 進 / 李 順愛 / 有光 健 / 小木曾 友—

● まとめ 瀬戸井厚子・蔵本佳子・土田尚美・高橋優子 2

#### ● 「育つことと育てること」

— 中沢 弘幸さんのお話—

● まとめ 星名 綾・鈴木まき子 26

### 分科会

① 女の解放・男の解放 田中一生・重川治樹・津田正夫 36

② 親と子が水平に向き合うには 森本邦子 40

③ シングルのメリット・デメリット 吉田清彦 44

④ どうすすめる、どうすすめさせる家庭科男女共学 根津公子 48

⑤ こんな家庭科をやってみよう 芦谷 薫 52

⑥ みんなにやさしい老後環境  
— 北欧を歩いて— 立山ちづ子 56

⑦ 葬送の自由から女性・環境を考える 若竹キミイ 60

⑧ 「違いとむきあう」ってなんだろう  
— 気づいたらインタビュー— 間瀬中子 64

### 交流会

① 藤田 進さんに聞く 半田たつ子 68

② CMの中の性差別とメディア教育の可能性 吉田清彦 72

③ アジアと私たち 稲邑恭子 76

④ 家庭科スクランブルトーク 大和洋子 80

⑤ 女の解放・男の解放パートII 津田正夫 84

フィールドワーク 鈴木まき子 88

たのもしかった子どもたち 杉本千代 92

映画「母たち」を観て 若竹稜子 94

サラダトーク 大西麻里子 96

「インタビュー」やってみました 98

# 出合いは歴史をつくる

— 違いとつきあう —



● シンポジスト

藤田 進さん

(東京外国語大学・アラビヤ語)

李 順愛 (イ スネ) さん

(一ツ橋大学・女性運動史)

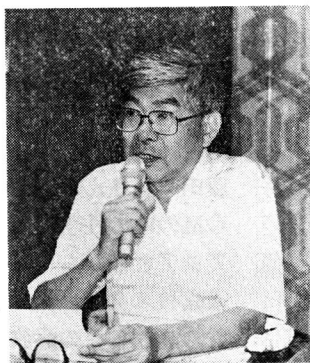
有光 健さん

(アジア人権基金事務局長)

● コーディネーター

小木曾 友さん

(アジア学生文化協会事務局長)



(写真上・左から藤田さん、李さん、有光さん。下・小木曾さん)

小木曾 今日のテーマは、「違いとつきあう―出会いの歴史をつくる」ということです。これは非常にタイムリーなテーマですが、結論が出るという問題ではないでしょう。初めにパネリストの三人の方にお話をいただきました。その後フロアの皆様からご自由に質問いただきました。お話を進めたいと思います。

李 在日朝鮮人として日本や日本人に対して言いたいことをお話しさせていただきます。

ご存じのように'89年の東欧の激動とそれを受けた冷戦の崩壊で、朝鮮の統一問題がにわかに具体的な問題として浮上してきました。今この世界的な激動の中で日本の国家は、率直に言って、日本が実質的に創造的に変わっていくようにしているとは全く思えません。これは在日朝鮮人としての私の実感です。

明治以後の日本はひたすら欧米志向、「脱亜入欧」で来たわけで、そうした中で国際化ということが言われ始めても、私たちの感じから言うとモノとカネの国際化はできた。しかし繰り返される教科書問題を見ても、かつての日本の侵略に対する歴史的な反省が全くなされていらないことは歴然としているわけです。

ノ・テウ大統領来日の際に韓日賢人会議というのが作られて、その報告書が今年の初めに出来ました。'89年末に日韓両国

で調査が行われたのですが、日本人の五人に一人はかつて朝鮮が日本の植民地であったという事実をまったく知らない。「日本人の韓国に対する関心の低さと無知」と報告書は述べています。

最近、私は大学で教えているものですが、学生たちと話してみますと、事態はもっと進んでいまして、一九一〇年の日韓併合は仕方がなかった、と考えている若い人たちが非常に多いことを知り、ショックを受けました。二十歳前後の若者は一番正義感に溢れていいと思うのに、その日本人の学生たちが、あれは仕方なかったんだと言う。いわゆる弱肉強食の論理、私から言うと強姦の論理で、今の日本の状況は、若い人たちに端的に現れていて、非常に問題の根は深いと思うのです。そうした若者たちが日本社会の中で量産されていることと、日本政府の言う国際化うんぬんとのギャップを、私たちが在日朝鮮人は実感していますが、今の若い人たちがそこまでいっているとは思っていませんでした。

日本では在日朝鮮人に対して、同化か追放かという政策が取られてきました。また'60年代の日本の官僚の言葉ですけれども、「在日外国人（主に朝鮮人）は、煮て食おうと焼いて食おうと自由だ」と。あるいは指紋捺捺拒否の運動の中で、大阪府警の外事課長が在日朝鮮人に対して「帰国しろ、それ

がいやなら帰化しろ」と発言しています。こういうことが繰り返り返し日本政府関係者の中から出てくるのです。最近外国人労働者の問題がクローズアップされて、NHKテレビでもシリーズでやっていますね。ブラジルからの日系人や外国人労働者の子供たちが日本社会に溶け込めなくて悩んで困っているのを見ながら、ああ私たちが在日朝鮮人が経てきたことの繰り返しだな、と思います。

ですから私は、在日朝鮮人の問題にすべてが集約されると思っています。韓日賢人会議の報告書は、完全に北朝鮮を除外しているので問題があるのですが、その中でこう言っています。「在日朝鮮人問題は日韓両国の関係をより建設的なものにしていくうえで大きな足枷となってきた。日本が真の国際化を果たしていく上で最大の課題である」と。国籍法が改正されましたが、日本で国際結婚といえど朝鮮人との結婚が多いですから、あれも日本政府は朝鮮人対策、在日朝鮮人の同化の促進ということと考えたであらうと思います。その国籍法のことでは日本の女性たちにとって父系血統主義から両性平等になったのは確かに進歩なのですけれども、私たちが在日朝鮮人から見ると、進歩とだけは言えない。また別の側面が絡んでくるのです。

ひとつ考えていただきたいのは、民族ということです。在日朝鮮人にとっては民族とは何かということとは小さいときか

ら常につきつけられるわけです。日本人じゃない、お前たちは異質だ異質だと陰に陽に言われて育ってきているわけです。民族は地球上に六百くらいとも、細かく分けると二千数百だとも言われています。日本は国民と民族と人種という三つの概念がほぼ一致していると言われていますが、多くの外国は多民族国家です。私が日本の若い人たちに、民族ってどう思うって訊くと、びんと来ないと言う人がほとんどなんです。ただ外国へ行ったときに少し日本人ということを意識する、と。日本の民族主義は天皇制の問題と絡んできますので難しい問題があるのはわかるんですが。

例えばアメリカに住んでいる日本人が、有色人種ということで変な目で見られてショックを受けた。そのとき初めて、日本で朝鮮人や中国人が差別されていたその気持ちがかつた、とテレビで言っていました。原爆が日本に投下された背景には、ひとつはソ連に対する牽制、反共対策と、もうひとつ日本が有色人種であったからだということは、資料によって明らかになっています。日本なら原爆を投下してもアメリカ国内で問題にはならないであらうと。今世界的に民族問題が噴出しているのは日本人にとっても決して他人ごとじゃないということを考えていただきたいと思うのです。

在日朝鮮人というのは、もともと日本による朝鮮の植民地化という状況の中から生まれしてきたのに、在日朝鮮人が何か

しますと、いやなら自分の国に帰れというような論理が繰り返し出てくるのですね。これは、日本が今の教育体制をとっているかぎりにならないでしょう。あくまでも日本の侵略によって生み出された存在であるということを、私たちは繰り返して言っていかなければならないと考えています。

藤田 多くの日本人にとっては中東というのは遠い世界で、あんまり関係ないんだ、という受け止め方が非常に強いと思います。

昨日八月二日はイラクがクウェートに侵攻して一年、テレビ番組で特集がありました。要するに湾岸戦争でイラクの蛮行が押え込まれて、中東とにかく平和の道筋が出来てきたという視点で、現場のアラブ民衆がどう傷ついているかという視点は弱い。中東は非常に遠い、われわれには関係ない世界だ。日本人でよかった、ああいう戦争と殺戮の世界にいたくてよかったと、人間の悲劇がぼけてはっとして話が終わってしまふような戦争論には危険性があります。

では僕は中東のことをどんなふうに考えるのか。僕は、そこにいる生活者の視点から問題を立てていきたい。それともうひとつ、中東とか日本とか、世界地図の境界線をとっぱらったところで、自分の生きている世界と中東に生きている人の世界をつなげて考えたい欲求があります。

ちょっと乱暴ですが、「北海道・三池・沖繩とパレスチナ。

クウェート・エジプト」と並べてみました。われわれの住む世界に起こっている事態、あるいは歴史を重ねあわせて、中東を見てみようという試みです。北海道（＝土地）、日本の近代の歴史とともに、そこに住んでいたアイヌの人々がどこかされて、土地を奪われていった。そのことはパレスチナの土地を奪われ追放された人々の問題に重なります。

三池（＝石炭）はクウェート（＝石油）と対応しています。要するに今回の戦争はサダム・フセインの蛮行行為ということでわれわれは見てきたけれども、石油基地で働いている多くの出稼ぎアラブ民衆の視点から見ると石炭を掘り出していた三池、そこで働いていた人間たちがはらんでいた問題に重なります。テレビでは、石油の燃えている所は後一年か二年しないと鎮火しないという問題として語っていましたが、あそこで石油を掘り出していた労働者から見れば呪いの火ではないか、と僕は思うのですね。つまり日本では先程のお話にあったような植民地化によって朝鮮や沖繩から連れてこられた人たちが、地底で這い隠って石炭を掘っていた。すなわちわれわれが使う黒い石、その裏側に地獄がつかっていた、そういう構図としてクウェートの石油なり今回の戦争なりを見たい。

沖繩、在日米軍の基地の二六％を一手に沖繩が引き受けている。その中で暮らしている人が基地をどう受け止めている

のか、戦後の歴史を生きてきた中で出会う理不尽、悔しき、非人間的な矛盾。そういうことを考えると、エジプトが浮かび上がる。エジプトは今、「勝ち組」とかでたたえられていますが、それも、それはこの間の湾岸戦争を支えた軍事的寄与のためです。しかし、エジプトの民衆はどういう暮らしをしているのか。人々の暮らしは本当に幸福なのか。これはおそらく沖繩の人々のことを考えればわかる。

そのように考えますと、戦争の現場だけが危機の現場なのではなくて、クルド人のことも含めていっぱい問題がある。その中でも特に大きいのはパレスチナ問題です。中東において土地問題を媒介として、自分たちの生活を破壊され呻吟しているのが「パレスチナ人」と呼ばれる人々です。この人々を私たちは「難民」と軽く呼んだり、PLOもだめになったとか言い募る者もいるが、パレスチナという場所が何なのかを知っているのかと僕は聞きたい。土地を奪われたことによる人間の問題が北海道で起こってくるのが一九九〇年代ごろ。パレスチナでもその時期に土地を奪われ始めている。今日はそのようなパレスチナ人に話を絞っていきたいと思います。ご存じのようにパレスチナの土地問題というのは、ここにイスラエルという国家ができたことよって決定的に生じました。イスラエルができた（一九四八年）ことよって、**図1**の矢印のように外側の周辺のアラブの地域に難民として押

し出された人々の運命が、おそらくアイヌの人々の運命と重なるでしょう。

地図で黒くなっている所は、イスラエルが占領しているパレスチナです（一九六七年以降）。特に地中海に面した細長いガザという地帯について見ていきます。**図2**に入植地とあるのは、イスラエルがパレスチナ人の土地を奪って占領してユダヤ人が入植している所。居住地というのは、もともとガザに暮らしていたパレスチナ人たちが暮らしている所で、大変少なくなっています。難民キャンプというのは、イスラエルができて放逐され、収容された人々が四十何年暮らしている場所です。これがパレスチナ人の住んでいる場所として一番大きい。住宅計画というのは、更にパレスチナ人から土地を奪ってユダヤ人の土地に変えられようとしている所。真ん中を通っている鉄道線は、占領地になったことよって廃線になってしまった。これは、北はシリア、レバノンから、南はエジプトまで、かつてはアラブ世界における生活と移動をつないでいた、重要なパイプだったのです。

人間の住む場所が区分けされ、制限されて、生活のパイプが寸断されている。言わば、人間はここに住むな、ここにいられないものは出ていけ、こういう論理が働いている場所、それがパレスチナ占領地です。ここにパレスチナ人たちは追い込まれ、更に追い出されようとしている。イスラエルが



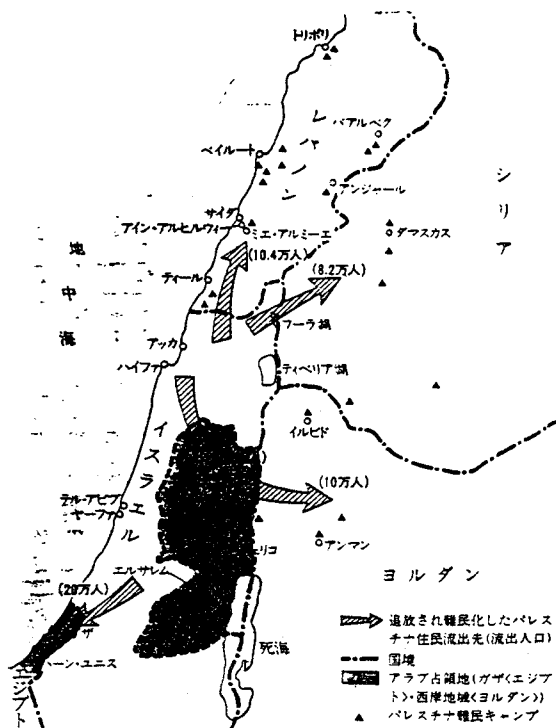


図1 イスラエル建国によるパレスチナ・アラブ住民の難民化状況と難民キャンプの分布 (1950年)

この絵では、石を投げて捕まえられた子供たちがイスラエル軍に連れ去られようとしています。それを見ている子供たちや母親が、哀願している。この絵では、石を投げて捕まえられた子供たちがイスラエル軍に連れ去られようとしています。それは抵抗し、兵士と渡り合っています。これが、中東の本当の意味での危機の現場なのです。日本では、国民世論の今や八〇パーセントがPKO(平和維持軍)オーケーだという。PKOはこの民衆の危機にどう対応するのか。その視点をわれわれは失ってはいけない、と僕は思います。

四年間続くインティファダの中で殺された人々の数は千人に、負傷者はその何倍にも達しています。しかし彼らは殺されても殺されてもこの抵抗を止めようとしません。見てください。この抵抗の激しさを。ヘリコプターは催涙ガスを撒き、デモに集まっている子供たちの上にプラスチック爆

中東国際平和会議のテーブルをつくことを決意したというところですが、ガザの土地をどうするのか、それには一切触れようとしません。ここにいるパレスチナの人々の土地と彼らの生活は無視される。そのことに対してわれわれが怒りを持つかどうか、そこが、中東を見るときの動機になってきます。

中東平和にとって最も危険な要素はパレスチナ問題だと言われています。パレスチナ問題が解決しなければ中東平和は

あり得ない、だからこれからも中東平和会議は、パレスチナをどうするのか(パレスチナ人をどう封じ込めるのか)というところでずっとやられていくでしょう。

さて、お手元の絵(図3)を見てください。これが今パレスチナに起こっている抵抗の図です。パレスチナではイスラエル軍に対して占領地のパレスチナ人が石つぶてをもって抵抗するインティファダ(民衆蜂起)が、もう四年間続いている。この絵では、石を投げて捕まえられた子供





パレスチナの子供の絵 「The Palestinian Situation」  
(Sarah Graham-Brown: 著、World Alliance of YMCAs: 発行) より

図 3

弾やゴム爆弾を落とします。ソフトな爆弾のように聞こえるけれども、実は極めて性能よく子供たちを即死させる。それがアメリカからとうとうと流れて使われているという、そういう絵なのですね。抵抗というと、僕たち日本人はこれまで、武力闘争と考えてきた。しかし闘うだけではもけません。やはり生活をしなければいけない。喜びや悲しみを共有しあう、そういう等身大の生活を、抵抗の現場の人々もわれわれと同じように日々体験しており、そのことを自分たちの平和の証と思うからこそ、彼らは体を張って抵抗する。つまり抵抗するということは自分たちの生活を守ることなんですよ。こういう視点を、われわれは獲得すべきだと僕は思います。

この闘っている姿を、具体的な生活の面で見ても思います。パレスチナ人の七〇パーセントは難民キャンプに押し込められています。ガザでは人口密度は香港並み、世界で最も人口が密集している生活条件です。その場所でのような抵抗が起こればたちまち二十四時間の外出禁止です。夏は四十度から五十度の暑さの中で、まず子供たちが脱水症状を起こします。水や電気を止める。生活を破壊することが占領軍の手段です。そのとき人々はどうのように対抗するのか。ある家では子供たちが全部軍に捕まって刑務所に入れられている。働き手を失った残された家族はどうするのか。それはも

う、一家族の問題ではない。周りがみんな支えあっていく。こうしてインティファダをやっていくのですね。

人々を支えているもうひとつの大きなものは、彼らの中の記憶、彼らの持っている文化、彼らの持っている習慣です。

ここに貼った絵（口絵参照）は、ガザ最大のジャバリア難民キャンプに住んでいるある日曜画家の描いたものです。この人は一九四七年生まれの難民で、一歳のときに彼の村はイスラエル軍によって包囲され、人々は追い出され、村は破壊され、イスラエル人の町に変えられてしまっ、もう跡形もない。彼には村の記憶がない。しかし彼は難民キャンプの中で、父親から自分たちの村の生活を克明に聞いて育ってきた。その記憶を彼はこの絵の中に留めている。

絵を見ると、ここに Heritage と画題があります。文化的な遺産ということでしょう。パレスチナ人はイスラム教徒が多いから、イスラム教最大の祭、ラマダン（断食）明けの謝肉祭を祝っている。最大のごちそうの羊が、宗教的手続に則って殺されて、今男が肉を作っている。大きなオリーブの樹の下では母親が土製のかまでパンを焼いている。子供は焼いたパンを一枚もらって、肉が焼けるのを待っている。そのまわりではお祭の祝いをする若者たちがパレスチナの民族ダンスを踊っている。黒人が笛を吹いている。その後ろの方ではたくさんの子供たちが見物している。つまりこの日曜画家

は、自分の知らないパレスチナの村を絵に留めながら、実は自分も見ている子供たちの中にいる。こういう世界が自分たちのパレスチナなのだ。ずうっと昔に先祖がアフリカから奴隷として連れてこられたのかもしれない。先祖がここに根付くことによって、今やアラブの黒い村人となって笛を吹いている。大変かわいい子供たちがいますね。パレスチナにはいろいろな目の色の子供たちがいます。十字軍が入ってきたときに根付いたヨーロッパ系の子供たちもいます。あらゆる種類の混血がこの村の絵の中にも見られるのです。いろんなものが混ざって、しかもこんなに楽しくやっている。これがパレスチナだ。彼が絵の中に描き続け、人々が絵を見たときに、今の難民キャンプはたちどころに消えてしまう。人々の中に息づくそういうことのひとつひとつが彼らを支えていくのだろうと僕は思うのです。

われわれは、自分たちの置かれている世界を固定化し、長いものには巻かれるということ、その世界で諦めて沈黙していく。しかし生きるということにおいて、広いつながりを軸にして考えていこう。自分たちの生きる世界を未来に向けて作っていこう。こういう意向がパレスチナ人の中で脈々と生きている。その瞬間、ゲッターのような難民キャンプは、彼らの生きる場所として復元してくる。パレスチナ人が彼らの難民キャンプでの生活を作り替えて、そこで闘ってい

くとすれば、パレスチナ人たちを黙らせることはできないんじゃないか、と思います。こういうパレスチナ人の意志力がイスラエルにかかっていればこそ、イスラエルは、中東の世界はパレスチナ人を押さえられない。彼らを押さえこむのはおそらく、ナチがやったジェノサイドで完全に殺し尽くし焼き尽くすということまでやらないとできないのではないか。人間はやっぱり、生きるということにおいて力を発揮するのではないか。自分たちの文化、そこにおける人々のつながり、そういうものを自分たちの手の中に獲得することによって力を発揮しているのではないか。僕はこのパレスチナ人たちの姿を見て思います。

われわれは、アウシュヴィッツ、アンネの日記、ということでユダヤ人を考えている。ユダヤ人が、もしもその先に彼らの真の解放を考えるならば、今のパレスチナ人に対してどう共存の視点を持てるのかこそが、彼らの解放の鍵になると思うのですね。

私たちの生きている世界は、在日の人々をたくさん抱えながら、こういう問題を実はなおざりにしてきたのではないか。ぼくらは外側の世界に目は向けるけれども、自分の世界にそのまなざしをもう一度もどしてやることはしない。ここからおそらくぼくらの、「民主化」だとか「自由」だとかいう問題が鈍くなってくる。どこかやはり「日本はいい所だ」

というところに逃げ込みたい心理がある。そういう立場は、自分たちだけの狭い世界を作ろうとする人のなせる業につながっていると思うのです。

**有光** 国際化、国際貢献ということが、国の内外から迫られ、日本の社会が、より開かれたものになっていくことは確かだと思うのです。その中で、一つのポイントが、恐らく民族問題ではないかとお二人の発言を聞いて思いました。

私共の「アジア人権基金」は、一九九〇年十二月に発足したばかりです。アジアの民衆レベルのつながりを求める市民運動は、一九七〇年代から様々ありますが、「人権」というテーマでの活動は非常に弱い分野です。ヨーロッパ、特にフランス、アメリカでは、「人権」は、外交上も非常に重要な柱になっていますし、90年代最大の課題は「人権」と「環境」であるといわれています。

日本でも「環境」はかなり認知されて、今や企業が社内に「地球環境対策室」を作るような時代になってきました。政府や財界も「環境」ならお金を出す、という時代ですが、「人権」というのは弱い。その最も弱い「人権」に取組むために、一つの恒常的なしくみを作ろうと、三年ほど前から準備をしてきたものです。具体的には、特に先住民・子供・女性・農民の人権を守る。もう一つは、日本の戦争責任や、戦後補償なども含めてやっていきたいということです。

活動開始直後に湾岸戦争が起き、三月末からクルド難民が百七十万流出し、四月末、バングラディッシュで大きなサイクロンが起き、六月にフィリピンのピナツポ山が噴火するという、非常に大きな人災・天災が次々に起きました。必ずしも救援団体として発足したわけではないのですが、あまりにも規模が大きいため、放置できないということで可能な限りの緊急救援活動を実施しております。

現在は、フィリピンのピナツポ火山の被災者の救援活動に取り組んでいます。規模は、雲仙のほしいたい四百倍の今世紀最大の大噴火です。ただ幸いなことに、直前の避難が成功しまして、噴火そのものである犠牲者は最少限に食止められたと思います。首都マニラからちょっと北、東南アジア最大のクラークという米軍基地のある地域、スービックという海軍基地を含むルソン島中部の地域、今回被害にあっていますのは、サンバレス、パンパンガ、タルラック、それから戦争中の死の行進で有名なバターンという四つの州ですが、そこに火山灰が大量に降りまして、ひどい所では、二、三メートル積もっています。難を逃れて、公会堂や教会に沢山の人が逃げこんでいたのですが、その屋根の上に火山灰が積もりすぎて屋根が落ち、沢山の方が亡くなっています。

大噴火の後、六月の末から本格的な雨季に入りまして、今ものすごい洪水が出ています。ピナツポ山周辺に十六、七本

の川があるのですが、そのすべての川が氾濫しまして、いったん家にもどった人は再び避難しているという状況です。土石流泥流で、まだ五十万人が避難しています。特にタルラック、サンバレス、パンパンガの三州では、大変な被害が出てまして、橋が落ちたりしています。首都のマニラでも、そのあおりを食って、八割が冠水するという、七〇年代以降最大の被害です。

これに対して政府の対応が遅れていまして、被災地の避難センターで生活している人は、六月十五日の最初の噴火以来四〇日以上も、小学校や野外のテント一八三箇所、約十四万人が生活しています。豪雨で下はドロドロ、食糧は慢性的に足りません。一番大きな避難センターには、五千世帯、二万人ぐらゐが集中して生活していますが、し尿・ゴミ処理が全然できなくて、水が溢れていますから、伝染病などの危険もあり危機的です。

先週の木曜日、中山外務大臣がオロンガポ近くの避難センターを訪問したその日に、そのセンターで四人の子供が亡くなっています。一時フィリピンのネグロス島の子供たちの健康状態が大変悪化しまして、一九八五年にユニセフが非常事態宣言を出しました。ネグロス島は、砂糖の産地なのに砂糖の構造的不況で、子供たちが飢えて一年間に千人も死んだのです。日本でもネグロスキャンペーンをやりましたが、その

時よりひどいと感じました。しかも、避難センターでの生活が、かなり長期化しそうなのです。フィリッピンの政府、州政府はそれに対して恒久的な代替地を与えると言っています。が、いつのことになるか分からない。米軍基地が返ってくるのは、来年の九月ですから、非常にシビアな状況です。来週、記者会見をしてピナツポの被災者の方々の救援活動に、力を挙げて取組みたいと思います。

被災者の大半が、いわゆるフィリッピン人とは、顔形・ひふの色が違います。ピナツポ山の周辺には、大体四万人の少数民族が住んでいて、アエタ、アエタスと呼ばれています。今回の最大の被害者が、そのアエタの方々です。ネグリティ系といわれ、スペインが入ってくる前から住んでいる人達です。この人達はタガログ語をしゃべりません。昔から狩猟で生活してきました。最近はかなり定着して、農業も始めていますが、もともとお米は食べないで、木の根やお芋を主食にしています。それに対して政府やNGOがやっている救援活動は、一家族に対して、米3kgとイワシの缶詰、地元産のラーメン3袋というメニューでの配給です。イワシの缶詰なんて食べたことがなくて、イワシを缶から出して、一生懸命水洗いしたり、イワシは捨てて、缶の中に残った油を頭につけたりとか、そんなトラブルがあったようです。つまり、その位違う生活をしている。

フィリッピンは、皆さん御承知の通り、約七千の島から成り、各島ごとに全く異なる文化があります。従って、救援活動をしても、必ずその中で民族の問題、文化の問題が出てくるのですね。アエタに対する差別、蔑視は非常に厳しいものがあります。避難所の中でも物資が公平に配られないとか、町の小学校の避難所では、アエタの子供たちを校庭から外に出さないように、州政府が指示しています。それに抗議して、政府の避難所を出て、火山灰の積もっている荒野にテントを張って生活をしているアエタのグループもあります。

市民活動とか、NGOの活動の中でも、先程指摘されているような民族の問題、「違い」の問題に対する理解や文化に対する配慮を持たずに、とにかく出掛けていくこと、物資を贈ることがいいことだとか、単純な思い込みでやっているとか先々でいろんな問題を引き起こします。

五月の中旬に私はバングラデシュにも行きましたが、こちらも今世紀最大規模のサイクロンに襲われて、三十万人以上の方が亡くなっています。被災地はベンガル湾沿いの海岸地帯ということになっていますが、サイクロンは、その後には海岸からチッタゴンという都市の周辺を通って、陸地を北上しています。その北東の地域はバングラデシュの中で、モンゴロイド系の少数民族が住んでいる地域です。バングラデシュにも、これらの人々に対する差別があり、

政治的な諸権利を剝奪されている上、軍によって管理され、外国人は一切立入れないので、どれだけの被害が出て、どんな状態なのか、全然外に伝わってきませんが、バングラディッシュにおける'90年代最大の問題は、その少数民族の人権回復ではないかと指摘されています。ですから、南の国の台風の救援ということで現地に入るにしても、その国の民族や文化、社会問題についての配慮が必要です。そういう問題について、私達はもっともって勉強して、様々な努力をしていかなくてはならないと思います。

**小木曾** お三人の方のお話は、等身大の生活レベルからのものでした。それぞれのかかわっていらっしやる世界のことでありながら、実は日本のことを話されました。

私は文京区にあるアジア文化会館でアジアの留学生と一緒に生活しながら、留学生の問題に取組んで来たのですが、アジアの留学生から実にいろいろなことを学びました。それぞれの人が生きたアジアの問題を持ち込んできます。もう一つは、日本の社会の矛盾が留学生の上に起こっている。留学生は、日本の社会の鏡になっていくのです。

他の方の話を聞かれて、御意見や御感想がありがたいと思いますので、もう一度李さんにもどってお話し下さい。

**李** 私は在日朝鮮人として、民族という問題でずっと悩んで来ました。まだ解決していませんが……。パレスチナ問題

には、韓国で民主化を闘っている人達も注目していきまして、共通点も多いですね。祖国を奪われ、朝鮮半島は統一していませんから、南北の離散家族も多いですし、北にも南にも行けないという在日朝鮮人もたくさんいます。ですから自分の国というものを、いっそう強く思い描くので、先程の絵の説明は、まさに朝鮮人の思いにびったり重なる問題です。

東西の冷戦が終わった後、現代世界の抱えている大きな問題は、第三世界だといわれていますが、在日朝鮮人の問題は、まさにそこに連なるものです。藤田さんが、パレスチナ人を黙らせることはできないだろう。それをやるなら、ジェノサイドみたいな形しかないとおっしゃいました。一九八〇年の光州事件で、政府発表では二百人、運動側の発表では二千人が死んだ、といわれたのですが、光州事件を契機に、韓国ではアメリカとは何なのか、という問題が一挙に噴出ししました。自分達や朝鮮半島にとって、どういう存在なのかというところが、隠しようもなく出てきてしまったのですね。

韓国軍は、米軍の許可がおりないと移動させられません。それなのに光州に韓国軍が移動して、市民を殺したのですから、明らかにアメリカがOKのサインを出したということです。反米なくして朝鮮問題は語れないということがはっきりしてきました。そういうことから藤田さんのお話は、本当に自分自身の問題とびったり重なりました。



有光さんもおっしゃっていましたが、日本では人権が弱いということ、ほんとうにそうだと思います。国際人権規約とか難民条約とか批准されましたが、日本政府に人権という感覚がない、ということは在日朝鮮人が一番身に染みて日々の生活を通して感じております。

藤田 李さんの今のお話は非常に感銘深いです。僕はパレスチナのことを考える時、在日朝鮮人の方たちのことが念頭にあります。また、日本人という枠の中にいながら、差別を強いられていた人々、そういう中で問題を考えていくのが、ぼくにとって非常に大きな関心です。我々の認識というのは、一つの認識の枠組みを作らなければならぬ。ところが認識を作ったとたんに、認識によって逆規定されていく。認識の枠内に入らない側との関係はどうするのか？これが抜ければいい、というミーイズムに足をさらわれていく。

在日の人々に、我々が民族という概念を絶えず押しつけている。そういうことから自分たちを解放しないのなら、我々の自由とは何だろうと思いました。パレスチナの人自身は抑圧の対象だけれども、実は抑圧をしつづけるユダヤ人自身が自分たちの解放という問題で苦しんでいます。占領地で銃で痛みつけばつけるほど、自分がナチの兵隊に見える。そういうことで精神的におかしくなっていく。こういうイスラエ

ル人がたくさん報道されています。自分が人間でなくなっていく。そのことの痛みが抑圧する側にどう出てくるのか。自分たちも抑圧されている側も、共に解放されるということ。僕は考えていきたいと思っております。

有光さんのおっしゃった開発は人権問題にかかっているという点は、アジアでもやっぱりそうか、と改めて教えられました。恐らく湾岸戦争はアジアの開発がはらむ問題であり、その現場には、こういう人権・民族問題がいつぱい起きていたはず。そういうことを抜きにして、石油利権をもとにして中東を勝手にしている、我々は抑圧者になっている、と言われるゆえんがあるのだと思います。

有光 李さんがおっしゃったアメリカの意図について、私も気になることがあります。湾岸戦争後、国際的な援助団体がとまどっていますのは、戦争を引き起こしたアメリカ軍がクルド難民救援活動の最前線に出てきて、トルコ領に出てきたクルド人難民七〇万人をイラクの北部、ザボールに大きなキャンプを設営し、力で押しもどしました。その後バングラデシュのサイクロンが起きた時、現地に行つて非常にびっくりしたのです。米軍が一万人も救援に来ていたのです。

日本は、東京と大阪の消防隊の小形ヘリコプターを二台持つて行ったのですが、余り役に立たなかった。米軍は、中東帰りの部隊とフィリピンからも部隊を呼び、総勢一万人が大

型双発プロペラのヘリコプターで大ピストン作戦をして、大  
変貢献したということになっています。米軍のヘリは一機5  
tの資財を運ぶのに、日本のヘリは0.5tですから圧倒的な差  
をつけられたのです。

アメリカは、何故そういう行為をしたか？ 湾岸危機、湾  
岸戦争の時、バングラデシュで物凄い反米運動が起きました。  
これに対し、人気を挽回したいというのが一つ。それからバ  
ングラデシュの被災地の最南端に小さな島があります。フィ  
リピンのクラーク基地をやがて放棄しなければならぬとい  
軍は読んでいまして、その島に空軍基地をつくりたいねらい  
があるそうです。バングラデシュの識者やジャーナリストが  
指摘しています。そういう下心があるものですから、大デモ  
ンストレーションをした。ところがピナツポの大噴火の時  
は、真先に米軍が逃げてしまった。長い間あれほどフィリ  
ピンにお世話になっておきながら、さっさと逃げてしまった。  
湾岸戦争の時、環境保護団体などにボランティアで来てい  
るアメリカ人と話していると、他国籍軍の侵攻を支持してい  
る人がかなり多かった。アメリカの上下両院が非常にまとも  
って、宗教者までブッシュの戦争方針支持に傾きました。ロ  
サンゼルスのカリスタル教会の大聖堂で、牧師が「サダムフ  
セインを殺せ」と叫び、星条旗を大聖堂の正面に掲げ、それ  
が大スクリーンのテレビに映されて、教会で数千人が国歌を

合唱するという異常な風景に驚きました。私もアメリカのデ  
モクラシーや良心に幻想を持っていたのですが……。

もう一つ、李さんの「日本には人権というものが無い」と  
の御指摘ですが、本当にそう思わざるを得ないような現状を  
内外に抱えていると思います。「人権」というのは十八世紀  
フランスで確立されたコンセプトだと思うのですが、アジア  
ではなかなか根づいていない。フィリピンは、アメリカン・  
デモクラシーの影響をかなり受けていますから、活動家たち  
は「人権」「人権」とはつきり言うのですが、タイあたりだ  
となかなかそう言い出せない雰囲気がある。シンガポールと  
かマレーシアでは、政府の力が強いですから難しい。インド  
ネシアは、最近になって漸く「人権」と言えるようになりま  
したけれど、依然厳しい状況にあります。中国やビルマは、  
御承知の通りです。日本だけでなく、アジアレベルで「人権」  
というコンセプトが育っていないという気がします。

日本でも、自由民権運動の流れや、水平社、部落解放運動  
に受け継がれている重要な闘いがありました。残念ながら  
すべて押し潰されて大東亜戦争に行き、全体的に見た場合は  
本場に「ない」と言っているくらい、まだまだ弱い。それは  
何故なのかということ、日本固有の問題として扱うだけで  
なく、東アジア・東南アジア共通の問題として考えてゆかね  
ばならないと思います。

藤田さんの示された絵は、朝鮮半島で日本軍がやってきたこととほとんどダブリますが、最近も起きていることです。高校生の韓国への修学旅行がふえ、百二十何校、五万人近くの高校生が韓国を訪問しているそうです。ところが、韓国の高校には、反日・嫌日の声が高まっています。高校生が万引きをしたり、女性に失礼なことをして、とてもじゃないけど受け入れたくないという声相が相当挙がっていて、急拠対策委員会を作って、検討を始めています。

**小木曾** ありがとうございます。李さんが、日本政府の政策は、同化か追放しかなかったと言われたのですが、日本人の外国人に対する意識は、根本的にそこにあると思います。最近、外国人労働者の受入れをめぐる、鎖国論を唱えている人がいますが、これもおかしいことです。江戸時代の鎖国と異なり、日本人が世界中に出掛けて行って、いろんなことをやっている。それなのに入るほうはダメという身勝手は許されない。日本人と同じ権利と義務を持つ外国人が、日本の社会の構成員としてどんどん増えていく。この人たちとどう折合っていくかということが、国際化といわれている中で一番重要で大変な問題なのです。

では、フロアーの皆様から御質問・強意見をいただくセッションに入りたいと思います。

ぜひ、あなたの座右に！

親も、教師も、学生も

ウイ書房の近刊 予価一五〇〇円

小沢牧子著

『心理学は子どもの味方か？』

— 教育の解放へ —

「……その仕事を十年ほど重ねた頃、月刊雑誌『新しい家庭科—We』に、「教育のなかの心理学」と題する連載を執筆する機会を与えられた。大学生たちと考えあうというスタイルを心がけながら、そこで綴ってきたたくさんの小文に手を加え、これまでに書いてきた他の文章を合わせて、一冊にしたものが本書である。

教育のなかに組み込まれている心理学の素顔は見えにくい。私たちの生活に次第に深く入りこんできている心理学のうらおもてを見さだめ、それを生活者の視座からどうとらえるのか。その論議に役立てていただければありがたいと思う。とくに、学校現場の教師たち、教師をめざす学生たち、そして何よりも子どもと共に生きていくことの困難がたちこめる時代の中で、迷い悩んでいる親たちに、私の心理学への問いを共有していただければうれしい。……」

(「はじめに」より)

## ◆ 質疑に入って

児島 李さんに。日本には人権思想が乏しく、戦後も女性の抑圧が政策でした。経済は

大きな力を持つが、人権は認められない。東南アジアや朝鮮に対しても、男性が女性にしたと同じことが、行われています。李さんは日本のフェミニズムに対して懐疑があるとおっしゃった。そこをうかがいたい。

李 今おっしゃった発想そのものが、女性運動やフェミニズムで語られることが多いですね。天皇制に男社会という論理をつけたり、アジアに対してやってきたことを、日本の男が女に対してやってきたことと同じというのですが……在日朝鮮人の私の立場から言うと、どうして女の人だけがボンと抜けるのか。日本のフェミニズムには、朝鮮に対する視点が全くゼロ。欧米の後追いばかりして、在日朝鮮人の問題に対して、フェミニズムの観点からきちっと見たことが一度でもあるのか。単なる朝鮮の視点の欠落だけでなく、日本社会全体の歴史性に対する視点が欠落しているということです。

上野千鶴子さんは、アメリカの黒人差別に

ついては触れていますが、在日朝鮮人については一言も触れていません。そういう姿勢そのものが、日本の知識人の最先端をいく姿であると感じています。

小木曾 いきなり問題が核心に入りました。非常に重要な問題ですので、関連してご質問なりご意見なり、いただきたいと思えます。

半田 李さんの話を聞いて、'85年のナイロビのNGOフォーラムを思い出しました。私達のグループの中にアイヌの方と被差別部落の方がいて、「女性として、という以上に、アイヌや被差別部落に生れたことの差別を痛切に感じている」「だから夫を男だと思うこととはあるけれど、それよりも一緒に闘っている同志だ」「女性差別よりも大きな差別を世界に投げかけたい」と言われました。その時仲間の一人が「まあ、それは日本の国内における南北問題だけ……と軽く言い、そのことが、お二人の胸にこたえ、旅の間もわだかまりとなっていました。

先日、南北朝鮮の方を迎えたシンポジウムで、李さんが「日本のフェミニズムに対して違和感を持つ。日本に住んでいて、ここが自分のいる土地と思ったことは一度もない」と

発言されました。私は、李さんに、是非そを語ってほしいとお願いしました。最初の質問に対して李さんはそこを答えていただいたし、私がナイロビで抱えた宿題に対する答えでもありました。ありがとうございました。

瀬戸井 メキシコ会議の時、フェミニズムよりも階級問題のほうが切実だという発言をした人の問題は『私にも話させて』という本になり、日本でも『塩を食う女たち』という本が出ています。日本にも、男女差別のみでない、経済的なものも複合的にみていこうという動きがないわけではないと思います。

アメリカの有名なフェミニズム・アーティストのジュディ・シカゴもラディカルな女の問題を主張した人だけでも、白人女性としての自分から一歩も出ていません。アメリカの黒人問題、アフリカのアパルトヘイトと色々言うのであれば、自分の国の、指紋捺捺などに無関心でいいいか、と問わなくては。

そして女は天皇制につながる家父長制の被害者だと言い立てがちですが、皇太子の結婚相手や、紀子さんに赤ちゃんが生まれるとかの記事を喜んで読んでいるのも女たちで、それでは運動も広げられないと考えるのです。どこから糸を辿っていけばその問題にかかわ

ていけるのか大きな課題と思います。

小山 皆さんのお話を聞いて感激しています。特に李さんの話を聞いて、一番身近な問題として在日朝鮮人と私のかかわりあいを思うのですね。また女性は常に被害者の意識しかないのですが、部落問題など考えた時に加害者としての自分をどうしたらいいのだから、と考えてしまうのです。

山口 フェミニスト神学を勉強しています。女性差別は、未だに人間の最も根幹にかかわる問題だという認知さえも受けていないのではないかと思います。アメリカでは黒人解放が先か、女性解放が先かということで、私たちは黙らされそうになりました。北海道ではアイヌ問題と女性問題とどっちが先か、という問いをつきつけられてきました。もうこういう二分法は乗り越えたいと思います。多分、女性解放とか、ウーマンリブという言葉をも、フェミニズムという言葉に置換えたルーツのところに、女性問題は独立した問題ではなくて、男性中心のタテ社会、父権制社会の中で必然的にある人権差別、階級差別、性差別、植民地主義：様々に人間を差別・抑圧の構造の一つとして捕えるという願いがあると思います。女性差別に自分の痛みとして

かかわった人は、それがきっかけとなって、他の差別にも感性をときすまされてきた経験を持つていると思うので、どっちが大変かというところでなく、この問題を語り合っていきたいなあと思っています。

児島 先ほどの李さんの話から、日本のフェミニズムに対して懐疑を持つという意味は分かりました。しかし、日本の女性は、政治学・経済学など、男性と対等にわたりあえる勉強をすると、嫁の行き後れが心配され、結婚して子供を生む生き方をするのだったら、いわゆる「女らしい」科目を選ばなければいけないという現実もありました。

諸橋 日本女性学会に入っております。李さん始め在日の人達に、フェミニズムにはアジアの視点が入っていないと言われ続けてきました。言訳じみですが、日本女性学会の秋期大会は韓国その他、アジアを中心にしたシンポジウムを行い、来春日本で「アジア女性会議」を開催する団体の一つにもなっています。やっと日本のフェミニズムや女性学の研究者たちが、アジア的なパースペクティブで、女性、ジェンダーの視点で考えていくことを始めた段階です。

今、残念ながらアジアや、中東の視点を持

った女性の研究者や、経済学、労働の分野でジェンダーの視点を持った女性の研究者がいない。これは先ほど言われたように、女性は家政学部、男性は社会科学や工学関係というダブルスタンダードがあったゆえんですが、これからは様々な分野で優秀な女性の研究者が出ると思います。遅きに失した感がありますが、女性学・フェミニズムに、アジアの視点が出つつあります。

小木曾 日本人同士が話している所にアジアの人が入りますと、全く違う角度から意見が出て、うろたえることが、しばしばありました。韓国の女子留学生で、大学院で勉強している人に「日本人は、生活の隅々まで天皇制を意識している」と言われて、僕はその時はよくわからなかった。ところが、昭和天皇の病氣から死亡まで、日本人が一斉に自粛し改めてギョッとしました。

私は日本には明治以来、四つの差別があると思っています。「男尊女卑、官尊民卑、中央偏重地方軽視、欧米崇拜アジア蔑視」です。日本にも様々な戦いがありました。そこにアジアなり、世界という光をあてますと違う面が見えてきます。日本の女性問題には、その食違があるのではないですか。

半田 藤田さんが、ある枠の中で認識を作るのは必要だが、それを作ってしまうと、枠の外にあるものを見落とすとおっしゃったことが、私の胸に響きました。フェミニズム、ウーマンリブ、女性差別に関し、私達は、一つの図式でしか物を見ない。そこに、アイヌの方、在日の方、被差別部落の方、アラブやアフリカの方などからの突付ける問題が、私達の枠組みを揺さぶる。私達は一度作った枠組みをガタガタと壊して、もう一度作り直さなければなりません。「違いとつきあう」ということは、つまりそういうことではないかと思うんです。

また諸橋さんが、おそまきながら日本でもアジアの問題を取上げシンポジウムをやるとおっしゃいました。しかしやれば良いと言っているものでは決してないと思うんですね。同じ認識の穴の中でぐるぐる回って自己満足しているだけじゃないかと思うのです。

小木曾 図式的な考えという事で言いますと「年をとった人は時代遅れで期待してもしょうがないが、若者は過去のしがらみもないから、日本とアジアと直ぐ理解しあって仲よくなる」と考えますね。ところが、留学生について言えばそれは全くウソなんです。三

年ほど前、私達の協会でアジアの留学生四百人についてアンケート調査をしたことがあります。大学生三人に一人は、日本人の友達が一人もいないと答えました。駒沢大学で日本の学生に同じような調査をした結果も、それを裏付けています。

日本では、大学生活は、悪いの場、オアシスになっているのですね。大学に入るまで受験勉強に追いまくられていますから。留学生は、必ず日本の学生は勉強しないと言っています。しかし、日本の企業は会社に入ってから鍛えればいいと思っています。

留学生は、高い学資を払って来ているから実力がつかなくては困る。生活のためのアルバイトを日本の学生はする必要がないが、留学生は相対しなければならぬ。様々な違いがあって、大学の中でちっとも交流が深まらないのです。

中嶋 私は今、政治の分野にかかわっていますが、ナイロビで、アフリカの女性達から、日本のODAについて女性の視点がないと突きつけられたことが、最初のきっかけです。中国に行って、南京虐殺の話を知ったり、授業でやったりもしてきましたが、私達一人一人が身近なアジアの方、その

他の人達と付合っていく中から色々な考え方を交流させて、差別を意識的に変えていかなくてはなりません。私もできる範囲でカンパしたりしていますが、それを一歩越えるお話を聞くことができて有意義でした。

伊藤 私は家庭科で女性差別を教えることが大事だ、という問題意識で大阪から来ました。ものすごく来てよかったと思っています。今、在日朝鮮人の解放に向けて、具体的なことをやっていたいかなければならないと思うんです。在日外国人の教員についての国籍条項を撤廃することです。すでに在日外国人を教諭として採用している職場に、非常勤講師にせよ、という圧力がかかっています。私達の組合では一万人近い署名を集めました。自分と同じ職場に、在日朝鮮人が同じ条件で採用されていることが、当たり前だということのように、全国で取組んだらいいと思います。私は一番身近な生徒と共に、朝鮮文化研究会を作ろうと準備しています。朝鮮語という授業を開講させるのか、朝文研を作るとか、そういう具体的なことをやるのが大事だと思うんです。在日外国人の教諭採用については、ここ数カ月が山場ですので、是非夏休みのうちに、運動を作ってほしいのです。

稲邑 私達は全体に民族に対する感受性が鈍い。戦前の歴史のイメージで、国家とか、民族とか使わないで避けていたような気がするので。けれども自分達が日本人だということに向き合えないままいくと、いつか反動で逆もどりしかねないように感じるのです。支配者で加害者でもあった国民が、アイデンティティを確立するのは非常に難しい問題ですが、そこを皆さんがどう考えているか、お聞きしたいのですが…。

藤田 確かに民族というのは、人間のアイデンティティとして重要な局面があると思います。危機的な状況の中で、自分達が生きることがじゅうりんされたり、権利が潰されていく、そのことを危機として感じた人間が、自分達の生きる場所を作ろうという理想として語られていたと思うのです。

しかし、「民族」という語句は、人間にとってポジティブな意味を持ち得たか？ 残念ながら、そうならなかった。そこを前提として考えると、僕らが今、アイデンティティとして民族を求めようとする時、何がほしいのか？ 権力が強調している「日の丸」「君が代」に集約されてしまうのとは違う「民族」というものに、我々はどんな決意を込めるの

か、ということ抜きには語れないと思いますね。我々が「日本民族」ということによつて求めるものは、アジアの中でヒューマンな、白眼視されないような存在になりたい。そのことで言えば、「日本人」のアイデンティティは、先程の女性問題にも重なるかもしれないけれど、日本人じゃない側の人々と一緒に考えるべき概念だと思います。民族という言葉に人間が期待をかける、希望を持つ、そこを問われていると思うのですね。

国際化ということで、国外のことは言うけれど、荒川区の隣の山谷を日本の一部とホントに考えているだろうか？ 3K労働者（外国人も多い）の寄せ場である汚い空間を、我々は遺棄しているのではないか。山谷の労働者が建てた高層建築の中で、大学卒のビジネスマンが彼らのことなど眼中になく働いている。こういう中で、日本人という概念そのものがはらんでいいる問題を捕えなくてはいけないと思います。

僕はパレスチナ人という言葉を使いました。これも暫定的な言葉と考えています。つまり「パレスチナ人」と人々が認識しているのは、国連が「難民」と規定したその枠の中で、パレスチナ人は、自己を規定しなければ

ならなかった。ところが「パレスチナ人」は、受身なものからポジティブなものに変えて主体的な枠組みとして主張しはじめた。こういうように「パレスチナ人」という枠組み自体が動いていく。これがパレスチナ人の強さであり、彼等は自分達がかちとった「パレスチナ人」となりました。

では彼等は、もともと何だったのか？ さきほどアラブと言いましたが、アラブというのは要するに、アラビア語を使い生活空間を共有してきた文化的、歴史的背景、そういうものでしかない。だからアラブ＝遊牧民、アラブ＝イスラム教徒とレッテルは我々が作ったアラブ観の反映にすぎないのです。

アラブには、イスラム教徒だけでなくキリスト教徒もいる。アラビア語だけではなく、ペルシャ語もしゃべる。今や25万人のアラブ人がニューヨークに住み、彼等はバイリンガルどころか、四つ五つ六つの言葉だつてしゃべる。このような人達を考えれば、「アラビア語を共通概念として」なんて言えない。それぐらい、今の世界に於いて、自己アイデンティティは流動的になつてきた。

ジャン・ジュネというフランスの作家がいきました。彼は異色の作家で社会の側から白眼

視されてきた。それゆえに極めてユニークな作家として君臨してきた人です。彼は一キリスト教徒でしょうが、無神論者だと言い張っていました。そのジュネがパレスチナ人の友人に連れられて、一九七一年に、ヨルダンの難民キャンプに彼の母親を訪ねた。ちょうどイスラム教徒の重要な宗教的行事であるラマダン：一か月の断食に入っていた時期でした。がその時、イスラム教徒の未亡人がどんな反応をしたのか。ある雑誌を読んでみます。「ハッサンが私を彼の母親に引き合せた時は、ちょうど断食の月であった。私は自分を回教徒ではないと言い、神を信じてもないのだと言うと、彼女は驚いたふうでもなく、軽蔑も示さず、私を眺めた。彼女は五〇歳に近い寡婦だった。時間は昼近かった。『このお人が神を信じていないのなら、何か食べるものをあげなくちゃね』。そして彼女は私達のために食物を用意した。私がラマダンの、断食の月にいきあつた無神論者だという事実が、直ちに彼女を正しい解答に導いた。昼食を出すという解答だった。彼女自身は夕方まで何も口に入れなかつた。』

異教徒は断食をしないから、食事を与えなければならぬ。そのことをいとも当然のよ

うにやり、自分自身は、イスラム教徒であることを守る。自分とは違うものを、そのままに尊重するという、視点がハッサンの母親にあることに、ジュネは衝撃を受けた、ということです。我々は、ここに、さっきの「民族」の議論で強調したこと、異なるものの存在重視の大切さを見出せるのではないかと。

相手が自分と違つたつて、相手はそのまま生きるべきだし、自分も曲げない。たとえ紛争になつても、相手を自分の論理によって、押しこめるといふ態度だけは慎みたい。僕はこのに復眼を感じますね。イスラム教徒、キリスト教徒、ユダヤ教徒：異教徒の人がたくさんいる。言葉も習慣も出身も違う。そういううごつた煮の世界、これがアラブ・イスラム世界なのです。

我々が欲しがっている民族概念とは何か？なぜ「民族」という概念をまたぞろ頼ろうとするのか。そこのところをはつきりさせない限り、「民族」という言葉は極めて危ういと思ひます。

有光 藤田さんが極めて凝縮したお話をなさつたのでやりにくいのですが、先程半田さんが言われたように、図式でものを見る危険性を感じますね。アジアというものが日本の

社会の中に浸透してきて、タイ料理がおいしいとか、エスニックがどうか。ある種の教養としてアジアを語らなければ、欧米の思想・学問だけでは不十分だということも徐々に市民権を持つてきていると思うんですね。しかし、それに至るプロセスが、本当に内発的・自発的アプローチか？

例えば、湾岸戦争の時のアジア各国の反応を見たつてバラバラです。パングラデシュは反米運動が起りながらも軍隊を出しました。援助が欲しいからです。韓国も軍医と輸送機を出しました。その派遣をめぐつては、ものすごい動きがありました。フィリピンは、沢山の出稼ぎ労働者を抱えています、40万をサウジに残しました。フィリピンとつて、出稼ぎの外貨収入が最大ですから、後の復興で稼がなくては困るといふことで、海外雇用大臣というポストの人が現地に飛んでがんばれと励まし、二百人のドクターを派遣したのですね。インドネシアは安保理の採択で棄権しました。国内に沢山のイスラム教徒をかかえているから、とてもではないが、決議に加われないと。マレーシアは、慎重な態度をとり、特に後半でパキスタンと組んで、和平工作を展開しました。タイは早い段階で、



軍隊のトップが「この戦争は、我が国とは全く関係のない戦争だ」とはっきり言明しました。何と地上軍が突入する前日に、陸軍がクイーターを起こし、チャチャイ首相を放逐しました。アメリカは烈火のごとく怒り、ただちに援助を凍結しました。日本も一時、援助を見合わせましたが、ただちに金原特使が現地へ飛んで、再開しました。まあ、ことほど左様に、対応が違うんですね。こここのところをきちっと押さなくてはならない。

それから「歴史」に対して、認識が欠けていることを痛感します。今問題になっているフィリピンに対しても、熱帯林の伐採で問題になっているサラワクにしても、かつて日本軍が迷惑をかけているのですね。朝鮮半島ももちろんそうですけど、フィリピンのルソン島は、最大の激戦地でしたし、ネグロス島でも10数万人が亡くなっています。

ところが、国際ボランティア活動では、残念ながらそれらが欠落しがちなのです。ネグロス・キャンペーンをした時に、私達は「もう一つの援助を！」という言い方をしました。もう一つという言葉の中には、アフリカだけではなくて、アジアにも飢えがあることと、官民あげての毛布を送る運動に対す

る、もう一つ：オールタナティブとして、具体的に民衆同士の連帯を提起したのです。

このことは成功しましたが、やりたかったのは、歴史的な交わりとか、責任を含めた、本来の連帯・援助・国際交流でした。しかし、そこまでには至らなかつたし、歴史的な視点を欠いたまま、人がどんどん出ていってしまふことに、不安と危険性を感じています。

李 藤田さんのお話に基本的には私も同意見です。朝鮮半島の民族意識と私達はよく言うのですが、永久不滅に民族が一つの真理であるというのではなくて、今現在、私達にとって、民族というのが切実な問題なのです。私達の民族意識を引き出したのは、ある意味で日本なのです。現在でも、第三世界の民族意識というのは、帝国主義が生んだものであって、日本が考えているような国粋主義とは、全く質が違います。私達が民族解放運動という時、ほとんど民衆という言葉に近い。

民族という否定的なイメージがあるとおっしゃったが、日本の「民族」は否定してもらわれないと困ります。民族とは何か、私自身もほんとうに答が出ていない。在日朝鮮人は、日本で生まれて育っていますから、自分の中に日本を刻み込んでしまい、消そうとし

ても消えませぬ。朝鮮半島に行きましても、私達は半日本人と言われます。私は朝鮮人と思っているのですが…。

それから「アイヌか、女性か、そんな二分法は乗り越えたい」というお話ですが、私にとつては、それも違うのですね。初めからどっちが先かというような問題の立て方ではないのですし、ましてそれを乗り越えるとは、どういうことなのか。自分が朝鮮人であること、女性であることを乗り越えられないから悩んでいるのですね。私から見れば、日本の女性運動は、自分の中から女であるという部分だけをつまみ出しているとしたか見えない。私は、女性という観点だけで自分をつかむことはできないし、他の人が、私自身を女性だけの観点で見ることに対して、はつきり「No」と言いたいです。

日本の女性運動が、欧米志向であることに對し、アジアの視点をといることも、根本的に日本のありかたそのものが問われている問題です。朝鮮半島に限ってみても、日本は加害者であり、そのために苦しみ続け、いまなお、血を流し続けているわけですね。日本の女性運動も死ぬほどの悩みを経て、連帯というものが可能であれば可能になるだろう。今

のままそう簡単に二分法を乗り越えられるものではないのです。

小木曾 私たちの会館は、一九六〇年六月にできました。当時、日本の大学に行く留学生は三千人くらいでした。日本が留学生を受け入れるのは、経済協力、教育協力として政府の政策でした。留学生一人一人は自分の肩に国を背負ってきたといえます。それから三〇年たって、今大学には四万人の留学生と五万人の就学生がいます。

また留学の動機が実に様々なのです。以前は理工系が多かったのですが、今は、文化系特に経営とか商学部で、日本の大学を出れば日系の会社にはいれるんじゃないかと。これは日本の経済力がアジアに広がっていることの反映なのですが、その他にファッションとかコンピュータなどの専門学校で学ぶ人が非常に増えています。そして一人一人の留学生が、もう国を背負っていかない。日本の大学で経営を学んで日本で就職できなかったら、アメリカに行く、というように。

留学生には三通りあって、日本の文部省がお金を出す国費留学生、私費でくる留学生、政府派遣留学生です。例えばマレーシア政府派遣留学生は、以前は帰国したら必ず政府機

関に勤めることが義務づけられていました。それが最近、ほとんど卒業後日系の企業に入ったりののです。それに政府も彼等が帰ってくるのをあまり歓迎していない。つまりそんなに沢山のポストがないんです。

留学生問題は以前は南北問題の一環ということでした。依然として南北の格差がますます広がっているという現状があるのですが、その他に最近地球環境問題がクローズアップされてきました。特に、その中の人口問題；南の人口が爆発的に増え、様々な動機による人口の移動が地球規模で始まっています。

政治的・経済的な理由による難民や、チェルノブイリなどによる環境難民、その他に教育難民もあります。自分の国では大学の数が少ないので、教育をうけられるならどこでもいいということ、人口移動が起き、その波が日本にも押しよせているのです。

山口 先程女性問題のことで、二分法を乗り越えようと言いましたけれど、それは女性であること、日本人であることを乗り越えるというのには全く異なるので訂正し、李さんの言葉の重さを受け止めたいと思います。

在日韓国人の女性の友人が最近従軍慰安婦の問題に主体的に関わるようになって、十年

も二十年も前から、一握りだけれど、痛みを以て関わっていた日本の女性に出会ったそうです。その時、初めて自分から歩み寄りたいたい気持ちになったと話してくれました。

私たちは、一人の人間として様々な面で抑圧者・被抑圧者、差別者・被差別者であると思うのです。今日のタイトルにあるように、様々な人との出会いから目を見開かされ、洞察を深くしていけたら、うれしいなと思います。私は自分が痛みを感じた性差別というところを連帯の拠点としてそこに立ち続けようと思います。その時女は被差別者、男は差別者という簡単な図式で語りたとは思いません。自分の中に、差別者と非差別者の両方を抱えている。そしてその中の一部分にしか自分がまだ気付いていないということを、互いに認めあって、出会っていきたいと思います。

酒井 日本の戦後の社会は、欧米をモデルにし、欧米に支配されながら近代化の道を歩まなければならなかった。アメリカの後追いといわれても、私たちには非常に切実な問題をやってきたわけです。社会に対しても、国際社会に対しても、日本の女として自分を生きていくということです。アジアに日本が経済進出するに際して、フェミニストならどう

いう対応のしかたができるかという発想が必須だったと思います。

私は占領期の研究もしてまして、茨城県で占領軍にびったりくっついて仕事をやっていった人達にインタビューしているのですが、民主主義の思想に対して非常に鈍感で、面従腹背だったと何人からも聞きました。こういう日本人の歴史認識は何なのか、自分にも聞きたいと思います。

長谷川 アメリカに留学していたので、日本における留学生との対比という点から発言したいと思います。日本が異質なものを受け入れないということは、非常に根深いのですが、女性問題とはかなり違った形の問題提起が必要だと思います。女性問題でしたら戸籍など法制度的に改善がもちろん必要ですが、男女間の認識からの解放が社会全体でも必要です。留学生や外国人労働者の問題は、かなり法的な部分に関わると思います。

アメリカでは、法に照らして、奨学金でも寮に入るにも、自分にその権利があれば必ず通りました。ところが日本では、それがなかなか通らない。お金が払えても、言葉が話せない人は困るとか、生活習慣が違うという理由で、アパートに入るのを断られる。アメリ

カの発想かもしれませんが「先に法を作ってしまう」ことが必要ではないかと思えます。

アメリカでは、アファーマティブ・アクションといって、どの会社や機関でも、何パーセントはマイノリティや女性を入れなくてはならない。逆差別だと言う男性も出てきましたが、社会的に明らかに優遇されていない人々がいる時には、単に能力主義では追いつかないから、法で定め、そこを出発点とする。

日本の怖いところは出発点がないことです。法をどうかしようということは、日本国内では、カドを立てる形になって、なかなかできない。また、日本では、Weのようなグループにしても、新聞の投書にしても、「この問題について気付きました」でピリオドになる。ではどうするか、という部分がない。「私は知っています」で終わらずに、政治に関しては、自分が投票した議員に「このことについてあなたの考えがわからないと、次の選挙の際の判断材料にならない」と言う。「どこから始めるか」ということが問題なのです。

鈴木 江戸川区で小学校の教員をしています。日本人の社会認識の話が出ましたが、私自身も育てられなかったと思います。大学で朝鮮や中近東の問題を講座でやっている教授

がどの位いるのか。そういう講座は学生が集まらなくて、流れる場合が多いのです。

今、六年生もっています。藤田さんが言われた自分以外のものを大切にするのが学校教育の中で非常に欠けていることを感じます。六年生は憲法を学習できるので私はうれしのですが、何から入ったらいいか考えて、チョーヨンピルの「プサン港へ帰れ」を導入に使い、ここを突破口にして、日韓併合や関東大震災の時の虐殺の話や憲法で保障している人権を取り上げました。必死に授業に使える資料を捜す。それしかないと思っています。

小木曾 違いとつきあう、というのは、藤田さんがおっしゃった複眼の思考を持つことだということが、はつきりしました。これからの人類の課題は地球環境問題ですね。これは全ての人間が被害者であると同時に加害者だという、今までの東西、あるいは南北対立とは全く違う様相を呈しています。日本は北側に入っていますから、アジアの国とは利害が対立します。日本が環境問題をやるうとしたら、アジアの国との対話なしには、対策が出てきません。こういうことも今日の問題に大きくつながると思います。(まとめ 瀬戸井厚子・蔵本佳子・土田尚美・高橋優子)

# 「育つんとと 育てるんと」

中沢

弘幸 さん

(湘南学園理事長)



〈湘南学園とは〉

はじめまして、中沢です。どうして大津にあるのに「湘南学園」なのかとよくきかれます。中国の洞庭湖の南、現在の湖南省省都の長沙の辺りを湘南と言います。昔、琵琶湖のほとりの人々は湖南省に憧れていて、琵琶湖の南に孤児院を開いたところから「湘南学園」と呼んだそうです。もともとは曹洞宗のお坊さんが二十一歳で開いたお寺でした。その人は永平寺の僧堂を出る時、師から「百の堂塔伽藍を建立せしよりも一人の孤児を救済せんにはしかず」と聞いて、住職になるのをやめ、一九〇四年、日露戦争勃発の年に、二十人の戦災孤児を育てるために、琵琶湖周辺のお寺で共同生活を始め

ました。今の場所に学園を構えたのは一九三六年。今までに千三百人近くの子どもたちが育ちました。彼は六十歳の時、京都の山奥の小さなお寺の住職になり、その志を私の父がつぎました。

〈湘南学園との関わり〉

私は六歳の時、弟と、この学園に来ました。僕ら兄弟は寮に入って、皆と一緒に育てられました。父はわが子もよその子も等しく愛せる、と本気で思っていたのですが、僕は父のそういう態度を許せませんでした。

しかし、六歳の僕に何ができますか。寝ること・食べることは、むこうが押さえているし、言うことをきく以外にな

い。だから、強くなりたいたいということばかり考えていた。また弟をかばわなくてはならないが、「僕の弟だ」という言い方はできず、いつも距離をとって、他人を装う接し方しかできなかつた。施設の子どもたちは、兄弟姉妹なのに○○君、××さんという呼び方をしている。それは、僕にはすごくよくわかります。弟や妹がかわいければ、それしかない。僕は学園の園長を引き受けるにあたって、こういう問題は絶対解決していかなくてはならないと思いました。

今から九年前の七月十九日、園長として湘南学園に行きました。私が六歳から高校卒業まで暮らした頃、湘南学園の子どもたちは、ほとんど孤児でした。ところが、九年前には90%以上が親が生きているのに捨てられた子たちでした。両親が死んでここへ来る子どもたちは、親から裏切られたのではない。少々苦しい生活でも、人間を信頼することを持ち続けてきていました。だから善良な大人に接した時、自分との関係に信頼をつないでいけた。しかし、親が生きていて捨てられるほど、人間にとって大変なことではない。親から切り離されて学園で生活し始めると、特に小さい子はみんな泣いています。ひどい子だと、ごはんも食べない。脱水状態になる。

湘南学園には「入口の家」というのがあります。保母が児童相談所の一時施設に向き、子どもに湘南学園のことを、

その子なりにわかるように説明して、一〜二日遊びに来させます。約束の日、「入口の家」で子供を待ち、その子と一対一で生活を始めます。このやり方で子どもを待つのと、○月×日に突然入園するのでは、子どものショックは全然違う。

僕は、中央児童相談所にいた時、子どもの移送（嫌な言葉ですが）をよくやりました。その時、僕は、午前中でなければ、天気がよくなければ、子どもを施設に送らない、という抵抗をしてきました。どの学園にその子が行くかを決定する措置会議があります。僕はケースワーカーとして、その会議に出ましたが、どんな小さい子どもも、自分の将来を決定される会議に参加すべきだ。自分のいない所で決められるのでは、子どもたちにとって残酷すぎる、と主張してきました。「二歳の子どもからどんな意見をきくのか?」「いや、二歳の子にも、その子なりの聞きようはある。会議の中で、その子を見ながら、その子の将来を議論すると、小さいからわからないと言って、大人が全て決めてしまうのでは、結果において違いがある」と。

当時、僕は天気の良い午前中に、子どもを自分の車に乗せて施設に送って行きます。行くのをしる時は、琵琶湖の見える山の中腹まで登って、子どもと話をします。家庭崩壊ですごいショックを受けている子どもたちに、さらにいわゆる収容施設に送るショックを与えることについて、自分の権限の

中で、和らげられることはやったつもりです。だから私は、湘南学園に行ったとき、措置会議で勝手に決めさせずに、うちは職員を送ろう、としてきました。

子どもが泣いている間は、我々は子どもとの生活を始めることができない。子どもたちはやがて泣きやみます。が、それは小さいなりに、「自分の親はもう迎えに来ない。私は捨てられた」ということを見極める時、人間を信じることをやめてしまう時なんです。次に出会う善良な大人に対して、子どもが「信用してもいいかな」って思う時、笑顔を向けたら、ちょっといいを出してくることがあります。でも、すぐ思い直してやめてしまう。裏切られる怖さを、いやというほど知っているから。でも、人間を信頼しなくては、人の話もきけません。子どもたちにいるんな話をして、子どもたちは「知らん」「わからん」と単語で返してものを考えようともしない。人の言葉を自分の世界にもって行けずに、入口のところで返していく。これは、学校での先生と生徒の関係でも同じです。こういう時、教師は生徒から信頼されていないことを自覚すべきです。自覚しなかったら何も始まらない。

#### 〈湘南学園についてきたこと〉

職員はトレーナーの上下の服装でウロウロしており、その格好で「働いている」。自分が正しいと信じて疑わないという、福祉の社会に典型的な主任保母に、「あなたはここで仕

事をしていると思っているが、子どもたちは生活している。人が生活している所で仕事をするな。せめて、邪魔をするな。そして、あなたの何の科学的根拠もない基準を子どもたちに押しつけるな……」と言ったことがあります。

学園の小さい子どもたちが全員、腹を抱えるか、うつぶせになって寝ている。中には、涙を浮かべて寝ている子もいるんです。だから、子どもたちは朝、目やにがすごく多い。昼間は、大人がいろんな規制をするのに合わせて子どもは演技をしている。だけど、寝てまで演技はできないから本当の自分を出してしまう。こういう状態に、子どもたちの無念さを見るのです。

もうひとつ、学園は朝から晩まで、チャイムが鳴るんです。僕らが学園で暮らしていた頃は、親父が鐘を振っていました。百八十人の子どもに対して職員三人で、食事や人を集めるのに、鐘が必要でした。が、僕が園長になった時は、六十人の子どもに職員十四人。少ないけれど、チャイムで集めるほどではない。

ある日、夕食のチャイムが鳴る六時に、僕はチャイムのスィッチを切り、食堂の入口に立って待っていました。五分、十分……くらいまでは誰も動かない。十五分くらいたつと、寮の窓がちょっとあく。そこから子どもたちが覗いているん

です。チャイムも鳴らないのに出て行くと思われず、チャイムが鳴らないと、子どもたちは食堂へ集まれません」「お前らは、チャイムが鳴らんと腹が減らないのか?」

日本語で話しているんですが、日本語のグラウンドが違うから、いつまで話しても、ちががあかないので、四十分遅れたところでチャイムを鳴らした。すると何事もなかったかのように、五分くらいで食堂に集合する。リーダーの合掌、号令に合わせて「いただきます」とがなりたて食べ始める。あれだけ抵抗したのに、何事もなかったかのように……。僕は茶碗を持ったが、手が震えて飯が食えない。僕の隣りにチビがいて、すぐくゆっくりした子なんです。それが、この日は早いなの、汗かきながら食べている。僕が怒っているのを感じているから。

がなりたてるように、「ごちそうさま」と言い、部屋を出ようとする子たちがいる。もう、黙っていられなくて、「待てー! お前らは、四十分も誰かが飯の時間を遅らせたのに、文句を言うやつもおらんのかー!!」って言った。僕は職員にむかって言っているのですが、職員は「そうだ」という顔をして、子どもたちを見る。子どもは無言です。が、大人が黙っているのは、許せない。「もう一度自分の席に座ってくれ。大人にも、子どもにも言いたいことがある」。

最初に僕は炊事のおばちゃんを呼びました。このおばちゃん、僕が小さい頃に来た人です。園長になって、学園の建物・施設などを見て歩き、厨房に行った時、「今の子どもたちは幸せになりましたよ。あなたのいた頃は、カネの食器で、穴があくとガムをつめてお茶を飲んでいましたね。それが、今は、こんないい食器でごはんが食べられる」と言いました。その時のやりきれなさを伝えるために、僕は「おばちゃん」を呼んだ。

「おばちゃんは俺がここに来た日、『こんな立派な茶碗でごはんが食べられて幸せだ』と言った。なるほどこの食器は、壁にぶつけても割れもせん。あんたは家でもこれと同じ食器で、飯を食っているんだな、これから見に行くぞ」「私は使ってません」「どうして使わないのか。それなら『こんな立派な食器で』というのはウソだ。俺は割れる茶碗がいいと思っているよ。あんたも思っているから、家では割れる茶碗を使っているんだらう。それならどうして、子どもたちだけにベークライトの茶碗で飯を食わせるのか。ぶつければ割れ、当たれば欠ける——だから物を大事にするんだ。割れない食器はあなたにとって都合がいいからだ。それなら、なぜ『私にとって都合がいいから』と言えないのだ。本当に子どもたちのためを思うなら、明日、割れる食器をそろえてくれ……」。

次に、他の職員に。「お前たちは親と一緒に暮らせない子どもたちの、ひとりでしよ切れない荷物を、少しでも楽にし、幸せになってほしくて、ここに来たのではなかったのか。いつから、子どもたちを音で動かして平気な人間になりさがあったのか。自分の声で『ごはんだよ』と声をかけられないのか。それから、あのがなり立てるような食事の挨拶はやめろ。挨拶が大事なら大人だけが言え。強要するな。また好き嫌いという人間の基本的な感情をコントロールするな。理由はない。ただ好きだから好き、嫌いだから嫌いなんだ。そこからスタートしたい。」

子どもたちには「明日からチャイムは鳴らない。夕飯は六時から七時の間に作ってもらう。今晚のうちにグループを決めておくから、グループの人が集まったら、好きなようにごはんを食べなさい。そのグループには大人がつくようにするから……」と話しました。

次の日から僕も食事の時はテーブルをひとつ担当し、「園長さんの横がいい」と言う小学校四年生の子が脇に座って、八人のグループでごはんを食べました。

「好き嫌いはいい、と言ったけれど、自分でとりこんだものは食べろ。園長さんが勝手によそったのは、食べられなかったら先によけなさい。自分がどのくらい食べられるのか、だんだんわかってくるから」と言いました。ところが、小四の

良太郎だけは、僕の言うことに「ハイ、ハイ」と言いながら、やってほしくないことばかりやる。

ある日、魚の煮つけが出た。魚の煮つけとニンジンを手どもは嫌いですね。良太郎を見ると、案の定三回箸をつけて、「いらん」。そして「園長さん魚きれいに食べるなあ」と言う。「今日はまじめにきいてもらいたい話がある。良太郎に話すが皆もきいてくれ」と話し始めました。

「園長さんの骨だけになった魚を見てごらん。昨日まで、自由に海を泳いでいたにちがいない。でも、園長さんが、生きて行くために、この魚は命をくれた。魚だって、死にたくはなかっただろう。もらった命に対して、ありがとや、というのが『いただきます』だったんだ。良太郎の魚を見てごらん。お前が三回だけ箸をつけて、もういらぬのなら、この魚は死ぬことはなかった。この魚に『すまん』という気持ちがないか？ 人間はどんな立派な人でも、人間以外の命をもらって生きている。だから、勝手に死ぬことは許されない。」

園長さんは、良太郎とごはんを一緒に食べなければ、こんなことに気がつかなかった。良太郎のすることを困ったナ、と見ていたおかげでこのことがわかり、ありがたいと思っっている。大人は、気がついたらそのことを子どもに伝えておかねばならないんだ。」

小学四年生にもなれば、話が分かるから、うまく行つたと



思っていたが、良太郎はもっとひどい態度をとる。公衆の面前で彼に恥をかかせてしまったのですから。謝らねば、と思いつつ、そのタイミングがとれないまま会議が開かれました。

「園長さん、この間の話はなかなかよかったですね」「いや、話は伝わったが、結果として公衆の面前で良太郎に恥をかかせてしまった。このことはタイミングをみて謝る。だが良太郎の将来はシミュレーションでできる。やがて、彼もこの学園を出て行く。家庭を持ち、子どもが生まれるだろう。良太郎の子どもは、『いただきます、ごちそうさま』を言わないかもしれない。ところが良太郎は言うにちがいない。自分がそうであった時、自分を育てた大人が何と言ったか……それを思いたぐりながら……。俺には、それが見える。

教育とか子育てというのは、時間と空間を越えたところでの変化を見ていきたい。その変化が成長であってほしいと願う。変化は必ずある。そのことを俺たちは信じていよう。今日何か言って、すぐ効果が出なくてもガタガタするな」と言いました。

こんなふうに寝ること、食べることを大事に考えてきました。生活というのが、人間にとっていちばん大切な生命活動だからです。

私たち福祉をやる人間は「あるべき姿」というものを強く持ちすぎて、別の価値観を受けいれることを拒否してしまふ。これはすごく恐ろしいことだと思えます。僕の所を訪れる人々は驚くほど正しい人ばかりです。悪いのは社会、文部省、子どもたち……。確かに悪い。が、自分は間違っていないか、と疑う視点がありません。

学園に来て、思ったのは、皆と一緒にいることから始めていく怖さです。今の教育界も同じです。人間の「違い」が見えない。あるいは、「違うこと」を悪いことにしてしまう。僕は、人間の発達、自己発見、自己実現につながって行くのは、人とどこが違うかということを大事にすることだと思えます。

また小学校のクラスの四十人定員、この人数をひとりの先生が受持つと、管理体制をしかざるを得ない。保育、学校教育、福祉の世界、みんなそうです。養護施設の職員配置も、国の基準は六対一。一人の職員が六人の子どもをみる。子どもは二十四時間いて、労働は八時間しか許さないんですから、十八人を一人でみることになる。これでは子どもを育てられません。各道府県で努力して、滋賀県の場合、五対一になりました。十五人に対して職員一人。これでも不可能です。

でも、だからといって放置しておくわけにはいかん。僕は

職員をほとんど採用しています。今、六十人の子どもに対して大人五十人、ボランティアの人も含めてです。

おもしろいですね。おじいちゃん、おばあちゃんや知恵遅れのある大人の保育者などが働いていますが、赤ちゃんをみさせると、すぐくうまい。子どもたちの行為も非常にやわらかくなる。湘南学園は規則がないのに、毎日暮らしていると保母さんはいろんなこと言いますよ。「ごはん食べたか、宿題やったのー」とか。そこにおばあちゃんが入ると全然違ってくる。

毎日、いちばん最後に泣きべそかいて学校に行く少し知恵遅れのある小学校二年生の子を見て、おばあちゃんが「毎日学校行くの、あの子には無理よ。気の毒よ」と言うと、保母の方も「そうか」と思うようになる。その子は三日に一回学校へ行く。学校に行かない時はおばあちゃんが自分の店に連れて行く。この子はそこで編物を習ってきた。僕は、この子に編み物なんてできるわけがないと思っていた。ところが、おばあちゃんは「毎日やるとできるようにする」と言うんです。根気があるんですね。いつまでにできなければいけない、というのがない。そういうのが、知恵遅れの彼女にとてはフィットしている。「そうかっ」と思うことがいろいろあります。

日本では、親が子どもを育ててきた歴史は意外に浅く、せ

いぜい百年程しかない。それ以前は、農耕民族ですから祖父母が育てていたのです。今「親子の断絶」というが、本来、親は子を育てていない。産むだけなんです。両親は仕事に出て、日がとっぷり暮れるまで帰らない。自分の家の前の小さい畑で、おじいちゃん、おばあちゃんが自分たちの食べる分の作物を育てながら、子育てしている。昔話も、おじいさんおばあさんが自分の孫に語っている。戦国時代なんて、断絶どころか親子で殺し合っています。親子が仲の良い状態というのは、どちらかが一方的に力があって、どちらかに一方的に力がないとき。力が接近して、共存する場合は、特に男子と男親は、ライバルでしかない。

おじいちゃん、おばあちゃんを、子育ての中にどう参加させていくか、僕は、すごく大事なテーマだと思います。

また、ハンディキャップを持った人が生活の中に入ってくると、育てられる側も育てる側も、一緒に育ってしまう何かがあるのです。障害を持つている人の不思議な力だなあと思う。いろんな人たちがいて、社会。だから、老人ホームで老人だけかたまって生活しているのも、親のない子どもたちだけの施設、知恵遅れのある人だけの施設も異常です。いろんな人たちがコミュニケーションをとって生活していけるところに、福祉の出口を見つけて行きたいなあ——そんなことを考えています。

(まとめ 星名 綾)

## ―会場との交流―

中山 生協の職員です。ボランティアで登校拒否とか、親に捨てられた子どもたちの場を運営していますが、僕たちが悩んでいるのは児童相談所との関係です。

盗みを働いても、平気で僕たちに話しますし、タバコを吸ったりということもあって、それを黙認するんじゃないかって、自分の責任で人に迷惑かけないでって言っているんですが児童相談所の人たちは許せない、と言います。僕たち自身も、専門的に子どもたちに対処する知識・体制にあんまり自信が持てないんです。児童相談所の方は「私たちはこの子どもたちに対して責任が持てる。あなた方はボランティアなのだから、その子どもたちがしていることを黙認し、野放しにしておいて、もし何かあった時に、責任を負いきれるんですか」と言います。そのことについてお尋ねしたいのですが……。

中沢 まず「登校拒否」の子どもたちに対応している大人の姿勢に、学校に行けなくなってしまうやり方とか、教育のシステムに

問題があるんじゃないかという視点が欠けていると思う。むしろ人間として研ぎ澄まされた感性を持っていると、今の教育のシステムの中にはどうしても入れない。不思議だ、おかしいと思うことを自分にごまかせない子どもは、ストリートに倒れている、というのが僕の実感です。

一体どのくらいの子どもたちが学校に行けなくなったら、文部省なり教育をやっている人たちが、ひょっとしたら俺たちのやり方がおかしいんじゃないかって気付くんだろうって思っているんですね。だから「うちの子が学校に行けなくなっただけです」って電話がかかってきた場合は「もう暫く行かないでゆっくりしててください。そのうちみんな倒れますから」って言ってるんですけど。「ひとごとだと思って」って言われるので「ああ、ひとごとですよ。僕のことじゃないから」って言うと、怒るひともいますけど、でもそんなんです。

そういう子どもたちが、反社会的な行為をする。僕は基本的に、どうして反社会的な行為をするのかというのを考えていかなければならない。

湘南学園の子どもたちは、僕が園長で行っ

た時は七割の子が喫煙し、五割以上の子がシンナー遊びをやっていました。滋賀県の中で、特に反社会的な行為をする養護児童は、湘南学園と決めていたみたいです。だから凄く荒れていました。そこで、タバコを吸うなって言うんじゃないかって、なぜ吸わなくてはならないか、そういう逃げ方をしなければならぬのかに注目した。吸わなくてもよい状況は？と考えた。

学園の生活は、全部オープンスペースなんです。個室っていうのは全くない。大変な荷物を背負ってきている子どもたちが、特に思春期とぶつかって、泣きたい時なんていっぱいあると思うんですが、自分一人で泣ける場所の保障もできていない状況では、子どもたちは何かでごまかさなかったら生きていけないだろうと僕は思ったんです。

せめて泣ける場所を準備しようと考えました。十二畳ぐらいの大きな部屋が並んでいたのですが、パネルを買ってきて、いっぱい個室を作ったんです。行政は、建築法違反だとか何とか言うんですが、そんなこと関係ねえって言ってね。職員は、個室を作ったら、中どんな悪いことをするか分からないって言うんです。僕は、どんないいこととするか分か

らないという発想ですが。

ともかく体を隠せる状態を作れ。職員といえども、個室はその子の許可なしに開けることを許さない、ということにしました。みんな喜んで入りました。どんないいことをするか分からないと僕は期待していたのですが、やったのはやっぱり悪いことでした(笑)。

上から煙が上がったりするんですね。そういう時、僕は必ずそこへ行きます。ノックします。「何してるんだ! 開ける!」って。すると子どもは必ず「ちょっと待って!」と言う。「早く開けなさい!」。煙を追い出した後、吸殻を捨てたり、何かを隠すとかやってやっど開けます。

「お前、中でタバコ吸ってたな」「吸ってません」「いや、吸ってたに違いない。子どもは「証拠は?」って言う。「どうして一緒に暮らして、証拠なんか必要なんだ? 俺は罰してきたのでも、警察のように検挙してきたのでもない。ただ俺は、子どもであるお前にタバコを吸ってもらいたくないんだ。それを頼みに来た」。僕はきちんと手をつけて子どもに頼みます。「お願いだから、そんな卑怯なやり方はやめてくれ。俺は今でも疑っている。止めてもらいたい」。きちっと頼みます。

きちっと頼まれると子どもって意外と弱いのです。

シンナーは二カ月ぐらいでみんな吸わなくなり、タバコは三年半ぐらい尾を引きます。何回も僕は頼み「わかった、もう止めた」って聞いたのですが、常に裏切る奴がいました。でも、ある日突然「園長さん、いよいよ本当に俺はタバコ止めた」って言ってきました。「お前の言うことは信用できない」「僕はわざわざ言いに来たんだ。信用してくれ」「残念だが、俺は信用できない」と答えます。

子どもが、信用してくれと言ったからって、本当はどこかで疑っているのに「はい、分かりました」と、そういう中途半端なやり方ではいけない。ちょっとでも疑っていたら「俺はちょっとだけと疑っている」ということを相手に伝えないと駄目だ。人間は目を見れば分かるとか、ああいう嘘を平気で子どもに言う人がいますが、あれは止めたほうがいい。今、自分が思っていることを、いろんな表現で相手に伝わるように言葉で示していかないと駄目だということです。

それからタバコ、シンナーをやった時、ペナルティを課するという時に、誓約書を書かせる学校がよくあるんです。そんなことで止め

られるような子だったら、初めからしないですよ。大人の側で責任回避するには、非常によい証拠品ですが。そんなことで止められるなら教育者はいらぬ。

僕はペナルティを課すなら、その子の将来にとって参考になるようなことを工夫したいなって思う。うちの子の学校でやり出しているのは、一カ月とか三カ月とか、学校に行かせないでポランティアをさせる。大津市内には第一びわ湖学園という、重い障害を持った子どもたちの施設がある。うちの職員もついて一緒にポランティアをやります。重い障害を持って、お前たちとは全く違う大変な人生を歩いている人たちがいる。その人たちが、どんなに一生懸命生きていくか、君と一緒に生活してみたらどうか。あるいは湘南学園から幼稚園に通っている子がいる。その送り迎えを手伝ってあげてはどうか。お前も小さかった時、お母さんがこんなふうに愛してくれたんだよ、ってことを中学生の段階で見せる。こんな方法でいけば、僕は自分自身を、立場を変えたところから見えていくチャンスになると思います。

責任のことですが、ポランティアで活動する人が責任を取らなければならないことは一

切ありません。責任を取るのはプロです。学園では、十泊十一日の無人島でのキャンプをします。職員が「緊急事態が起きたらどうするんですか」と言いました。「無人島に行くに命に関わるものが起きたらどうしよう、と思うなら行くな。行くなら十一日目、迎えに行くまで、どんなことをしても生きていろ。」

無人島に行くとは、そういうことだ。僕は子どもたちの命をおろそかに考えているのではない。子どもたちが、将来突発的な事態に対応していける力は、今の時期に体験を通してしか身につかない。危険を避ける力は、危険を体験した奴にしか生まれないと俺は思っている。だから大人と一緒に、その責任を体験していくんだ。最終責任は僕にある。あなたは無事でやってきました。

湘南学園には、古い門が一つありますが、扉は全部とっばらってしまいました。小さい子どもたちがたくさんいるから、危険ですが職員に「子どもたちの外に出たいという気持ちで、外に出さないようにしなさい。それがプロなんだ。扉やフェンスの外に出さないようにするのなら、ガードマンを雇えばいい」と

言っています。道は結構車が通っています。私が、園長になった日から、事故は一件もありません。たまにはハットすることもありますが、子どもも安全な所に行っていると思います。

小平 高校の教員です。去年、私の学校にクラブ活動として社会福祉部ができました。

今年、生徒たちが合宿したいというので、私の地域の障害児の問題に取組んでいる人が、障害児も一緒に合宿をするというので、私に話して、それに参加させることにしました。今日は、そこから抜けてここに来たのですが、百三十人ほど集まりました。実に色々な子がいるんですね。その子たちを世話しているのは若い人が多く、中には小学生もいます。素晴らしい人たちで、僕は価値観を変えられてしまいました。障害児が人を教育する、育てるということを実感しました。

中沢 とても素晴らしい御報告をいただきました。僕は高校生がボランティアのクラブを作って、そういう活動をやりだしたら、先生は何故障害児の問題が大事なのか、分かりやすく説明しなければいけないと思います。

君もそうだったのだけれど、生まれてきた

赤ちゃんは、自分で御飯が食べられず、自分で移動することもできない。だから君のお父さん、お母さんが中心になって、養育・介護をしてくれただ。君は、その介護を受けながら、どんどん変化していったのだ。その変化が、君の場合は成長だった。けれど君の体は、あと何年かで成長が止まる。

みんな障害児で生まれてきた。そして二十歳から二十四、五歳でピークになり、後は障害に向かっていく。人間の一生は、スタートとゴールが障害児であり、障害者なんだ。だから障害を持った人が住みやすい社会を考えなければ、すべての人にとって優しい社会になっていく。

障害を持った人々と、君たちが子どもの時から一緒に遊び、勉強し、助けたり助けられたりして暮らしていくことが基本なんだ。それが成熟した社会に向かうことだと説明してほしいのです。そうでないと、車椅子の人のためだけにどうしてこんなに高いお金をかけて改造しなければならぬのか、ということになってしまふ。特に中・高校生の感性の豊かな時に、ちゃんと整理してそういう話をしていた方がいいと思います。

(まとめ・鈴木まき子)

●分科会1●

# 女の解放・男の解放

田中 一生  
重川 治樹  
津田 正夫

## 終末からの感想

田中 一生

今年のフォーラムでもおもしろかったのは、異性を結婚という制度に基づいた共同生活の中で、対等平等、自主自立、個性も仕事も尊重、しかも相手をまるごとロマンチックに愛しつづけることは果たしてできるのかどうかという論争(?)だった。昨年もしか男性でシングルの正当性を前面に押し出して、結婚することがおかしい、そこにそもそもの無理があるんだと強調していた人がいたが、今年は男性若手の代表・中村英之さんが既婚の女性たちと対立(?)するような形でシングル論を力説していたと思えた。シングルでいいんだ、結婚することがすでに誤りなんだとなれば、当分科会のテーマ

の半分は解決されてしまうから、じつにすっきりしている。中村さんの「入り口のところでもっと闘わなければいけない！」なんて発言は切れ味がよかった。

自分がシングルだからというわけではないが、私は合理的な中村さんの考えにはかなり同調できる。しかし、中村さんのシャープな断定にちょっと待ったをかける既婚女性の「私は夫をまるごと愛したいと思った」式の発言にもうっすら共感できる。結婚、あるいは夫婦という古来からの聖なる言霊にまだ未練があるようだ。

この問題は大きな問題だと私は思う。ちょっとやそっとの言葉の交換では何も見えてこない人間観・人生観にかかわることだと思ふのだ。人と人は本当に愛し合えるのかという議論はイメージを共有するのに似つかわしくないテーマだろ

う。またこれは二人に固有な問題という気もする。実際に目一杯愛し合っている男と女がいればそれまでで、その二人にとってはどっちが家事をやるの、育児をやるのなんて議論はおよそ取るにたらない野暮な議論に思えるにちがいない。その一方で「確信犯? シングルの会」の機関紙の見出し「愛すればこそシングル!」のような二人の愛の関係もあるだろうし、あっていいのである。人それぞれ、差し当たってこのへんの結論が一番無難である。

お互いがお互いを大事にできる関係としての結婚なんて、あり得るのかあり得ないのか、懐疑派と願望派と分ければ、私は懐疑派である。そこに一九九一年という時間の座標軸を当てればなおのことだ。たしかにいえることは、現代は恋愛が成立しにくい時代だということである。とくにこの国の消費社会の進行は、人間を個人へ個人へと向かわせている。

世紀末のせいかな年齢のせいかな、生活に疲れているせいかな、私はこのごろ白昼夢のような死の想念にいだかれることがしばしばある。誰かに診断されたら、心身症の幻覚症状と名付けられよう。けれど、それはわけもなく甘美な終末である。そのとき私の霊を遠い他界へと誘うのはなぜか決まって女性である。ポップ・フォッシーの映画『オール・ザット・ジャズ』、椎名麟三の小説『美しい女』にでてくる性的な女のイメージのようでもあり、幼年時代の私を溺愛した優しい祖母の抱擁

のイメージであったりする。こうした心の深層の神話的な女性について語ろうとすると、たちまち私は文体を変えなければならぬ。そして疲労していたはずの心身に心地よい緊張感が走り、内発的な生命感があふれてくる。それはなぜだろうか。

### 酒好きな「異物」のはなし

重川 治樹

WeもWeに集まる人々もWeのフォーラムも、考えてみれば不思議な存在だ。これまで私が接してきた、どんな組織とも人々とも違う。組織があるからには組織の目的があり、目的を共有するメンバーの目的意識の強弱による求心力と遠心力の力学がおのずと働いて微妙な序列ができて然るべきだが、どうも、そうした力学はWeの中では働いていない。

それに、目的というのが「新しい家庭科」ということになつてはいても、フォーラムの分科会のテーマはてんでんばらばら。牽強付会に理屈をつければ、何でも家庭科につながってしまうけれど、家庭科とは何の関係もなさそうなものもあった。わが「女の解放・男の解放分科会」もその一つで、主催者側も参加者も言いたいことを言いつ放しで集約めいたものはなし(もっとも今回は名司会者だったから、案外うまくまとまるのかもしれない)。

大体、夏の暑い陽盛りに全国から（子供まで連れて！）集まって、不自由な生活環境に耐えて朝から夜中まで熱気むんむんで喋り合うなんていう物好き集団というのは、何なのだろう。この国の老若男女を貫徹している損得勘定からみれば、一銭の得にもならないことを喜々としてやっているのだから。半田たつ子さんの人徳（と、よいしょして）といえばそれまでだが……。

そこまで考えて、はたと気付いた。なんのことはない、自分も完全に、物好きの一員だったのだ。自分が接してきた、どんな組織とも人々とも違うというのは当たりまえのこと。これまで、常に取材する側、外側からウォッチする立場で一貫してきたのが、本を書くために半田さんにインタビュールを行ったのが、「運の尽き」。ミイラ採りがミイラになり、立場が逆転して今やWeの内側の人間になっていたのだ。

全共闘世代（だからというわけでもないけれど）、元来、私は集団・組織になじめず、気がつけばいつも、はみ出し、はぐれ者＝異物だった。

学校でも会社でも、いつも居心地の悪い思いをしてきたのは、この異物性が原因だったのだろうと思う。現に今、男社会である勤務先で「男の変革」をうたった本を出して講演などして回っている私の異物性は頂点に達している。組織の中で異物であり続けるためには相当なエネルギーを必要とす

る。絶えず緊張して身構えていなければならないからだ。抑圧や仲間外れ、排除しようとする力と闘い抵抗し、それでも組織の一員であるために、どこかで折り合いをつけなければならない。こうしたことの繰り返しの中で緊張感はいや増し、閉じ籠もる殻は厚みを増す一方だ。

Weでも私が異物であることは間違いない。その異物が間違って実行委員にされ、実行委員会は、二次会の飲み会に出席することの方が多く、フォーラム当日も何の役にも立たなかった。

しかし、異物を続けながら楽しい。物好きの一員になって一銭の得にもならないことを一緒にワイワイガヤガヤやっている、穏やかな波間に手足を伸ばして漂っているような安らぎがある。身構えを全く必要としない人々だからであることは間違いない。

分科会の夜の交流会でも酒を飲んで陶然としながら解放された気分だった。Weの魅力は結局、私のような異物がそれほど浮き上がらずに紛れ込んでいられることにあるのだろう。

幸せな司会をさせて貰った――

津田 正夫

この分科会の司会に限って言えば、私の思いは概ね次のようなものでした。一つは、男と女の〈関係性の解放〉という



ことを、たとえば「家事育児に参加する・させる」ことで終わるような「男女一对の関係改善」「いい関係づくり」の狭い範囲に閉じ込めたくない、ということがありました。現在の「歪んだ(?)対関係」を強いてくる、経済的・社会的・制度的関係性の歪みに踏みこみ、他方で私たちの内なる性差別意識・性役割文化や言葉に分け入ってゆかなければ、単なるオンチャベリになってしまふ、という気持が強くなりました。

今年の分科会・交流会では、スピーカーの板本洋子さん・星建男さんとも非常に具体的に深く鋭い提起をしていただいたと思っておりますし、活発な議論もあったのですが、司会のみならずもあって、〈男女の対関係の解放〉が必ずしも〈男女の社会関係の解放〉に結びつく形で真直ぐに掘り下げられる議論になったと私には思えず、なかなか難しいものだなあと、いう感を深くしました。

第二には、いま述べたこととつながりますが、『解放論議』を、抽象的な評論や学者の分析にまかせるのではなく、普通の人が誰でも実践できる方法として深めたい、という思いがありました。特に日々の労働・文化様式や価値観が色濃く社会化・制度化されてしまっている現代の企業や教育などの社会システムのうちの実践のあり方を求めたいと去年からの連続の中で考えてきました。

この視点については、明確ではないものの、深夜までの議

論の中で、具体的な『実践』を、家族や男女関係のあり方の変革にだけ止めるのではなく、また政治一般の改革にのみ矮小化するものでもなく、具体的な自分の日々の労働の場や地域の中で、どんな質の仕事や人間関係をつくり出しているのか、どのように変えたり変えられたりしているのかを、夫々がもつと伝えあってゆくことで、もう少し何か分かってくるような気がしました。(板本さんや女性たちの発言に教えられるものが多くあったのは、偶然でしょうか。)

また私自身の第三の思いとしては、〈女の解放〉論議の歴史の積み上げに比べて、緒についたとさえいえない〈男の解放〉の手がかりを、男たち自身の手で、いわば「男から男へ」の論議を深めることで得ていきたいと考えていました。このことは、女性からみれば多少はマンガ的だったり、気負いすぎにみえたりすることでしょうが、やはりここを右往左往していかなければ「男の解放」の出口はない、と思えるのです。

事実、星さんの貴重な提起をはじめ、小平陽一さん、中村英之さん、諸橋泰樹さん、重川治樹さんや多くの方からの示唆に富む発言も沢山あったのですが、女性の参加者が意外と多かったことを反省しています。今後、男性だけでこの回路を模索してゆくのかどうかの選択を含めて、議論を深める必要がありそうです。

●分科会2●

親と子が水平に向き合うには

—母子幻想からの逃走—

森本 邦子

●私の問題意識

人間が自分らしさを失わずに抑圧から解放されて生きるにはどうすればいいのか。それには、まず各人が自立した上で個人個人の人間関係が結べる世の中であることだ。

「ところで、自立して何ですか?」「どうやったら出来るのですか」と詰めよる女達、が私のまわりにはいっぱいいる。が、一方で、女も母性幻想からの解放をと叫び、行動に移している人も日毎に増えている。時代は確実に変わりつつある。いよいよ本物の個人主義が到来する日が近いのか。個人の自由と独立を重んじて、個人に価値を認める思想が根づこうとするのか。

しかし、かくありたいという理想の旗を高らかに掲げて

も、女の日常の風景の中で、旗はいつも風にはためいている日ばかりではない。

自分にこだわらない方が平安を保証される面すらもある。自分づくりに精を出す、という風土がないからなのだろうか。このことに私は日ごろこだわりつけていた。

これはきっと、心理カウンセラーという、仕事柄、心を病む子どもとその背後の母親と接する機会が多いからだろう。我が子の成長を見つめるのが自己実現である母親。親の期待する人間像に近づこうと、無意識に努力している子どもが、バランスをくずしていくのを見るのは痛ましい。

母親はある種の幻想の中で子育てをして、子どもは依存の甘美さにとりこまれている。その関係が個人の確立を困難にしているのではないか。まず、親と子が水平に向き合うために

は、母子幻想からの逃走こそが必須なのではないか、と、テーマを決めた。悲観的な資料をドサーと山積して暗い雰囲気の中で、真剣、真面目というこれまた暗い顔をして話し合う会になることは出来るだけさげよう。

前夜の交流会で、「人間関係で最も湿気しづけをはらみうとうしいのは、親と子の関係ではないか。除湿をして、爽快なものにするにはどうすればいいのか。個人と個人として親と子が向き合うには何が要るのかを、愉快地語り合いませんか」と、大声で呼びこみをやった。

### ●分科会で何が話し合われたか

八月三日朝、三人、四人と人が集まって下さり、九時直後には十九名の参加者が、終わり頃には他の会から回ってきた人もあって、二十四名にもなった。

小、中、高の学校の教師が半数を越え、市会議員、親業訓練講座のインストラクター、助産婦、フリーランスのライター等、様々な職業の人の参加があった。地域的には、首都圏の他に、鹿児島、大阪、神戸、名古屋とフォーラムに期待する人が全国的なのを改めて思い知った。

自己紹介をかねて参加動機を話し合う。「親子が水平に」という点があるのがうかがわれた。

ただ一人の男性田代吉美さん。「子どもがいないボクも、

こういうところでどんな話がされているのか興味があったものですから」と。

「なんで幼い子を置いてまで遠くへ出かけて行かなければならないのか」という周囲の視線があったという話に、母親が自分自身のことですぐ学びたいという意志を抱くとき、非難されるのは何故かという問題が、のっけから投げかけられた。

おもな意見を紹介しよう。

「自分が生れた時のことを生徒に親からレポートしてくる課題を出した折、子どもが自分の誕生を必ずしも望まれていなかったことを知ってしまった時、教育的配慮について考えた」（鈴木まき子、「ひとと生殖」に執筆）

「訓練講座では親が子との接触の場面で、いかなる言葉で、または行動で子を傷つけているかを洗い出す作業をする」（六本美代子、小沢牧子氏とWe誌上で論争）

「ラマーズ法の出産の場面で、子を産む女性が依存的になっている事実がある。女性が産む主体性をどうしてとりもどしたらよいか」（高橋富士子、「ひとと生殖」に執筆）

「どうしたら、個人が強くなるか、自我の強さを養わなければ、社会のしくみに対して自分の意見を持ち、発言し、行動する市民にはなり得ない」（中嶋里美、所沢市市会議員）

「子どもの個性を伸ばすどころか、抑制するかたちの生徒指導をする学校に、子どもを入れるしかない地域に住んでいて

もう日本を逃げ出したい」(大西麻理子)

知能検査を我が子だけは受けるのを拒否した実例を語ってくれた人(名前記録モレでごめんさい)など。今どきの子どもが置かれている息苦しい状況が次々に発表された。教師の立場からは、「自分の子どもではない子を預かっているわけだが、大学生になっても生活的自立が未熟で、人間が生きる基本をどれ程子どもたちが学びとっているのか疑問」(特手ナツ、「教育共生を考える会」)の発言もあった。

### ●分科会が終わったあと、あれこれ

この分科会と一緒に企画した清水博子さんは、「子を親離れさせるにはという考えはみんなあるが、親の方も、子離れを上手にといった優しい表現を越えて、水平に向き合うには、ある場合には、親が子捨てをすることもやらねばという点にまず話が深まればよかったのにね」と、さすが鋭い指摘をして下さった。保護し、育成する必要と、解き放つ勇氣。これが今こそ必要なのかもしれない。状況を悲観すること自体、甘えから来ているのだから。

大西麻理子さんは、「まあ、みんな言いたいことを吐き出したのだし、自分でこれからどうしていくかの方向を見定めるキッカケになったのではないかしら、あれはあれでよかったのよ」と、多少気落ちしている私を慰めて下さった。

分科会で、テーマにそって話し合う意味はどこにあるのか。参加した人にとって利益はあるのか、と、いうことを、私は分科会が終わってからしきりに考えた。そして今も原稿を書きながら考えている。

八月二日の夜、アジアの女性たちの記録映画を観た。分科会で話題にのせようかとも考えたが、意見続出の折、チャンスを失った。進歩や発展が、まだ夢や希望につながる国の女性たちの話、そこに生きる女の野性のたくましさ。何故、「母たち」というタイトルがつけられたのかを問いつづけながら私は観た。

母性幻想からの解放を願っている私達、あの映画の母たちから何を発見できたのだろうか。

Weの夏季フォーラムの真の愉しき、醍醐味はどこにあるのか、と問われたら、私自身は、全体会、分科会もさることながら、自由時間、食事中、入浴中、夜更けの交流で、そばに居た人との何気ない語り合いにあると言いたい。各々が各々の生活の場で、やるだけのことをやっているのだなあという共感が、私の胸を熱くし、一年の疲れをいやしてくれるからだ。

さて、来夏のフォーラムに、同じテーマで分科会をまた開いてみようかな、と、少しだけ思っている私です。

## ●分科会を企画して

清水 博子

大切だけれど、ひとりずつの親にはとても重いテーマ。もし、そう思う人ばかりで参加者が少なかったら、とちよび不安もあったけど、定刻の会場はまあまあの集まりで、刺激的なテーマに期待した面々が並ぶ。参加メンバー、話し合いの内容はすでに森本さんがまとめられているので、私はあの場に坐っていて私なりに受け取ったことを、いささか手前勝手に拾ってみたい。参加動機が発言されている間、私に響いてきたものは「母親が我が子をひとりの人格として認め同じ地平で向き合う、そして違いとつき合う第一歩を。そうありたい、そうあらねばならない、と思うけど……」という声にならないメッセージであった。

自分の母子関係に触れば、我が子かわいさの思いがにじみ出てしまう。子育て渦中で思いどおりにならないあせりを隠してきれいごとを言っても、参加者の頭の上を素通りして心にもで届かない。しかし、決してこのままでいいとも思っていないし、方策を探っている。聞く側にも我が身に重ねて深くうなずく人と、その方策こそみんなに伝えてほしいと返す場面の交錯もあった。子育てが子どものためならば（そう

言い切れるかの問題もあるが）、母性幻想を破る力の存在は、まだ点のようなものかもしれない。

子どもの生きる力を本当に信じられるか問われている親としての自分。そして、豊かな出会いとたまには葛藤もある日々が、自然体でできたらいいね、でもまだ距離があるようだから、自分流でやっている、という実例がいくつか出された。理解できても、その理想の暮らしからは遠く、待ったのきかない子育てに奮闘する日々。

発言者の言葉に「分かっちゃいるけど」どうにもならない状況への怒りが見えたこともあり、「活発で展望が見えた」といえないムードが流れたこともあった。

一方、学校の方針とのかねあいもあり、「時間もかかるけどこの分科会を契機にひとりずつが、とにかく意識的に個人と個人の関係づくりに努めよう」の建設的で明るい励ましも出て全体の賛意があり、Weらしい盛り上がりも見えた。「教室では生殖教育ができるけど、家庭で自分の子どもには難しい」という言葉に対して、私もそうよ、みんな同じ、分かっているよ、のサインだけでよかったのだろうか。いろいろと未解決のままだった問題もあったような気がする。機敏で明るく司会を進めた森本さんにも、まだ残るものがあったように、「来年も是非このテーマで」、の提案はあの場では形にならなかったが、暗黙の了解があったのではなからうか。

### ●分科会3●

## シングルのメリット・デメリット

吉田 清彦

### ●今なぜ「シングルの時代」なのか

昨年夏には関西で「確信犯? シングルの会」、今年三月には首都圏で「单身けん(ひとりで生きるために、単身者の生活権を検証する会)」と、まるで相呼応するようにシングルが寄り集う会が二つ新しく誕生した。ここでわざわざ「新しく」と書いたのは、シングルの会それ自体はすでに十一年前の一九八〇年、関西で「ひとり歩きの会」が産声を上げているし、そこから派生するかたちでその後首都圏で「しんぐる巢」が生まれ、また数年前、名古屋でも一時同じような会の活動が伝えられたことがある。

そもそも「シングル」という言葉が、それまでの「独身」「一人暮らし」「独り者」といったようなことなくマイナスイメージを帯びた言葉に代わって、ある種爽やかな響きを持

ったプラスイメージの言葉として一般に使われはじめたのは、海老坂武の『シングル・ライフ―女と男の解放学』(中央公論社)が世に出た一九八六年以降のことと思われる。

そして今、関西と首都圏で相前後して二つの会が誕生し、そのどちらもがかなりな反響を呼び起こしている社会的な背景を考えてみると、一方では、実態としての単身者の増加とその結果としての旧来的な家族イメージの崩壊現象があり、その一方では、その崩壊しつつある「家族」を旧来的な家族イメージのままに(すなわち伝統的な家族イデオロギーの復権によって)再編強化しようという動きがこのところ顕著になってきていることがあるように思える。

「実態として単身者の増加」について補足すると、一九八五年の国勢調査ですでに全世帯の二〇%は単独世帯(すなわち

一人家族。東京だけを例にとると全世帯の三〇%強」という数字がはじきだされている。この单身世帯の増加の主な要因の一つは、晩婚化、すなわち、なかなか結婚しない女の増加（とその裏返しとしてのなかなか結婚できない男の増加）であり、もう一つが高齢化社会の到来である。ここであえて図式的に言うと、前者の要因が「確信犯？ シングルの会」を産み、後者の要因が「單身けん」の誕生をうながしたといえよう。好むと好まざるとにかかわらず、すでに「シングルの時代」に突入しているのである。

ところが、こういう現実からスタートしようとせず、あくまでも伝統的な家族の復権によって「修復」をはかろうとする頑迷固陋な人達が日本という国の政治・経済の実権を握っており（そして、そういう人達をのさばらせているのが、とりもなおさずこの国の国民の、そして労働者の多数派を形成しているのもまた事実なのだ）、高齢化社会の到来と、いわゆる「一・五三ショック」と呼ばれる出生児数の低下を前にして、またそろそろさまざまな施策を伴って伝統的・日本的な「家族機能」の強化をはかりはじめている。

このような状況の中で新しく誕生したシングルのネットワークが、これまでの仲間づくりⅡ交流サークルという性格に加えて、新しいライフスタイルの提案（より具体的に言うと、家族イデオロギーや結婚幻想にとらわれない新しい生き

方の提案）を行っていく、文化運動的な志向性や、さらには、国や行政に対して社会的・制度的な要求を突きつけていく市民運動的な志向性を鮮明に打ち出しているのも、こういう時代のおのずからなる反映である。

#### ●さまざまなシングル

ところで、ひと口にシングルと言っても、今の時代、実にさまざまな（タイプの）シングルがいるので、ある種の「交際整理」を行ってからでないかと、話は纏るばかりで、一向に前に進まなくなる。そこで、ここではとりあえず、「制度としての結婚」に対する心理的なスタンスというところからシングルの分類を試みると、①通過型、②不能型、③拒否型という三つのグループが浮かび上がってくる。

最初の、通過型というのは、結婚を何となくズルズルと先延ばしにしているモラトリアムタイプで、別名「なりゆきシングル」又は「うっかりシングル」。いずれ結婚するという意味では、このグループは、「確信犯」のシングルではなくて、いわば「結婚予備軍」でしかないが、結婚とシングルの間をさまざま「とまどいシングル」「ためらいシングル」の中から「確信犯」のシングルが全く出てこないとは言いきれない。

そして、このグループの中でこのところ増えてきている両親と同居して快適な「シングルライフ」を満喫している「ち

「ヤっかりシングル」ともども、結局通過型のままに結婚できない「なれのはてシングル」にならないともかぎらないのである。

二番目の不能型というのは、簡単に言うると、親離れしないままに体だけ「大人」になって、異性も含めて他人との人間関係を自分からは作り出せないタイプで、別名「ヤっかいシングル」。母子密着の結果結婚できない「マザ・コン」男性だけでなく、最近では、母子密着、あるいは父子密着の女性も増えているように思える。

これとは別に、同居しながら親を（特に経済力の乏しい母親を）扶養もしくは介護している人達の中にも結婚をためらい、あるいはあきらめている人達が多い（昔は女性に多かったが、今は男性も多い）。こういう人達も、一応「心やさしき不能型」と呼んで、このグループに入れておく。

最後の、拒否型というのは、現在の制度としての結婚というものに疑問を感じて、そういう形ではない男女の関係を模索、あるいは特定の男女関係以外の人間関係に生きがいを見つけたしている人達で、いわば確信犯の選択的シングルであり、別名「のびのびシングル」又は「いきいきシングル」。

もう一つ、これらの、結婚に対する心理的なスタンスによって分類した三つのグループとは別に、離別・死別によって形態的なシングルを余儀なくされた人達がいて、別名「よぎ

なくシングル」。男性の場合、再度「結婚」にチャレンジする者も多いが、女性の「離婚シングル」の場合、そのまま選択的な「確信犯シングル」の道を歩む者も多い。

#### ●シングルのメリット、デメリット

ところで、分科会の参加者は全員で十五人。年齢的には二十代から六十代までとバラエティーに富んだが、男性参加者は司会の吉田を含めて、わずかに二人。女性のパワーを感じさせる一方で、今の社会において、いろいろな意味でシングルの問題はまず女性の問題であるということを変更して気づかされた。

参加者一人一人に、自己紹介とともに自分が前記の何型のシングルに属するかを自己分析してもらったが、その結果、確信犯型四人、確信犯？ 型二人、なりゆき型五人、ちやっかり型一人、他に、家庭内離婚型、結婚しているが「心はいつもシングル」型、三十六年確信犯でやってきたが妊娠出産を経て現在パートナーと同居型各一人と、わずか十五人でも実にさまざまなシングルがいることが明らかになった。

続いて、シングルのメリット・デメリットについて具体的に話し合ったが、まずメリットについては、

- ・ 気楽である（東京・Tさん、東京・Uさん）
- ・ 自由である（京都・Kさん）
- ・ 生活に拘束がない（佐賀・Tさん）



- ・自分の時間がいっぱいある（長野・Mさん）
- ・自分のペースで生活や仕事ができる（相模原・Hさん、東京・Uさん）
- ・自分以外の人のことを考えなくてよい（福生・Iさん）
- ・ちょっと変わったところでは、
- ・人間が生きていくために何が必要かがわかる（東京・Sさん）
- ・という非常に示唆に富む発言も出た。
- 次に、デメリットについては、
- ・特になし（所沢・Nさん）
- ・さほど感じない（佐賀・Tさん）
- ・という意見も出されたが、
- ・病気になった時、ヤバイなと思う（東京・Wさん、長野・Mさん）
- ・旅行に行った時、旅館など、女の一人旅はうさんくさく見られる（長野・Mさん）
- ・女の一人暮らしの場合、夏など、夜、窓を開けて寝られないなど、常に緊張を強いられる（東京・Uさん）
- ・何から何まで一人でやらなくてはならない（東京・Sさん）
- ・家事や育児の分担ができない（京都・Kさん）
- ・引越した面倒くさいことや、嫌なことがあった時、相棒がいたらと思う（相模原・Hさん）

- ・仕事がしんどい時、話を聞いてくれる家族がいればと思う（東京・Wさん）
- など、主に日常生活における不便、不自由という面からさまざまな意見が出されたが、だからと言って、先に挙げたシンドルのメリットを捨ててまで制度的な結婚に逃げこもうという人は少ない。
- ・自己中心的になりやすい（福生・Iさん）
- という自己批評も含めて、これからは生活のさまざまな面におけるシンドル同士の（カッパルをも巻きこんだ）交流・ネットワークづくりへの模索がはじめられている。
- 交流会では後半、住宅政策、住宅ローン、税政、国民健康保険料などにおける単身者差別の問題や、病院の手術時や看護体制に対する疑問や不満が噴出し、それらの根っこところにある家族を前提とした社会システムとそれを支える社会意識の変革を視野に入れた、息の長い運動の必要性が語られた。
- さまざまな発言の中で、「女の問題は行きつくところ」結婚制度の問題」（大和・Tさん）という言葉や、「人間の基本はシングル」（京都・Kさん）、「いろいろの生き方がある」（調布・Iさん）といった言葉が特に印象に残っている。個を抑圧する社会に真の自由はない。

## ●分科会4●

どうすすめる、どうすすめさせる

### 家庭科男女共学

根津 公子

日の丸・君が代の強制。校門死事件に象徴される徹底した管理教育。これらの余りのひどさに、教育そのものの在りようが問われ、保護者・市民が地域の学校に、行政に「もの申す」動きが出てきた。「もの申す」ことから、良心を持った教師個人と集団が共同の闘いに発展させることができた地域がある。

家庭科の男女共学の実現に向けても、この闘いに学べる点は大きいと思う。保護者・市民は学校に「共学を！」「こんな共学に」と「もの申す。」家庭科教師は、批判をきちんと受ける中で、その人たちと手を結ぶ。学校が保護者や地域の声を全く無視することはできない点、教師側から大いに利用させてもらおう。甘えてではなく。そして、教師も学校の枠に縛られずに、外に出ていこう。共同の闘いは、確かな共学

を誕生させるのではないか。

そんな思いで、まずは話し合おうと、分科会を設定した。参加者は十九名と寂しい。八王子の市民・教師が約半数。

H (八王子・教師) 前任校で機械に始まり、翌年は食物も、という具合に徐々に増やして、全面共学に。その十四年間に技術科教師は四人替わり、最初は皆驚くが、やってみる中で「これが自然だね」と変わっていった。

現任校では、着任前に「一時間でも共学で」と、渋る技術科教師を説得し、保育領域の共学が実現。六年たった現在、その技術科教師も共学賛成に。そして今年度、全面共学に。職場の仲間には、共学のPRを欠かさない。「授業を観に来て」とも。保護者会でもPRに努めている。だからだろう

か、周囲からとやかく言われなかった。PRが大事。

E (八王子の市民、男三人、女三人の母親) 親の立場から言わせていただければ、興味を持って学習できるようにしてほしい。教師の人間的魅力、生活者としての魅力に惹かれて、子どもは学習していくのではないか。

以前、年子の二人(女と男)が「家庭科でこういうことやってるんだよ」「……こうなんだよ」と、家の中は、家庭科の話でいっぱいだった。この子たちはきつとすごく興味を持って学習しているんじゃないか。親にも伝わってきて、その話を聞くのが楽しかった。しかし、その教師の転動後、ぱったり家庭科の話はしなくなった。「家庭科最近どう？」と聞くと、「何やってんだかわからない」「聞いててもつまんない」「いやだ」。子どもの方からその話を切ってしまう。これは大変なことなんだ、そう思っている。

受験体制の中では、生活者として身につけることはそっちのけ。生活者としての力を伸ばしていくのは親かな。

N (司会) 生活者としての自立については家庭の力が大きい、社会的活動の場としての学校で、それを考えられる子どもを育てていく責任が学校にはある。しかし、現実には、学校は子どもの自立を阻んでしまっていますね。

W (埼玉・専業主婦を廃し、今年二十年ぶりに教師に) 今までのWeフォーラムで、「こう苦勞しています」「職員会議で

こんなにしても説得できない」という先生方の話が随分あり、その都度「なぜ親と共同歩調をとらないのか」と言ってきた。親の方が考えが進んでいるのですよ。先生が「共修共修」と言うだけでなく、PTA総会や懇談会で、「なぜ共学してもらえないのか」と素朴に問うてもらおうのが大事。そうしたら他教科の教師からも、共学支持が出てくるのでは。親との提携を考えることにこの分科会がなればいい。

U (八王子の市民・親。地域で教育問題に取り組む) 男女差別の観点は大事だが、家庭科の中身いって、当然一緒にやるべきものであると主張する方が大事。学校教育は人間が人間として育ていくための保障であるべきなのに、技・家は技能のレベルの教科になってしまっている。人間になるために大きな意味を持つ教科である。中身でもっと主張している。技術的に高いものでなくていい。すばらしいスカートができてなくてもいい。原理論的なものを学べれば。その観点が見えてくれば、運動として拵がりが見えてくるのではないか。家庭科教師が中身のことで共学を、時数を提案していけば、私たち親も、学校や周りに働きかけができる。

E (八王子市民・親。女性問題・教育問題で活動する) 今のまま、技術的なことを云々している限り、共修になることへの反発や、それが無意味だという評価は変わらないだろう。教科の中身を家庭科教師が大論争しなければいけない。

勿論親もそれに関わらねばならないが、家庭科は、人間としていかに生きるべきか、人間が生きていく社会ってどうあらねばならないか……前面に打ち出していく必要がある。

T (新潟・教師) 身につきささる思い。私もいろいろなビジョンを持っているが、評価を考えると評価のしやすいうへ、教科書通りやっておこうとなってしまう。男女共修というが、高校では男女差がはっきりしてきて、男女一緒にやっっていくのは難しい。

I (大阪・教師) 家庭科以外の教科では、中身が共学に耐えられるかと言われてきたことは一度もない。この言い方は、共学を潰す側から言われてきたことだ。

——問題提起や、教師と市民・親とのくい違いを討論できないまま、時間切れ。でも、共学にむけての共同作業の出発はここから始まる。

◆二人から感想が寄せられました。

北田京子 (兵庫・高校教師)

。スタート時間が遅かったのは残念だった。  
。主婦の方々の男女共学(修) にかける熱意に接することができ、地域・教員・学校との連帯の必要性を再認識した。  
PTA総会・保護者会などで訴えていくことはとても効果があることだと思いが、それに値するだけの授業を日頃か

らしていないと、見向きもされないとと思う。教師の力量が問われますね。

見向きもされない——このことは進学校と言われている学校では深刻な問題で、親も、子も、学校も、有名校に入ることが大切だと考えている中で、その価値観を切り崩していくのは並大抵ではない。中にはもちろん家庭科の重要性を痛感してくれる人達もいるが、頭では分かっている、中学あるいは高校のこの時期にやるべきこととして捉えてくると、楽しくさせる根源であると私自身は思うのだが……。男女共修実現をあと二年、三年後に控えているわりに、どの県もその取り組みは遅々として進んでいないように聞いている。もっと情報交換をしなくてよいのだろうか……。今回の分科会も、もっといろいろな都道府県から参加があるのかと期待していたのだが、参加者も少なく残念だった。

。家庭科の男女共修は、中学と高校、男子校・共学校・女子校、普通科と家政科のある学校……というように、条件によってかなり対応が異なってくると思う。せめて、中学と高校の二つに分けて討論できたらかったのでは……？

遠藤真子 (八王子市民)

(前略) 共学・共修をすでに実施している教師たちがおり、

その実践を聞くと感じ激する。その一方でわが娘、二人の家庭科授業風景の寂しさといったら、どちらも旧態依然、30年以上前に私が受けた授業とほとんど変わらない。直接受験に関係ない教科は苦情を申し立てる親など皆無だから、いつまでも生き残っている部分もあるらしい。特に中・高生を持つ親たちは「受験科目にもない教科だけれど、生活者の知識として無視するわけにもいかない」「単身赴任も他人事ではない世の中、食物の知識や調理も男だって少しは必要」「共働き家庭では、これからは男も少しは家事ができては困るし……」と言っている。受験態勢に組み込ませている息子に、生活者としての訓練と実践を週四単位の教科で得させようというのは虫のよい話ではないか。でも正直な所、その程度というのがごく普通の受け取り方だ。

そんな中で教師たちは日常の授業をどうこなすかが大きな問題のようで、特に、経験時間差による技術的に差のある男女を共学させると「効率が悪い」と卒直な悩みとして語られていた。こんな意見が家庭科を単純な技術修得教科におとしめてしまっているような気がする。だからこそ、三年後のためには素材や指導方法までもっと大きく変えながら家庭科を登場させてもらいたいのだが、そんな動きはあるのだろうか。「家庭科の中ではカリキュラムなどすでに準備しています」「他教科は共修であり、教科内容を云々されることもないの

に、家庭科だけ内容まで（親たちに）云々されなければならぬのか」と少々不満気な、教師からの反論もあった。

なぜ私がこんな質問をしたのか。私たち市民に、共学・共修の家庭科はその意義といい、問題点といい、正しく伝えられていないと思うからだ。この時代、この転換期だからこそ、家庭科教師の持つ悩みを理解している家庭がどれだけあるかと気になるからだ。

この期だからこそ、この本質的課題に迫って徹底的に話し合う必要があると思うからだ。三年後実施といっても、制度面でのいくつかの問題、行政責任のことなど教育を受ける側の市民と共有すべきことがあるように思う。こんな問題は現場教師たちが悩めばよいとは誰も考えてはいないはずだ。

現場教師のハウツー討論も必要だし、大いに情報交換してもらいたい。でも、市民と共にどんな家庭科をどうやって再登場させるか、これからは、日本中のあちこちでこの議論をさせたい。学校はもっと市民の中に出て来なければならぬと思う。（これは家庭科だけに限られるものではないが）。そうしなければ、本当に「よかった」と言える家庭科の共修なんて実現しない。

短時間で十分話し合えなかったが、こんな感想を持った。「一丁あがり」の気分ではいたわけではないけれど、家庭科から目を離してはいけないという気にさせられた一日だった。

●分科会5●

こんな家庭科をやってみたい

芦谷 薫

—しかけ人のもくろみ—

「家庭科教師ばかりの家庭科の分科会」「ちょっと入りづらい」毎年の話題であり課題。当の家庭科教師の私も「他の分科会でフレッシュアップの素を得たい」と思いつつも、足を洗えないジレンマ。去年は、若竹さんがスクランブルトークをやってくれた。

そこで、今年は教師じゃない方や他教科の教師の方に、「こんな家庭科やってみたい」を話してもらえたらいいなと、小平さんと内山さんに声をかけた。二人とも快諾。小平さんは、同僚の谷口さんをくどいてくれた。小平さんと内山さんに「芦谷さんは何を？」と迫られ、原稿を書くことに。

—豊かな緑につつまれた講堂で—

●小平陽一さんの「こんな家庭科をやりたい」

家庭科への関心は、教えている理科という教科への疑問から。目覚ましい発展を続けている現代科学への疑問、日常過ごしている生活様式への疑問が、自然科学や社会科学の融合と自分の生活に立脚したトータルな科学の必要性を考えさせた。そんな時出会ったのが家政学・家庭科だった。しかし料理・裁縫というイメージが拭い切れない家庭科、一方日常から遊離しがちな理科、しかも二年後の男女共修家庭科の重要性も考え合わせる中で「生活科学」という教科の構想がふくらんでいった。それは宇宙観や地球観から始まり、他の生物との共生や人間特有の文明・文化そして現代社会の変化、地域社会や家庭、最後に生き方や生を問うというもの。そんな構想をもとにしたのが「私だったらこんな家庭科をやりたい」(54ページ参照)。普段からこんな話を家庭科担当者と出来る



とよいが、こんな場からでも考えてもらえるといいなと思う。

ている。家庭科の男女共修を機に、他教科との連携が実現できるところを願っている。

### ●谷口宏美さんの「社会科から見た家庭科」

自分自身の生活スタイルが変化したことがきっかけで、授業内容が「生活感のある政治経済」へと変化した。そんな中で、他教科との連携の必要性を強く感じている。例えばエネルギー問題では、エネルギー消費者としての自己の生活スタイルを見直す、公害問題では、自らが汚染源になっている現

実をどうしていくのか、福祉や税金、日常生活の中の男女平等にしても然り。男子生徒の封建思想、女子生徒のシンデレラコンプレックスは、残念ながら根強い。学習したことが自己の生活や生き方とどう結びつくのか生徒が考えてくれるような授業が出来たら最高。それには家庭科が最も適していると思う。個々の授業でそれぞれが工夫していることが有機的に結びついたらどんなにいいだろうと思っ

### ●内山裕子さんの「アジアの生活者のパンツ発表会」

「皆さんで好きなものを着けてみて下さい」円形に並べた机の上に並んだパンツ。選んで着けてみながら、あら不思議、ヘーどう結ぶの、このゆったりさがいいと参加者自身のパフォーマンス。「今私達の着ているものは欧米のものが中心。アジアの服がアジア生まれの私達に異質なものになっていきます。何故かなあと考えながら見て触れて着て、動いてみてください」このオニギリパンツ、We誌で書いたんです。四角い布をどのようにしてこんな形にしたのかクイズです」と内山さん。BGMは、フィリピンや中南米・中央アジアなどの音楽、インドのカレー味スナックもあって、ますますアジア。

今回登場のパンツは、タイのパンツ(オムスビ型)、トルコのサルワール、インドのサルワール(巻きこみ型)、アフガニスタンのトンボン、日本のもんべ(ひも結び型とゴム型)、インドのバティックのパンツ。一枚の布のパフォーマンスは、インドのサリーとドーチイ、インドネシアのサロン。

「今やパンツは、すっかり生活の中で市民権を得て着こなしの定番。男女共修の家庭科ももうすぐ。男女で取り組めるパンツ、今や大人気のラップダンスもこんなパンツ。みんなできっとラップダンスの発表会が出来ると最高」と内山さん

## 私だったらこんな家庭科をやりたいノ

### I 生活

1. 生活する、生きるという行為（生きるって？）  
衣・食・住の基本的なことと社会の中で生きるということ。  
生物としての充足と人間的（心理的）な充足。
2. 現代人のライフサイクル  
生まれる、育つ、教育を受ける、自立独立、仕事、結婚、子育て、老い、死
3. 人間の相互関係  
家族観、人間同士のコミュニケーション、結婚観、夫婦、親子、友人、仲間、自由と支配・被支配の関係、個の尊重
4. 仕事と生きがい  
社会の中で生きる、経済（収入と支出）の問題、自己表現としての労働（やりがい）

### II 住〔人間にとって住むということとはどんな意味があるのか、どんなのが理想的か〕

1. 地球という住処  
地球の環境や層構造、物理的条件、物質の循環システムと平衡系、環境問題、生態系
2. 人間にとっての住まい  
他の生物との違い、定住の歴史と文化、住環境の条件、住居の心理的・物理的機能
3. 日本の社会と住居  
日本の現代社会の変化と住の問題点、個人のライフスタイルによる住環境の選択、家庭と住居

### III 食〔食べることの意味とその社会性〕

1. 生物としての食行為  
代謝機能、エネルギー変換、栄養素
2. 食の確保  
食物連鎖、農耕・牧畜と自然破壊（生態系や環境への働きか

け）、食と人間の歴史、食の管理

### 3. 食文化

調理・加工・保存と技術、伝統食品

### 4. 現代の食生活の問題点

添加物、パッケージ、インスタント、レトルト、外食産業、食の自給、飽食

### IV 衣〔着衣の意味とファッション、社会的意味、洗濯〕

#### 1. 着衣の歴史と文化

着衣の機能（外的環境からの保護と社会性）、性による相違、歴史と文化

#### 2. 繊維材料と染色技術

繊維の種類と性質、天然繊維と合成繊維、染色

#### 3. 衣の管理

洗濯、保存、管理

#### 4. 消費社会における被服文化と問題点

購入、廃棄、ファッション、社会性（制服）

#### 5. 性文化と被服

### V 生殖・保育・教育

#### 1. 性

#### 2. 家族の形成と保育

家族関係、出産、人口問題、保育と仕事、父と母の共同責任

#### 3. 教育

しつけ、学校の問題、社会からの子供への影響、親子の関係

#### 4. 支配からの開放と自立

#### 5. 家事労働の分担

### VI 生活と環境

#### 1. 生活行為と環境汚染

ゴミの問題、生活排水、洗剤

#### 2. エネルギー問題

#### 3. 便利さと豊かさ

#### 4. 高齢化社会と福祉社会



の言葉に、すっかりその気になってしまふ。最後にアジアのパンツルックで記念写真も。

### ●話し合いの中から

○他教科との連帯や、学校の外へ子どもをつれ出すことが、整理された知識のみ込みきれいな答を出すお勉強からの脱出や将来の生き方として身につけていくことへの重要な鍵なのではないかと、他教科を含めた教員の体験談は説得力あり。○親の立場からの、子どもをもっと外につれ出してという声に、現実問題としての一学級の人数の多さや受験体制、管理体制などの問題が出た。

○ミシンやアイロン・まち針で遊ぶ中学男子生徒の実情から、男子には物を組みたてる感覚がないのではという意見に、ミシンの使い方はむしろ男子の方がうまいという体験談も出、男女差よりも個人差という話にもなった。しかし、近年の子どもの姿の変化は、数年前までは考えられないことが教室で起こっていることも現実のひとつ。

○自分の息子がLブラザーズの着ているようなパンツを欲しがり、頭からダメと決めつけていたが、息子たちが欲しがるわけが、今日のパンツバフォーマンスで納得との話に、やっぱり見て触れて動くことの驚異の力を感じる一幕。

○これから家庭科の教師になろうとする男性も二人加わり、先進的な事例を見てすごい教科だと思ったことや、今までや

らざれているという意識が、日本女子大のスクランピングなどで変化してきたこと、男女とも学ぶことの意味がこんな意識の変化にもあること、去年より今年の方が男子が増えたスクーリングの話など希望が湧いてくる話も出された。

### ●フォーラム後の反響

☆楽しい衣服の授業になるような気がしました。スクランピングでも感じたのですが、学校と市民(?)の溝は深いようです。でもいっしょに何か「しかけ」られそうな勇氣もいただきました。

☆今度ほしいぼったテーマでいろいろな観点(各教科)からやってみると面白いかも。実物を見せたことでパフォーマンスはインパクトが強くなった。いろいろな人との交流がもっと増えるといい。Weがそんな場になることを期待する。

☆一つのパンツからいろいろなことへ発展するもんだなあ。こんな授業が出来たらいいなあ。これから家庭科の免許を取るといふ男性がいることに感動。

パンツはおもしろい、授業でやってみないと、その後もたくさんさんの反響があった。分科会に出なかった人からも、サラダトックでのパンツを見て、ダンスの発表会でパンツを作って踊ろうと考えていたと聞いて、同じイメージのふくらみに、私はすっかり楽しくなって心も踊っています。

●分科会6●

# みんなにやさしい老後環境

## — 北欧を歩いて —

立山 ちづ子

はじめに

昨年八月、Weの読者でツアーを組み、デンマークのコペンハーゲン市、スウェーデンのカルマル市、ストックホルム市を訪ね、高齢者総合福祉センターや障害者ホーム、保育園等を見学。このときのスライド上映を中心に会を進行した。

スライド作成について少し説明をします。撮影者は長崎の山口・金子・馬郡、佐賀の鶴田、熊本の橋口・田崎・金津のみなさん、そして立山と複数です。素人ばかりですからたくさんの中から良い物のみを選んで編集しました。それぞれは生徒や友人たちに上映し、紹介をすで行っています。私も町内ボランティア研修会に招かれて、約八十枚を使って報告しました。なお、編集したスライドは、解説つきで六十五枚

一セットで販売をしました。報告集は九月中旬完成に向けて作成中です。この巻末にスライド解説を入れております。

スライドの編集は、次のような視点で行いました。私たちが現地を訪れて最も感激したことは、出会う高齢者の人々の表情がとても明るく、美しかったことです。そこで報告集のタイトルも「かがやく高齢者たち」としました。そのような高齢者の姿が、どのような環境によってつくり出されてくるのかについて、紹介したつもりです。その第一に、豊かな住まいが保障されていること、第二にお世話する人の量と質が豊かであること、第三に地域の中で暮らし続けられること、第四に自分のもてる力を最後まで発揮できること。もちろん、このような保障を整えるためには、その国の人々の長い間の試行錯誤があるわけです。この部分については、報告集

で読みとっていただきたいと思えます。

## 分科会の様子

スライドの説明は主として立山が行い、同行者からそれぞれの気付いた部分を補足してもらいました。同じ場所をみたつもりでしたが、お互いに見ていない部分、きいていない部分があり、同行者同士で学び合うことにもなりました。

スライドの内容については省略します。祝聴後、参会者の自由な発言で会を進めました。(発言者のお名前は省略)

○デンマークの方がスウェーデンより、制度がすっきりと整備されていますね。スウェーデンはいろいろなパターンがありますが、デンマークはあんまり立派すぎて日本の現状にはモデルとして合わないという人がいます。

○日本の場合、制度をよくするための歴史をたどっているのかどうか心配します。すぐれた国の制度を、日本の実状にいかんフィットさせ、取り入れるか、検討が迫られているところでしょう。

○イデオロギーに関係なく、高齢者の福祉は充実させていかねばならないですね。

○自治体の権限の強さも関係しますね。日本では自治体の力が弱いでしょう。

○高齢者と若者の接点があるかどうかも問題です。日本の現在、共有する世界がほとんどなくなっています。私は特別

養護老人ホームに高校生を実習として連れていきますが、「何にも話をするのがない」と高齢者の横で、彼らのためらっている姿がしばしばあります。

○子どもたちへの福祉教育の有無が浮かび上がってきましたが、デンマークには特になさそうです。たとえば、訪ねた保育園の指導目標は「自立と連帯」です。自分の身の回りのことができるようになることが最大目標で、グループ(一二人程度)ごとにミニの台所があり、そこで食事のあと皿洗いをします。また、子ども一人ずつ好きな人形をもって、毎日そのお人形の世話を自分でしますが、もしある子が欠席したらその子の人形を他の子が世話してあげて、その子の存在を忘れないようにする配慮があります。バスに乗った時、車椅子や乳母車の人を周囲の人がさっと手伝うことがごく普通に行われていて感動しました。

ボランティア精神をあえて教育しなくとも、社会の雰囲気のおかげで、子どもたちは援助を必要とする人には手伝う、という姿勢が自然に育っているんですね。

○羽田澄子さん監督の映画「安心して老いるために」のなかで、中学生が大人とともにデンマーク・カルンボー市に出かけていきますね。民主主義について、肌で学び、そのベースを拡げることも大切なことでしょう。

○障害者福祉と高齢者福祉は、北欧では同じこととして把握

されていますね。人間、生涯のどこかで必ず障害者になると国民に共通理解されています。日本人はいずれについても、よそごとで、まだ自分のこととして考えていませんね。

○「……したい」と思うことが実現できるように、生活全般にわたって、市民の生活上の権利として、要求することが必要ですね。いろいろな課題を、自分と同じところで考えていくような教育内容がほしい。

○人手をかけないとやっていけない面があり、マンパワーの体制作りが望まれます。

○自分のこととして考え、そしてこういうことをやらなくては、と声を上げること。自治体はもつと動く必要があります。○日本では自治体が市民にとって遠い存在になっているでしょう。自分たちが作ったものとしての意識が弱い。政治は汚いものという意識が強い。行政の一人ひとりが、もつと市民のなかへ出かけていくことが必要です。

○たとえば、ごみの回収を、業者の下請け仕事にしているでしょ。だから、ごみ回収の現状がわからない。

○役所は、本当はいろんな見本となるべきですね。施設は障害者の方が無理なく移動できるよう、作られているべきだし、人間関係も男と女が対等に働けるようになっていくなど。

○女性用の仕事は、現在社会にすでにあるのですが、それに向けての訓練の場がないので登用されにくい。女子差別撤廃

条約の<sup>か</sup>せが<sup>あ</sup>って、自治体は女性の管理職をふやさねばならないので、結局上に立って判断できるような、たとえば保母さんの経験者を課長などに登用している。事務職でできた女性たちは、管理職を自分たち自身が嫌っているのが現状です。

○車椅子の方が市議会議員となつて、市役所のなかを歩き、問題点を指摘し、改造が進んだという事例があります。日本人の価値観として、生産性に寄与しない人は無視する姿勢が強い傾向にありますね。

○大阪の浅井さんの実践で、高校生が車椅子に乗り、住環境をチェックして回り、自分中心の若者たちがその体験で他人のことがわかるようになり、自分の街がよくみえるようになったというのがあります。地域の街づくりにも、普通の人が関心をもつようになることが大切です。政治への不信があるわけですが、市民一人ひとりの責任でもあるわけです。

北欧の人々はすべてのことを自分のこととして政治を行っているのを実感します。もし、やってみようかといふならば、すぐ変えるという柔軟さがあります。

超高齢化社会を迎えるにあたって、課題をはっきりさせて小さいときからどうしていくか、教育の分野で考える必要があると思います。高校に、その一つの対策として、福祉科を設置していく動きがありますが、そんな小さな取り組みではすまされないのでしょうか。

○'88年に私もスウェーデンを訪ね、よかったことを伝えたいと思うのですが、周囲ではひけらかすように受けとめられる雰囲気があつてやりにくかつた。スウェーデンでは、若い女性、一つのセンターを任せられ、地域を担って、いきいきと働いていました。私が「大変でしょう」と声をかけると、「むずかしい問題は政治家が何とかしてくれるのでそれほどでもない」といった反応でした。国の政治家に任せておけば安心という信頼がありますね。

○私は政治を何とかしなければと思い、小田原の市議会議員に立候補しました。一五〇票の不足で落選してしまいました。が、周りに「もう四年長く生きて。次の選挙ではあなたに一票を入れる」という人も出てきてとても残念がってくれました。市政に高齢者や女性の声がかさることをこれから訴え続けていきたいと思ひます。

最後に、時間が足りないのです、それまで発言されなかつた方のみ発言をお願いした。その骨子を以下に記す。

○学校の近くの痴呆棟を含む高齢者施設に高校生を実習で連れていくが、高齢者とうまく話せない。中学生の方がためらわなく話せる。アメリカのディズニールランドで車椅子の人たちと数多く出会つた。私自身が障害者の方たちと自然に接することができるようになりたい。

○痴呆老人が5%、二十人に一人の割合でいる。'89年に在宅援助ケアセンターを設立し、今それを一万余所にふやすといっているが、在宅中心になればセンターでの訓練は実際は役に立たないのではと考える。

○福祉教育が道徳教育になりがちであることを危惧している。ボランティア指定校で一年間に十萬円の補助金があるが、その使途についての制約はない。あるロータリークラブの指導者は「疑問をもつまえに『はい』と受けること」という。

○生産性に関与しないことは無視するという傾向は教員にも強い。弱い人への思いやりを深め、共に生きることを育てることはどんな教科でもできると思う。

○障害者を受け入れている大阪の高校に勤めている。他校とは教師の姿勢が異なると思う。みんなに仕事があつて、負担はある。でも教員が妊娠したら、すぐ時間割変更が行われて配慮される面も、だからこそできているといえる。

○東京の定時制にいるが、車椅子生徒の入学について全生徒に説明があつたが、生徒は自然に受け入れた。気付いたところから始めたい。

最後に身内の方の介護で困っておられる方の発言がありました。北欧と照らし合わせて、わが国の課題が浮きぼりにされた会となりました。

●分科会7●

# 葬送の自由から女性・

## 環境を老える

若竹 キミイ

夏季フォーラムの開催地が東京八王子ときまってきたときから、考えていた。この地域にある市民活動と結ぶ分科会をどう持てるか。できれば八王子ならでは、のカラーを持ち、しかも全国に通じるテーマのもの……。地域住民であること、基盤として、家庭科教育とつながりを持つもの、教育関係者が住民としてかかわれるもの。いちばんいいのは、八王子市の婦人行動計画がどのように作られ、いま、どう機能しているか、ではなからうかと考えていた。これには、その道筋で学習会や情報交換等、少々だが共にした経過もある。

自治体の職員をはじめ、さまざまな職業の人が、見学とも調査ともつかない行動的な学習を多様に展開しながら、まちの住み心地を創る人の輪を育てている八王子ランドマーク研究会も素晴らしい……。そうこう思いあぐねて、その割に自分

の体が動かなかつたり、先方が忙しすぎたりしているうち、人見達雄さんと出会った。彼は八王子ランドマーク研にも籍をおくが、水問題、環境問題でも広く動いている人だ。私は環境問題の延長線で「葬送の自由を推める」彼と出会った。女の問題をご先祖ぐるみで解き難くしている葬送の問題、墓の現実。Weの夏季フォーラムでは何回か、夜更けての話題にのぼっていた。女の集まりのどこでも、生き死にの問題全てをさらってなお、頭痛肩凝りの難題とされている伝聞、共感があつた。

さて当日、くれぐれも二十人を越える参加のないように！など叫んだ甲斐あって、十一名はちょうどよい顔ぞろえだった。

参加動機かたがた自己紹介を一めぐりしてみて予想通り、問題の地ならしの整理が必要だと思い、ほとんどレクチャーの前後をとることになった。葬送、墓をめぐる歴史とその経過が私たちにもたらしたものの、そして現代の問題点、今後はどう見通せるのか。

元来、タマシイとナキガラを分けて考えていた日本人の葬法はオキツスタエ：山野や水辺に死者を捨てる慣わしであった。支配層においては儒教から土葬、仏教から火葬を導入し、墓もつくったが、庶民は江戸時代までのびのびしたものだ。徳川の宗門人別帳を境に庶民も墓を持つようになり、明治に至って墓地及埋葬取締規則（明治17）で法制化される。教育勅語（同23）伝染病予防法（同30）民法（同31）等、一連の法整備は、火葬・家墓パターンの一般化を効率よく方向づけた。からめ手から民衆支配・管理を完結させたのもあった。現在生じている問題のいくつかは、このあたりに戻して点検することで、ほぐれてくる。

新憲法を、新民法を、不十分なが精一杯生きた人を、死んだとたんに嗤うかの××家扱いこそ、うそ寒い。核家族が家墓を脱けたつもりで求めるファミリー墓は無縁墓予備群に他ならず、採石による環境破壊をも捨ておけない。一筋縄といかないもろもろをグイと突き抜ける人見さんの主張は「死んだら木になろう！ 生きているうちの否応ない環境破壊に

重ねて、死んでまで環境破壊は許されない」というものである。この先は、分科会参加者の相川美和子さん（神戸）からいただいた感想を抜粋して紹介したい。

### ● 参加しての感想

#### 相川美和子

本家の祖母が亡くなった時、百人近くの親戚が集まった。男性群は、必要な樹木や大工道具を持って集まり、葬列用の小道具からお棺に至るまで、年長者からの知恵をもらいながら作っていく。

女性群は、四食分の精進料理を準備する傍ら、死者（以後は仏さんと略す）に着せる着物を、千人針のように何人もで縫ってゆく。迷ったり戻ったりせずあの世に行けるようにと、糸に結び目を作らず、返し針も一切してはいけないように、前へ縫い進む。その着物を着た仏さんの傍には、生前お気に入りだった物や、あの世に行くのにこれがなければ不便であろうと思われるような物（足が弱っていた祖母の場合、愛用のツエやメガネ、キンチャク袋にハンカチなど）が一緒に入れられる。

近所の方が掃き清めてくれた墓（火葬場も含む）までの道を、血の濃い者から順に六人の男性が、仏さんと同じ白い着物を着てワラジを履いてお棺をかかえ葬列を組む。後には、

モチやリンゴやみかんや菓子、チョウチンや花やロウソクなどが、村の人たちの手に持たれて賑やかに続いてくる。

最後のお別れは、墓の中央の石台の上。親戚の者だけでなく、村中の人や、遠くから来て下さった、ちょっとした知り合いの人でも気がねなく花が入れられ手が合わせられる。

それから、仏さんの年齢や体格に合わせて火力調節が自然とできるように柴や薪が積まれた火葬場で、一晩かかってきれいに焼かれる。

お骨拾いも、親戚沢山で行なう。喉仏のどぶたけは小さな壺に入れられひとまず家の仏壇へ、それ以外は墓の中へ、そのままドサッと入れられる。墓の中は一家族の骨がミックス状態であり、底は土であるから、早く入った仏さんから順に土へ返っているということである。

私は、この至極疲れるお葬式がとてもし好きである。自慢に思っている。延べ三日に渡る一連の式は、若者にとっても、体力気力の限界みたいなものが後に残るが、それだけの事をして一人を送って土に返してゆく行事が一族の繋りと言うよりも（長くても短かくても、立派な人でも、あかんたれだった後悔ばかりの人でも）、生きた人へのささやかな敬意である。と同時に、後の者に人間の生の重さと生きることの責任みたいなものを感じさせる場でもあったように思う。

けれども時代がその余裕を与えてくれない。ニュータウン

に来た住人たちが、煙の出ている墓地を、モラルとして受け入れ難い。ヤパンと取る人も、教育上よろしくないとする人もいるようだ。また葬儀に対する老人の知恵が、確実に次代に伝わっているかという点、不確かな部分もある。近隣者の葬儀に対して休暇が思うように取れない、等。この手の葬儀の仕方がいつまで続けられるか……。

亡くなった本人がどう葬られたかという希望と、葬式を出す者の都合と、どちらを重視して、お葬式とは出されるはずのものなのか……ということを改めて考えてしまおう。

葬儀は一時的なものであるが、墓は永遠のメモリアルという代物であるので、ヘタをすると、永遠に意志に反したものが建つ恐れがある。考えてみればこちらの方が重大だ。

今回の人見氏のお話の、たかだか、家としての墓の歴史は百年もたたないのに、宗教法人の名の元もとに、不動産屋と石材屋と銀行がうまうまからまって糸を引き、今後二代目ぐらいでほとんどが無縁墓になるのにもかわらず絶大な墓地・霊園に対する思い入れ画策（商戦）を展開して、環境破壊を、国内外に起こしている。この意識改革をどうするかという投げかけの一つであるグレイブトラスト「死んだら木になろう」は、私が、従来の葬列を崩して、町風の葬儀に変えるのに、何だか思い切りがある以上に、従来の墓をなくして、植木にしようというのであるから、非常に突飛でかつ、興味深く考



えさせられた。

祖母の葬式があつた三田の地でも、地域への侵食が始まつた。地元の住人である(あつた)私たちは、人見氏が多摩丘陵の景観の崩壊、中でも自宅近くの高尾山の環境破壊を守るためにも墓の意義を考え直そうという提案に、一つの方向性として耳を傾け、今から始めなければならぬようなアセリが出てきた。

死んだら木にならう。私ならいちよりの木がいいな。私の好きな所には、必ずこの木がある。そして夜色づいた大きないちよりの木の下に立って空を見上げると、星が落ちて来たみたいに暗がりの中に落ちてくる葉が見える。時には、拾つてもらつてしおりなどにしてもらえると、うれしいな。

だが、木になった本人はいいが、それは実は死者のモニュメントだと知つたら、子供たちは何と思うだろう。森林浴で親子ハイキング。囲りの木々は、なんとか財団が保有しているモニュメント。そのふもとは骨灰がまかれ、死者のネームプレートが添えられている。それを自然のことに私たちが受け入れるのは、何だか大変な時間がかかりそうに思う。

霊が残るから、体は葬つてもよいというのが日本古来からのやり方らしいが、その靈魂と接触できると思われる唯一の場所が墓であろう。日常心の中に、亡き人のことが生きていると言つても、やはり具体的な場所で一つの型を取つて接触

し、モノと行動を通して表現したというのが日本人の抜け切れない部分だと思ふ。

最近はずいぶん夫婦を対象にした公園風の共同墓地が増中らしい。事務管理費の最終支払い日から十七年間は供養を受け、その後は供養塔を乗せた円墳の穴の中に遺骨がまかれ、後に新たな仏が入るといふ、従来の墓と合同供養と自然葬を巧みに一体化し、十七年毎に自動的に墓は人の手に移り回転されるので永遠に無縁仏にはならないというものである。

東京・深川のさるお寺では、遺骨を真空パックし、繊維強化プラスチック製の仏像の体内に納める方法を採用しているらしいが、この真空パックされた骨の最後は、いかなるものなのか？ 私はどう考えても、円墳の穴にまいてもらつて土に帰るほうが生物体としての人間の自然のなりゆきのように思える。

墓は家族のありようを映すと言われるが、そういうドロドロしたものがきれいに拭き落され、人間は環境の一つであるにすぎないことがはっきり認識された時、おのずと「ねこそぎの墓」(草一本生えないように、ねこそぎという除草剤をまいて整地し、コンクリートで五面を固めた墓)は新たな方向へと向かうと思える。

●分科会 8 ●

「違いとむきあう」ってなんだろう

— 気づいたらインタビュアー —

間瀬 中子

夏のフォーラム二日目の朝、和室に集まったのは八名。分科会の言い出しっぺの平井雷太さんの話から始まりました。

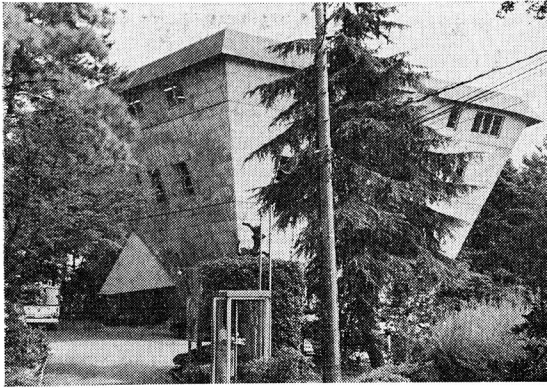
平井 毎夏、フォーラムが開かれているけれども、そこで一体何人の人が本当の意味で出会っていたでしょう。顔なじみの人はできてもインターアクションがあるような出会いはずう多くはなかったのではないかと思います。分科会で話し合うといっても実際は話を聞くだけであったり、話すだけであったり……。

例えば、A、B、Cと三人の人がいて、AとB、BとC、CとAという組合せがあつて、そこにインターアクションのある話し合いがあつて、初めて、話し合ったことになるのに、A、B、C三人が一緒に話しているだけで、話し合った気になつてしまいます。

今日の参加者は八名、この方たちが出会う組合せは二十八。「一人から始めて、七組の組み合わせ。七組×八人とダブルので二で割って二十八。つまり $n(n-1)/2$ の式で計算できます」

二十八組の組合せで話をすることは無理としてもせめて一人ときちつと出会うことをやってみましょう。その前に一人二、三分ずつ自己紹介をしませんか。——

登校拒否のお子さんがいて、そのお子さんが周りとは違うということでも排除されているから、違いということが気になつてという坂口ますみさん。学校を辞めたいと言ひ出した自分に対する親の反応から、親は自分のことを分かっていると思っていたが、どうもそれは分かっているつもりであつたと



会場となった八王子大学セミナーハウスの本館

いうことが、見えてきたという沢田康大さん。自分の価値観を押しつけてしまうので変わりたいという旅田律子さん。先生という職業はみんな一緒の方向を見ている気がしていやです、と興味をアジアに向けている山岡佐江子さん。学校に行くと先生の中で浮いてしまうという金子洋子さん。主婦は三日やったらやめられないという白岩敦子さん。好き嫌いが激しいので自分と違う人とやれるようになっていきたい間瀬。

#### 自己紹介をする

中で、この人と出会ってみたい、この人の話をもう少し聞いてみたいと、自分のインタビュー相手を決めます。まず片方が十五分インタビュー。交代して十五分またインタビュー。その後二十分でインタビュー内容をB6のカードにまとめることを

します。さっそく七組の人たちがインタビューを始めました。インタビューしながら時々他の組の話が耳に入ってきました。インタビューの後でカードにまとめて自分の相手を紹介しないといけないので皆さん真剣です。でも笑い声も……。互いにまとめた内容を確認しあって「あら私こんな風に言ったつもりじゃないのよ」「この表現きついからもう少しやわらかく変えて」と訂正し、その後互いに相手のことを他己紹介の形で発表しました。

インタビューの形で互いを紹介してみると、自己紹介の時とは全く違った姿がお互いに浮かんできます。話を聞いてくれる相手の興味に引き出されていろんなものが出てくるからでしょうか。お互いインタビューしあった結果をみると、不思議なことがいくつもありました。初めて出会った相手なのにインタビューの傾向が似ているのです。きっと二人の間にインタラクションが起こって波長が合ってしまうのかもしれない。また、インタビューの組合せの中に高校生(沢田さん)と高校の先生(金子さん)という組がありました。こんな出会いの時は自分の立場を忘れて対等な関係になれるのかしらと思いました。「現在の学校は自由と言っても、やはり自由の範囲があり、それはみだすことは許されない。しかし、生徒自身もはみだすことが不安で、外に出ようとする」と沢田さんへのインタビューを金子さんがまとめている

一日目夜は立食パーティーで  
なごやかに歓談



のですが、この二人は教師と生徒という立場を忘れて、学校のことや教師について話していたようです。金子さんは「学校の中にいる時は、まわりと違っているような気がしていても、今日、この場に来てみると、やっぱり学校という世界にどっぷりつかっているんだということに気がつきました。インタビュースされることで、自分が何を考えているのか、どんな価値観で生きているのか、今まで見えなかったところをかいま見た気がしました。なんだかひとまわり視野が広がった気がします」と感想に書いています。

私は山岡さんにインタビューしたのですが、第一印象は暗い人(ごめんなさい)でした。ところが実際に話を聞いてみると、ツタンカーメンの話から始まって、生徒とシルクロードについて文通したりする話や生徒だった女の子とタイの豆腐(縄でしばれるほど固い豆腐)を見に行くことを夢みているという話にいたるまで、彼女の好奇心が私にうつってしまうほど楽しい人だったのです。

山岡さんは「この分科会は思っていたのとは全く違う形式と内容で、それがまたおもしろくて、これぞ『違いとむぎあう』であります。教師をやっている、クラスの子にちょっと違う子、変わっている子がいると、個人的にしゃべる時はおもしろいけれど、クラスでまとめて何かをしようとするとどうも困っている自分がいるのです。一人ひとりの話を聞く時間がないなんていうのは



話したりないところはロビーで

いわけかな。そんなことないよね……」と感想を書いていきます。

この山岡さんの感想を読んで、平井さんのインタビュースタッフが動きだしました。

平井：初め、この分科会をどう思っていたの？

山岡：分科会の「違い」というのは、考え方の違い、価値

観の違いで、それを民族とか国や育ち方で分けて、分析してレッテルを貼り、それぞれの違いを認めようとはしない多くの日本人を少しずつ変えていこうというような会かと思っていたのです。

このやりとりを聞いていて、そうか、分科会のタイトルだけを見てそう思う人もいるのかと少しびっくりしま



2日目夜、キャンプファイアーを囲んで

した。私は実行委員会に出て話を聞いていたから、タイトルを見てもそんなふうに思わなかったのかもかもしれません。そして「不思議だな」と思ったことを率直に聞いてみると思いがけない返事が返ってくることに驚くと同時に、もしかすると「不思議だな」と思ったことを素直に聞いてみることで人と出会え、向き合えるのではないかと思いました。

一口に家庭科の先生と言っても、ここに集まった四、五人の人たちだけでもさまざまな人がいるのを見ると、家庭科の先生とひとくくりにしてしまうことはできません。それなのに「家庭科の先生」というと一つのイメージを持ってしまっている人がいることを実感しました。ですから、その人が何を考えているのか本当はどう考えているのか知りたい時はインタビュースタッフしてみると面白いかもしれません。生徒と先生、親と子、上司と部下がインタビュースタッフすることで対等な関係の話ができてしまったら、次の日から関係が変わってしまうような予感がします。

● 交流会 1 ●

# 藤田 進さんに聞く

半田 たつ子

つい半年前には、湾岸戦争がありました。マスコミの報道に釘づけにされ、私たちの日々の会話は、昨夜のテレビ、今朝の新聞が報じたこと、それに関して感じたこと、考えたことでもちぎりでした。しかし、戦争が終わってみれば、潮の引くよりもっと早く、人々の関心が薄れていく——湾岸戦争とは何だったのだろうか？ 私の中に渦巻いたもの、それをはつきりとらえておかなくては……。こんな思いで持った交流会でした。午後のシンポジウムの藤田さんのお話をもっと聞きたい、自分も語りたいたいと願う約二十名が集まりました。

まずカリフォルニア大学バークレイ校で教え、この五月帰国した東北大学の長谷川公一さんが、湾岸戦争の際のアメリカ西海岸の市民の動きを写したスライドを上映して下さいました。長谷川さんが写した七十枚に及ぶスライドは、戦争の

当事国アメリカの表情をなまなましく伝え、興味深いものでした（『We』'91年6月号42—45ページ参照）。

川名はつ子さんから、「反戦デモや抗議に対して、圧迫を加えられることはなかったのか」、中嶋里美さんから「帰還兵士のパレードをテレビで見た。この歓迎ぶりがブッシュ支持率を高めたのではないか」という質問がありました。次は長谷川さんの答えです。

「市民のデモを妨害する行動は、少なくともサンフランシスコではなかった。好戦的な人と討論する場はあったが……。CNNの記者が最後まで残っていたことに対し、記者がバックダッドにしていること自体、フセインに協力しているのだ、という抗議はあったが……。恐らく戦争に対する日米の文化の違いだろう。」

シンポジウムで藤田さんが話されたジャン・ジュネの話は興味深かった。もし、キリスト教徒だったら食事を出さなかっただろう。アメリカは政教分離をあまり厳密にしていない。ドル紙幣の裏に『われわれは神を信じる』と書いてある国だ。ブッシュ大統領は『神はわが国を支持している』と必ず言っているが、第二次大戦の時も同様だった。日本・ドイツのファシズムからわれわれを守ったのだととらえ、『正義のための戦争は許される』というのが、アメリカのメジャーの考え方だ。アメリカは本土が攻撃されたことのない唯一の大国であることも一因だろう。ベトナム戦争は正義のためでなかったことに贖罪意識を持ったが、クウェートへの進攻については正義という考え方がある」。

アメリカに留学していた山口里子さんが、「アメリカでは、正義のためと納得させたものが勝ち、というところがある」と補足。「ルールにのっとるなら、何をやってもいいと思っっている」(長谷川)というアメリカの多数意見を話し合った上で、藤田さんに語っていただきました。

「強制収容所、ガス室、『夜と霧』：と、一九四〇年代のナチズムのユダヤ人に対する反人間性だけを問題にし、シオニズムによってユダヤ人が解放されたと受けとめることには間違いがある。パレスチナの人に対して行ったことについては封印してしまっ、ヨーロッパでかわいそうな目にあったユ

ダヤ人が、イスラエルを建国したととらえるのは、責任回避だ。我々はこの抑圧のたらい回しをしてきた人間の歴史を絶えず問い直していかなければならない。ブッシュの『正義のための戦争』は、アラブ世界に生きていく人間を見落としており、何らかの優越感に立って作り上げたデマゴギーだ。

P KOにしても、再び戦争を起こさないためのものだというが、それは我々の側の論理で、湾岸戦争に於ける人々の犠牲を忘れてはならない。私達は湾岸戦争が終わった時のわだかまりを忘れてはならない。『国際協力』というロジックによって『正義のための戦争』というトリックを見破る決定的な瞬間を見失わされているのだが、それを明らかにするには、アラブ世界の側から問題を見なければならぬ。

『アラブ世界』とは、アラビア語で暮らしている人々の世界で、アラブの人にとって、パレスチナ・クウェート・エジプトは、生活史からすれば一つづきの世界なのだ。湾岸戦争までは、クウェートの砂漠にヨルダンの農民が野菜を運んでいたり、様々な自由な行動があった。今日アラブ諸国と言われているものは、第一次世界大戦後、イギリス・フランスが線引きをした結果生まれたものだ。このような支配のための国分けの結果、問題が噴出した。例えばエジプトは、かつては農業中心の豊かな地方だったが、完全な貧乏国になってしまった。エジプト綿花は、第二次世界大戦後、絶えず武器を

買うために持って行かれ、米や砂糖はすべて借金のかたととなり、エジプト農民は土地を売るしなくなつた。また、産油国に出稼ぎに行かなければならなくなつた。

'82年、レバノンの難民キャンプ虐殺事件が起きたが、パレスチナを保護するといつていた、アメリカもフランスもイタリアも放置する以外何をしたか？ だからこそ、湾岸戦争の時、アラブの人達は、イラクに対する立場のいかんにかかわらず、一斉に外国人が持ち込む戦争に反対を唱えたのだ。

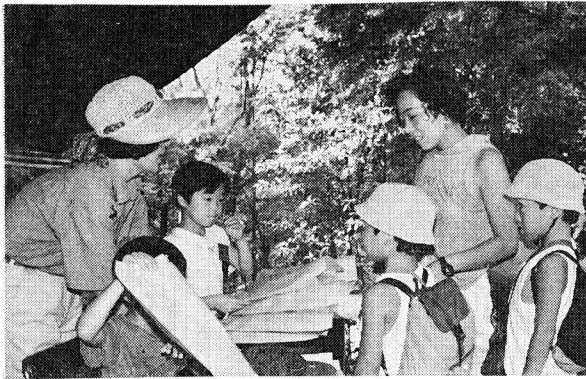
CNNが上空から流すテレビ画面には映らなかつたが、あの下には地上濠に、避難中を爆撃された一列をなす車輛の中に、るいてる死体があつた。国際政治、国際正義というロジックのもとに、アラブ世界の人々が犠牲になっている。日本ではPKO法案を認め、憲法九条精神を踏み倒して、自衛隊を出すのが確実化しており、アラブ世界の平和は『紛争』を排して一つ一つの国が成立していくことだという考え方が、中東で国を単位として平和が語られる時、一度たりとも人々の平和があつたことはない。私達は、民族とか国民という単位で平和を考へるが、アラブ世界は、国とか民族という概念ではとらえにくい所だ。中東の人々は『……人』という民族に特定されることでネガティブな現実を強いられるのであり、最もネガティブなのが、自分の国さえ許されない『パレスチナ人』と言えよう。パレスチナ人とはもともと、シ

リア地方（今のシリアから南はヨルダン辺りまでの一帯）南部のアラブ住民を指した。一九四八年ユダヤ人の国家、イスラエルを中東に作ったことで、パレスチナ人の悲劇が始まつた。

キリスト教徒がユダヤ教徒から分かれ、キリスト教は非ユダヤ人の宗教であるという立場がうちたてられ、ヨーロッパのキリスト教徒の中にやがて反ユダヤ主義が生み出された。しかし中東では、宗教がユダヤ教である人がユダヤ人という以上の意味を持たなかつた。ユダヤ教徒のアラブ人は、アラブ世界に大勢いたのである。重要なことは、キリスト教的ヨーロッパ社会では、ユダヤ人差別が歴史を通じて、反復され再生産されてきたが、中東の社会には『ユダヤ人』という別個の民族概念が存在しなかつたということである。

ユダヤ教徒のアラブ人というのは、違いがあつても相手の存在を許す。これはイスラム文化のなせる技である。対立は起るが排除はしないというのは、ユダヤ教文化、キリスト教文化や多神教や精霊崇拜の文化まであらゆるものを受容したイスラム教世界が育んだ多様性の共存状況と寛容精神の具体的姿に他ならない。イスラム文化の特徴は、アラビア語の『共に…する』という意味をつくる動詞の型があることにも現れている。先刻のジャン・ジュネの体験したエピソードは、イスラム文化の真髄にふれたということだつた。





受付風景—遠方から ようこそ

一九三〇年代、ナチズムは、ヨーロッパのユダヤ人を統々とパレスチナに移住させた。シオニズム運動、及びそれを応援したイギリス帝国主義の意図は、アラブを分断すること、ユダヤ人をヨーロッパ社会から追い出し、パレスチナに注入して、一種の植民地を作ることだった。ユダヤ人という概念を持たなかったアラブの世界に、ユダヤ人問題を無理やり押しつけたとも言える。

第二次世界大戦後、シオニズムのパトロンとしてのイギリスの地位は、アメリカに引き継がれた。一九四七年国連総会でパレスチナ住民の意思を問うことなく、パレスチナ分割決議がなされてしまった。すでに冷戦に入りつつあった米ソ両国は、

パレスチナ分割決議では共通の立場に立った。イスラエルの独立には、アメリカの支持とともに、ソ連からの武器や人員の面での援助があった。以来パレスチナ問題は、世界を映す鏡でもあるのだ。

ユダヤ人、パレスチナ人、隣り合っている者同士が、抑圧・被抑圧の関係にある。それが何時まで続くのか。こういう政治的・人為的仕組みに対して、ユダヤ人と言われようが、アラブと言われようが、パレスチナの大地に根付いて暮らしていこうとする人々は、誰もがパレスチナ人として仲間なのだという立場をとろうとしている。ここにおいて我々の手元にある『民族』という概念は、むしろ人々を縛るものとなっている。」

藤田さんのお話の後、参加者がそれぞれ自分の問題意識を語りました。戦争体験の有無にかかわらず、等しく湾岸戦争に心を痛めながら、何ができるのかもかしさを抱えて過ごした人たちでした。「民族」をめぐる、山口さん、長谷川さんと藤田さんの間でやりとりがありました。私は星野英子さんの「民族にこだわって、国家がそれを利用した時戦争が起こること」がわかり、ここから一つの課題が生まれた」と、鈴木まき子さんの「日本と世界を串刺しにした見方をしなければいけないことがわかった」との感想に、参加者の思いが集約されるのではないかと思います。

## ● 交流会 2 ●

# CMの中の性差別とメディア教育の可能性

吉田 清彦

今回の交流会は、昨年伊豆長岡で行われた'90夏季フォーラムでの分科会「メディアの中の性差別」の引き継ぎとして持たれた。

前回はメディア全般に亘っての差別について話し合ったが、今回は題材をテレビCMだけに絞って、テレビCMに見られる性役割表現の問題点と、テレビCMを使ったメディア教育の可能性について話し合った。

そして、今回の交流会の「目玉」は、「コマージュナルの中の男女役割を問い直す会」世話人の小川真知子さんが録画・編集したCMビデオの放映。第一部「CMの中の性役割分業編」、第二部「一九九〇～一九九一 女の裸、男の裸編」、第三部「海外傑作CM編」の合わせて四十五分間。キューピーコーワゴールド、三葉・ローリングK、東京たばこ・湯友、

ピップ・ダダンなどこのところ問題、話題のCM百四十作品を網羅した大変な労作で、これを「一挙大放映」。

やはり動きを持った映像の力は、すごい。前回は六十頁にもおよび「厩大」な資料を用意したものの、話はあちらこちらに飛びがちで纏めるのに苦労したが、今回は、途中説明も交えて一時間ほどのビデオ視聴のあと、「CMの中の性差別」について話は大いに盛り上がった(学校の授業も、おそらくそうなんだろうね。「メディアの中の性差別」なんて難しい話を教師が一方的に喋るよりも、実際に生徒の身の回りにあふれるテレビCMや、あるいは「ポルノ・コミック」などの実物教材を使って一緒に考えていく方が、よっぽど分かりやすく、授業も盛り上がると思うヨ)。

●参加者の発言から

\* 脇美智子さん(埼玉・中学教員) テレビは大きかにか見ていないし、特にCMの時間などは、だいたい家事にかまけている。最近のCMは、企業のリクルート用なのか、イメージを重視したものが多く、何のイメージかわからないものが多い。それに、洗剤のCMなど、面白くも何ともないものも多い。

\* 山岡佐江子さん(京都・中学家庭科教員) CMは好きなのでよく見るが、最近は一体何の商品のイメージかわからないものが多い。女性の裸など男の視聴者へのサービスだけのために作られたようなCMについては、バカな大人(の男)は仕方ないとしても、子供への影響を考えると、真剣に取り組むべきテーマだと思う。

\* 旅田律子さん(大阪) 自分にも四歳の子供がいるが、五、六歳の女の子に「女って大変よ」と言わせるソクダオリジナルの「ファーストママ」という洗濯機やアイロンなどのおもちゃのCMには愕然とした。大人には一定の判断力があるだろうが、小さな子供に知らないうちにこういった性別役割意識を植えつけるCMは何とかなければいけないと思う。

\* 桜井彰子さん(大阪・高校家庭科教員) 普段CMが意識の端に引っかかることはあまりないが、それだけ潜在的な影響力が強いということなのかもしれない。

\* 市川正子さん(岐阜・高校家庭科教員) 私自身はあまりテレビを見ないが、大学生の娘は「CMが一番面白いよ」と言っている。今回のビデオを見て、こんな風になっていたのなどと、認識を新たにしたい。

\* 大西麻里子さん(千葉) テレビは好きじゃないので、子供につられて見る以外は、あまり見ない。CMでは、裸が多いのが気になる。商品をまじめに説明するものより、女の裸で気を引くCMが多い。超ミニスカートが風にあおられて白いパンティが見えるという丸善ガソリンの「オー、モーレッツ」というCMが流されてから、もう随分になるが、こういうCMについて誰も何も言わないのはおかしいと思う。電話で個人的に抗議しても、特定団体からの抗議と警戒されるだけで、まともに相手にされない。運動の幅を広げて、もっと一般化してゆかないと。

CMの中の性差別については、説明されてはじめて、その差別性に気づかされたCMも多かった。普段それに気づかないで見過ごしていることが、かえって怖いと思った。

CM全般について言うと、ムードやイメージで売り込む日本のCMに比べて、たとえばペプシコーラのように、商品そのものを売り込むアメリカのCMの方がまじめなんじゃないかと思う。

\* 石川幸孝さん(北海道・大学生・家庭科専攻) 普段CMを

見て思うことは、最後まで見ないと一体何のCMかわからないものが多いということ、ドギツイCMが多いということ。今回のビデオを見て思ったことは、たとえばニッカ・オールドモルトの女性の飲酒をすすめるCMなど、性別役割分担以外にもいろいろな問題点を多く含んでいると思う。

北海道で有名なCMのひとつに定山溪大浴場のCMがあった、そこでは小学校二、三年生の女の子や男の子を裸で滑り台を滑らせているが、子供を裸にしたり、あるいは妙に飾りたてたりするような児童虐待気味のCMも問題だと思う。

\*北田京子さん(兵庫・私立女子中・高教員) CMだけでなくドラマやワイドショー、あるいはニュース報道も含めて、テレビを見ていると、あまりにも性役割がはっきりしていると思う。そういうことを家族の者に話すと、はじめのうちは反発されたが、今では少しずつ理解してもらえるようになってきた。男が料理をするというような新しい傾向のCMもたまに見られるが、いかにもといった作為性が感じられて、企業のイメージアップのためだけに作られているのではと思う。

同様に、合成洗剤のCMなどに最近やたらと増えてきた「地球にやさしい」とか「環境にやさしい」とかいったCMは、環境問題を単に企業のイメージアップに利用しているだけに思えて、見ていて腹が立つ。また、西欧人の白人モデルが多すぎることや、カタカナ英語の多用なども気になる。

\*赤岡絹代さん(大阪・私立女子高家庭科教員) 学生時代から意識して「性の商品化」の問題を考えてきたが、友達に言うとき「どうして、どこが? きれいじゃん」という反応しか返ってこなかった。女子高で生徒たちに話しても、生徒たちはCMの中の女の体のスリムなイメージに同化しているというか、あこがれを抱いているので、「女の人の裸はきれいやんか」と言われたりする。このあたりに、どう答えていくかがこれからの課題。

\*糸谷慶子さん(東京) とにかく今の社会は物が多すぎる。だから、本来不要なものでも、欲望を刺激してCMで売りつけるという構造を見抜く力を持たなければ。

CMや広告の中の性差別については、やはり気がついた人がその場で問題提起し、差別反対の抗議の行動を粘り強く起こしてゆかなければ。「行動を起こす女たちの会」や「STON90(性暴力と闘う女たちのネットワーク90)」などのここ一、二年の行動の成果を見ても、やればやれると確信できる。

#### ●メディア教育の可能性について

話が大きいに盛り上がりながら一巡したところで、現代書館から『テレビジャーナリズムの現在―市民との共生は可能か』という本を出したばかりのNHKの津田正夫さんが遅れ

て出席。津田さんはFCTの子どものテレビの会・市民のテレビの会の会員でもあり、日頃メディアの内側からへ市民とジャーナリズムの共働を熱っぽく語りかけている。実は昨年の分科会にも出席を誘ったのだが、同じ時間帯の「女の解放・男の解放」の分科会の報告者になっていたこともあり、出席が叶わなかった。今回は二年越しのラプコールが実って、「女の解放・男の解放」の交流会を一時抜け出して、こちらに合流していただいたというわけである。

津田さんからは、報道部門の女性がゼロに近かったNHKも、今春採用では三百名のうち女性が百名と女子局長が増えつつあり、女性の方がやる気に充ちているという話など、他、最近のNHKの「商業主義的路線」にまつわる興味深い話、あるいはNHK名古屋放送局の新社屋に「市民メディアセンター」構想があることなどを聞くことができた。

そのあと「CMの中の性差別」に話題をもどしたが、今度はやや視点を変えて、91年前半の話題を賑わせたビップ・ダンのCMを組上に上せながら、同じCMでも見る人によっていかに受け取り方が多様であるかの「演習」を行った。

ちなみにこのCM、水中から立ち現れた水着姿の女性が両手でバストを揺すり上げながら「ポヨヨーン」と言うものだが、「目が点になった」「エグイ」「グロ」「あざとい」「よく会社が許可したなあ」「最初見た時、体が凍りつく思いがし

た」などの否定的評価と、「ともかくすごい迫力」「いやらしいイメージは無い」「女はほっそり、きれい、男が守ってあげなくちゃ、という従来の描き方とは明らかに違っている」「今までにない傾向で、面白い」などの肯定的評価とが相半ばした。

ということ、話が佳境に入ったところで時間切れ、といういつものパターン。後半のテーマの「メディア教育の可能性」については、横浜の女子中高教員の土屋至さんから「コマージュの中の男女役割を問い直す会」宛に送られてきた「コマージュ」に『現代』を見る」という授業実践のレポートを配布して、フォーラム後の宿題とした。

土屋さんは高一の「現代社会」で、ご自分で録画・編集した四〇分間のビデオを放映する授業を昨年から試みているが、その時間、教室は「興奮の坩堝」と化すという。

今回の交流会の参加者は女性九名、男性三名の合わせて十二名。そのうち半数の六名が教員。今回放映したビデオや、土屋さんの詳細な授業実践レポート、あるいは今回話し合われたことなどを参考にしながら、次回92関西フォーラムでは今回の参加者のなかからテレビCMを使った新たな授業実践報告が行われることを大いに期待する。

来年もまた会いましょう。

## ● 交流会 3 ●

# アジアと私たち

稲 邑 恭 子

「アジアと私たち」の分科会は、午後の全体会の講師の、有光健さん、小木曾友さんにご出席いただいて、総勢十人の参加。人数は少なかったが、さまざまな職業、立場の、日頃アジアに心を寄せているひとたちが集まり、話が弾んだ。

中学校で家庭科を教える根津公子さんは、この分科会のいわば呼掛け人。昨年の夏季フォーラムで、外国人労働者の問題を考える分科会を担当して以来、その人たちの子供が、数年後、学校に入ってきたとき、受入態勢ができているのか、それに向けて自分たちは何をすればいいのかということ、焦眉の問題として考えるようになった、と。

根津さんからのお誘いで参加された高校の物理の教師野副さんは、かつてシンガポールの日本人学校に勤めていらしたときの、あるいは外国人労働者の支援の運動などに関わって

の豊富な体験から、貴重なエピソードや問題提起を。

例えば、シンガポールの駐在員は、日本の新聞には「使用人を置いて結構な生活をしている」などと書かれるが、対日感情が悪いので、一步観光街から外れると現地の人から物を売ってもらえない、自分たちでは買物に行けないからお手伝いさんを雇わねばならないという実情があること、そのあたりのことがきちんと国内に伝わっていないのではないかということ。また、現地の人に（なかなか話してくれないのだが）日本軍の侵略の話を書き、日本人の持っている暴力的な体質はどこから由来するのか、それが、「この子のためを思って」と言いつつやたら殴り飛ばすような学校教育にもつながっているのではと、考え込んでしまったということ。

教科書会社にお勤めの小林さんは、自分たちが作った教科

書が、東南アジアの人たちにどう見られているかを学ぶ必要があると、昨年十一月、教科書共闘会議のマレーシア・シンガポールへの旅を企画したひと。日本軍によるマレー半島での華僑住民虐殺、日本企業進出による環境破壊・公害の実態などを見聞、現地の人たちと交流してきた報告集をおみやげに参加。

「We」誌に「現代衣生活考」を連載中のむらき敦子さんは、加納実紀代さんたちと共に「銃後史ノート」の編纂に携わってきたひと。十五年戦争のなかで、「被害者」として語られてきた母親、女性の加害責任についてずっと考えてきた。大震災のときでも朝鮮人をかくまったひともいたことから、他民族でも顔と名前を知っている仲だったら、殺せない、かくまうことすらできるのではないかと。その意味でも、個人的な知合いを増やしたい、との思いで、昨年から、YWCAの留学生の母親運動に参加していると、その体験を話された。

兵庫の河上さんは高校教師。クラスに在日朝鮮人の生徒がいる。彼女のお母さんは、自分は中卒で働き、在日であることをひたすら隠し、わかりそうになると職場を変えて生きてきた、そうしなければ生きてこれなかったが、子どもには同じ人生を歩ませていいものか迷っている、と言う。

生徒の就職活動を支援できる態勢になっている学校なので、いっそ高校で就職したら、と薦めると、本人は、お母さ

んがやりたくてもやらせてもらえなかった勉強を私はやらせてもらえているから頑張るんや、進学したいと言う。大学出て、就職するなら、彼女は一人で戦わなければならない、どうしたらいいのか、いま情報を集めて三人で相談していかなければならないところ、と、近況を報告。

Weのフォーラムはおもしろい人に巡り会えるから、このところ参加しているとは、教科書会社にお勤めの長谷さん。「アジア民間交流グループ」で、小林さんと共に活動中。主としてインドネシアが対象で、会員は八十人くらいだが、サラリーマンばかりの団体なので、当初はスタディツアーを組むと珍しがられ、新聞記事になったりしたそうだ。

高校の体育教師の藤武さんは、中国の生まれ。自分はたまたま日本に帰ったから、日本人だが、あのまま、中国にいたら、中国語が母国語になっていただろうと思う。日本に暮らしていても、日本人という感じがどこか欠落していて、きちんと根付いていない感じがあって、シンポジウムでの李さんの発言のような、自分の国に対しての強い意識がないのはなぜだろうか、そのことをずっと考えている、と。

在日韓国人の問題に行き当たったのは、立川の学校にいたとき、日本名を名乗って入ってきている生徒との出会いから。そこから指紋押捺の問題にかかわらざるを得なくて、また、戸籍、家族制度の問題を考えるようになったが、そういうふ

うにしてもまだよくわからないところがある。いまは従軍慰安婦の問題を考え、かかわってみようと思っている、と。

塾主宰の平井さんは、自称「問題意識が低くて、好奇心だけで動いている」とのことだが、小木曾さんのいらっしやるアジア文化会館の留学生友の会の世話人。ふらっと留学生会館を訪れ、留学生と交流したいと言ったら、本気でやる気あるのだったら保証人やらないかと言われ、ああそうかと思いい、周りに言ったら二十人ぐらいが賛同し、それで始まった。いまは、中国人二人、マレーシア人三人の保証人をやっている。最初は、いいことやっているという意識があったが、それは相手にとっては迷惑なこととわかってきた、と。

いまは国際化⇨欧米化といった方がよい風潮で、日本人は排他的で、異質なものと共存できない、国際的でない、とみんなが言うが、はたしてほんとうにそうなのか、欧米社会のほうが入種による棲みわけが徹底し異質のもの切捨てが激しいのでは、と、意表をついた問題提起を。

アジア人権基金の有光さんは、三年ぶりにフィリピンに帰ってみて、飛行機の乗客の大半である風俗営業の女性たちが、今回は、二、三歳の子どもをつれて里帰りのケースが多いのには驚かれたとのこと。

それだけ日本への定着が進んでいて、不法残留の外国人労働者も増え、HALF（自分はBOOTHと呼びたい）が育っ

てきているのだが、そのときに気がかりなのは、文部省がいま、やっと言いだしてきたような、先進国の側から第三世界とどうつきあうかという国際理解教育、開発教育の教育論では、先が持たないのではないか、日本の中での人権教育、解放教育と第三世界の解放教育とが相互に結び付き統合されていかないと、今後の状況に対応して行けないのではないかといいこと。かわいそうだから、貧しいからという次元ではなくて、アジアに学ぶことはいっぱいあるのに、そこから吸収していくことができなくて、教育現場は非常に薄っぺらなものになってしまっているのではないかと。

例えば、カヤンという、狩猟しながら半分定着して農業をやっている人たちが自主的に農場をつくっている村に行ったときのことだが、少し離れたところにある、政府が提供した定留地に住み、TVも冷蔵庫もある生活をしていながら、そこにいれば森林伐採の賃労働に出るしかない、給料は悪くないが、それでは森を切ることで自分たちの首を絞めることになる、山の中に農場をつくり、開拓を自主的に始めている。自分たちは、今の生活のレベルを落とさねばと漠然と考えながらも、何処から手をつけていいかわからないのに、それをすぐやれていることにすごいなと感動したとのこと。

ただ、一方では、いま、アジアに辺境がなくなりつつあるほど、貨幣経済がどんどん浸透し、観光化の流れはすごい。



だから、いくらそれに対抗するものと試みていても、その波にさらわれ、いつのまにか、われわれと同じ問題に直面していくのではないか、という危惧もまた感じている、と。

アジア学生文化協会の小木曾さん。初めは宿舍だけだったのが、留学生の面倒を親身に見るところが他になかったので、たくさん相談に来る。それで、相談室というかたちになった。その次に、会館の中の学生の様子はわかっている、大学のなかでのことは皆目わからない。自殺する学生が出たりしてびっくりし、教育の現場を自分で持たないとわからないのではと思ったし、信頼できる日本語学校が欲しいというOBたちの要望もあって、八年前に日本語学校を創った。去年からは、日本人を対象に七カ国語のアジア講座を開いている。身元保証人を頼まれているのが六百人。東京都の留学生の相談の窓口はできて、たいていは紹介するだけで、実際に動いてくれるところは少ないので、そこから回された相談でパンク状態になる。去年など記録に残っているだけでも五千人。就学生の援助までほとんど手が回らない状態、と。

そして、私自身は……藤武さんの問題意識とも重なるのだが、子供の時から幾度も転校を重ねていたせいか、根無し草の感覚があり、おまけに西欧志向で生きてきているから、日本人としてのアイデンティティはなんだと言われると困ってしまう。「脱亜入欧」のある意味で典型の自分。その構造を

どうにか逆転させたい、そのためにも、もっと日本以外のアジアの国々を深く知りたい。

平井さんの逆説的問題提起は、いささか荒っぽかったもので、いろいろと波紋を巻き起こしたが、言いたかったことはわかるような気がする。アングロサクソン系の文化の持つ、なにがなんでも貫徹させてしまうような種の強迫的、完璧症的息苦しさ。タイ人で、在日十五年のクントン・インタラタイさんの著書の中の、日本では玄関で脱いだ履物をきちっとそろえるのを見てびっくりしたというくだりを読んで（きちちんとするのがどうも苦手な私は）なぜかほっとしたことを話すと、小木曾さんがそれを受けてくださって、日本社会の差別には一種独特のカチカチのものがある。優秀な製品を作るための徹底的な生産管理にも通じるその体質を何とか解きほぐしていった、ある種のいい加減さを獲得していかないと、とても他国からくる人たちと共に生きることができないだろう。また、そのことによって、同化か、しからずんば排除の体質が変わらざるを得ないことを願う、と。

日本の庶民の生活は、もっと昔はなにかも緩やかだったのでは、と思う。西欧を向いての近代化の過程で、「べき」が増え、過度の清潔志向、完璧主義、理論信仰 e t c パラノイア性を帯びてきて、社会がいつそう息苦しくなってきた部分があるのではないだろうか、ふっと思うのだ。

## ● 交流会 4 ●

# 家庭科スクランブルトーク

大和 洋子

まず自己紹介します。私はフォーラムには初めて参加した二十五歳の某生協職員です。

Weフォーラム最後の夜の交流会は、外は漆黒の闇、都心を離れた山の中に木々のそよぐ音がこだまするような会場で、テーマに分かれて持たれました。皆さん二日間の心地よい疲れと、明日はもう閉会、各々の日常へ、という気持とで、有意義な時を過ごしたことと思います。

「家庭科スクランブルトーク」は、教育現場からのすごい熱気が参加者の口を通して語られる場でした。内容的には、前日の分科会「どうすすめる、どうすすませる家庭科男女共学」を受けたものです。

家庭科の教師でもなく、共修運動に関わっているわけでもない私には、「あーっ、現場って何て大変なんだ。戦争だな」

が先ず感想。何十人もの生徒相手に悪戦苦闘する先生といろんな生徒……新鮮なおどろき、ももの木。

生活するための当たり前の技術を皆で学んでゆく、なんて言ったって、「針持たせようとしても言うことはきかないわ」「わらび餅は教室を飛び交うわ」、……こりゃ大変なんだ、と思いました。「わらび餅が飛ぶ」には、参加者も思わず笑ったり溜息交じりにうなずいたり……。調理実習で取上げたわらび餅、生徒の手にかかるや、壁にぶつけられる羽目になったという話です。

他にも、教師の側でいくら授業を気ばったところで生徒は醒めた目……という状況が広がっていることが分かりました。そういう状況を報告して下さる現場の先生方の顔は確かに疲れていました。「どうしたらよいのか?」「疲れはてて、本

当に困っている」……本音で話は進みました。ここでは、男女共修ということよりも、「家庭科とは何か」「子供に教えるとはどういうことか」という問題にもどって議論されたように思います。

家庭科が授業にならない、教師が甘く見られている、ふざけて收拾がつかない……これは子供たちの現実と教師の思いがかけ離れている証拠ではないのか。そこからこんな指摘もなされました。子供たちは以前よりずっと複雑な家庭、社会に生きている。家庭での人間関係から、役割を担っているという気持、一体感、充足感……を味わっていない子供に、一方的に家庭科を教えようとすることの問い直しから始めるべきではないか。こんな流れが交流会で出てきました。ポイントを絞ると大体以下のようになるでしょうか。

●日常生活で、体験の乏しい子供らを一カ所に集めて家庭科の授業をしようとしても、それには限界があるのではない

か  
●昔の生徒ならよく出来た家庭科の技術が、今の子供たちに出来ないのは、子供に甘えがあるのではないか

●衣食住生活で手作りが少なくなっている以上、子供が被服の製作に関心を失うのは仕方ない

これらは皆あたってはいる。まさにその通り、と参加者の多くが肯いていました。こういった状況が子供をとり囲み、家

庭科が揺さぶられている。いや、「家庭科が」というより、「家庭科だから」いろいろな問題が見えてきたのだと納得している人の方が多かったように思います。「家庭科だから」というのは、数学や理科と比べたとき、よりマテリアル(周)的)で、「生活」との接点があるという意味です。

わらび餅の話にしても、授業に手を焼くことにしても、子供は授業をハイハイとは受け付けないということですが、教師の側に、「子供は教える対象」という固定観念がある、との指摘がありました。そういう決めつけのない先生や授業に對して、子供は素直に向き合うのではないか、というのがです。

今年から家庭科を教えているという江口凡太郎さんがこんな話をしました。裁縫が全くダメで、とても生徒に教えられたものではないのだが、生徒にも不器用なことはもちろんバレていて、でもありのままに授業をしたら、生徒が先生に示した態度は実にフレンドリーで、「先生下手やな。僕がかかりにやってよろか？」と生徒がいたわってくれたという話に皆爆笑。先生と生徒が作り出すそういう空気、すごくいいな、素敵だなど思いました。これにはベテランの先生方も肯いていらっしやる様子でした。

背景になる家庭生活が複雑になり、消費生活も変化し、家庭科がやりにくくなっていることは想像できます。それでもなお、生徒と先生が教室から出発して生み出せることは沢山

ある。そんな風に勇気づけられもしました。家庭科の授業で行われている様々な試みも幾つも出ました。

チーズ、バターは牛乳から作られることを知らない子供たちに、チーズが牛乳から加工されてゆく過程を見せるために頑張った話。市販の牛乳では乳酸菌がそうそう生き残っていないから、牧場から分けてもらい、何とか牛乳からチーズを作り、生徒が見て納得したということ。同じ先生の、小麦粉のグルテンからお麩をつくる試みは、生徒たちの反応についてもっとお聞きしたかったと思っています。

「いまどきの子供の育つ環境は……」「加工食品しか知らないから」、あるいは「今の子供って想像力がないんじゃないの」と言って済ませるのは簡単ですが、そこからマイナスの発想をしていったら、何物も生まれなし、子供も変わらないでしょう。参加者の皆さんが、このことを、深く心にとめていらっしやると感じました。

家庭科は様々な壁に突き当たっているように思えますが、へ人間が生きてゆくための権利としての家庭科」という視座を持つとき、新しい希望があるということにも気付かされました。交流会でも、〈市民の権利としての家庭科〉〈権利としての衣食住の自律〉というところえ方の必要性が語られました。これは「ひとりひとりを大切にする」という考えから生まれる、ということ。交流会では、〈個の確立〉という

言葉で話が進みました。日常の場において〈個〉が確立していない限り、衣食住という人間にとって基本的な生活技術を学ぶ家庭科という教科が、可能性に満ちた営みとはなり得ない、という認識を、参加者が共有したと聞いていいと思います。家庭科をめぐるトークは、〈個の確立〉に収れんしていた訳です。現場の先生方からは、子供の個の確立には、他者との連帯、一体感が必要であり、連帯を踏まえた上でこそ〈個性〉や〈違い〉が尊重されるという指摘がありました。

この交流会に参加したことで、私は〈連帯〉や〈違いとつきあう〉ことを頭ではなく身体で理解することができるようになりました。もっともフォーラムを終えて大分時間が経過してから、そう自覚したのですが。

家庭科への思いは人によって様々でした。しかし、〈個〉や〈連帯〉に立ち返ることで、「何が何でも男女共修を」と思いながら、「ミシンの各部名称を暗記させて採点するような授業はとんでもない」と後向きな批判をしていた自分の視野が、一転したと感じます。もし私が家庭科教師であったならば、出来ることからやってみよう。悩んだ末授業に失敗してもいいのではないか。失敗を生徒と分かち合ったらいい。生徒という自分とは異なる存在を（騒ごうが、何しようが）、ありのままに受け入れて、そこを出発点に、食べ物の話をしたり、生態系を考えたり、糸と針を使ってみたり……とワク

ワクしてくる気持を抑えられなくなりました。

「家庭科教えるなんてこんな大変なことない」と想像していた私が、以上のような感じ方をするようになったのは不思議です。生徒、先生をひっくるめた連帯、そして個の重視。このことを考えるきっかけを与えられ、感じ方が一八〇度変わったのだと思います。私にとって何よりの収穫でした。

### 〈若竹キミイ〉

Weが目ざすもののために、フォーラムの都度、参加者が家庭科教育系の分科会と市民活動系その他の分科会に分かれることを惜しむ声がありました。それが家庭科教師の幅をひろげ、他でいろいろ努力している市民との連携をひろく、と。

しかし事実は二泊三日の限度内ではむずかしく、いわば改善の策かも、と承知で交流部分に「家庭科スクランブル・トーク」の時を試みて二回目です。家庭科系分科会に先だって持たれたのは昨夏、ことしは家庭科系分科会のあとに組まれました。フランクな良さは去年のもの、今回は一気に深いところから、それぞれのことが発せられたように思います。

前段の分科会に参加した人もしなかった人も混じる場で、何かを伝えつくりと語る声は熱を帯びました。現場のどうしようもなさを言いたい人も、何かひとつ突き抜けた語り口です。新しい家庭科を切り拓く面々も、話は宇宙から、生態

系から、国際的視野からと、カラリふっ切れた印象です。

内からも外からも、「生まれ変わる家庭科」の時に向けて、希望を見出せる話し合いであったと思います。メゲているヒマなんかないワ、という勢い、理屈に合わないけどこういうの、無視できない力なのです。

子どもに家庭を教えるのに、人の生き方を教えるのに、個が先か関係が先かという話題は、終わりかけの時間でしたが、中沢弘幸さんの話、佐々木賢さんのおっしゃっていたこと等ひき合いに出しながら皆に問いを投げかけました。しっかりと持ち越された問いが、十一月二十三日読者会「田中裕一さんと佐々木賢さんを迎え」で盛り上がるというニュース、うれしいことです。

ちょっとクサイけど、自らを、互いを育てる教育は、異和感から、不協和音からこそ、ということを思い出します。今年のテーマ、「違いとつきあう」の大きなおみやげです。私として大切にしたいことは、「権利としての家庭生活」について言えたことです。「We」誌で以前に、権利としての住生活が提起され、共学家庭科の基盤に接しました。しかしいま一つ、皆に受けとられていない実感、それは、ひき続いて、権利として衣生活、食生活……という展開にどうもならないもどかしさを持ち越していたからです。

● 交流会 5 ●

# 女の解放・男の解放パートII

津田 正夫

定刻を少し回る頃、交流会場のセミナー館談話室は、はや三十人ばかりの参加者が期待に満ちた面持ちで待ちかまえている。午前中の同名分科会に参加した人も三分の一位いるが多くの「何か起こるようだ」という類の風聞をききつけてやってきた、村芝居の棧敷のような気配である。まだ始まる前から実行委員の方から、「この会場は午前二時まで延長してもらってありますから——」と告げられて、司会の私は「エーッ？ 助けてよ」という気分だが、みんな当たり前のような顔をしてヤル気十分なのである。パネラーの星建男さんの風呂上がりを待ち切れず、まずは例によって自己紹介から。高校生・大学生二人を含め、ただのシングルやら「確信犯シングル」、離婚した人やらおじいちゃんやら取材かボランティアかよく分らない新聞社の人やら、午前中の議論の続き

をやりたい人やら種々雑多。

まず二人のパネラーから午前の議論の補足を含めて簡単な提起をもらう。保父十数年、「通い婚」を続けつつ「自分の加害性をみつめること」をテコとして「男の自己解放」への手がかりをみつめようとしている星建男さんは、午前中論争になった「女と男の関係性や共同生活を「結婚」という形にすることの是非」について、必ずしも形にこだわらなくてもいいのではないかと切り出す。自分の体験をふまえないが、新しい形にチャレンジするにはキビシサが当然伴うし、結婚を届ける公認制度でもキビシイものがある。形の是非にこだわっていても「解放」への話が進まないのでは——、とまずはジャブ。

日本青年館結婚相談所の仕事を、自己実場の場としても、社会的な抑圧システムを解くための運動としても位置づける板本洋子さんからは、午前中に話し切れなかった点として、相談に来る男たちをみていて、仕事の仕方を変えなければ展望が開けないのではないかと、いきなり重いボデーブロー。お見合いする時間さえないサラリーマン、大家族がくずれて、農業も商店もやっけていられなくなった男たち、これまでのあらゆる社会規範がくずれてゆく中で、見合いも恋愛もできなくなっている。お互いによい関係を作りあうことも大切だが、それ以前に企業戦士として戦死してゆく自分のあり方を見つめなおさなくては始まらないのではないかと、労働者は過労の中で出会ええないではないかと、次々に多くの具体的なケースをふまえての連続アッパーカット。取材にきたはずの記者さんも「いや私も一日十八時間も働いて、どうにも止まらないのです。働いていないと不安だし、一方で麻薬のような妙な充実感もあったりして——」と告白——。

そして議論はひとしきり男の働きすぎの問題へ。(と見てきたようなことを書いていますが、実は私、司会者の身でありながらやむを得ぬ約束の責任から、ひととき隣の「CMの中の性差別とメディア教育の可能性」の分科会にミニレポーターのため中座したため、以上の部分は取材による再構成です。以下この「記録」は個人的な痛みや、現在進行形の傷つ

きやすい具体的な自分の例を語って下さった方が多かったため、多少のボカシが入っていること、加えて寝不足やアルコールのためのボカシも多少入っていることを予め白状させていただきます。

中座からもどつてみれば、机の上には早や何本ものウイスキーやらつまみが広がり、「野川を守る会」のごじらさん差し入れの清酒「野川」が鎮座。十時も回ったのに参加者は増えるばかりで会場は試合再開のゴングを待っているのだ。私もやむなく観念して「バトルセックス深夜版の開始！」と茶碗をチーンと叩いたら、すかさず「バトルジェンダーだろう！」と野次が入っていやが上にも熱気が上がる(注、『バトルセックス』中野理恵さんら編、現代書館刊)。

本格論戦はまず、「夫婦・親子・家族という関係性は是非か」という午前中の議論の延長から始まった。「同居生活、育児、セックス、対話などさまざまな人間の共同行為や機能を結婚や家族の中に一元化して考えることに根本的な矛盾がある」(「結婚改姓を考える会」中村さん)、「日本では一人の親が子どものすべてを育てるが、文化人類学的には複数の「親」が色々の親の役割を分担して共同で子どもを育てるのが世界の多数の常識」(社会学の諸橋さん)、「一つの結婚に縛られなくても、男女の出会いは何回もあってもいい」(離婚

体験をふまえて徳丸さん)、「日本の夫婦は役割を演じているのではないか」(アメリカ生活からみて長谷川信子さん)、と次々に現在の結婚のあり方への疑問が出された。

それに対して、部落解放運動に没入して、仕事・組合・地域活動と(家族)を犠牲に過酷な生活をしてきた夫を背負いつつ、お互いに支え、自己変革をめざしてきたという大阪の吉井さんから、「妥協・役割演技といわれようとも、ささいな違いを問題にするのではなく、大きな理想に向かつて必死にしんどさをこえてきた。一人の具体的な人間とまるごと格闘するのが精一杯だし、まるごと愛していきたいと思うのが人間ではないか——」と機能分化的な生き方への疑問が出される(司会者大いに共感)。

そこへこの分科会創設の仕掛人であり、近頃映画評論にも凝っているという武田さんが「(愛)というのは、純粋に二人の間でだけ成立するものではなくて、いわゆる三角関係的な緊張感、関係を疎外して来るものへの憎しみやジェラシーと強い関係があるのではないか。いわば嫉妬のないところには愛はないのではないか——」と別の角度から、「愛の社会性」について矢が放たれた。

議論がすすむうち、「実は——」とある男性。「ウチは彼女の方が仕事に忙しすぎて私が家事全般の責任をもち、世の性別役割分担とは逆。その他の色々の事情もからんで、いま二

人共、別れた方がいいかもしれないと話合っている。でも、子どもをどうしようか、と悩んでいる——」と、子ども連れで生きる話へ展開。子連れ離婚して目覚めた体験を『シングルペアレント』(光雲社刊)にまとめた重川さんからは、男社会のいびつさ、学歴社会の奇怪な姿を正すには離婚も有効な方法であることが強調され、長谷川さんからは子どもも大人も夫婦もお互いにもたれかからないアメリカの生活の情景が紹介される。

一方、芸術家の夫と一歳半の子どもと暮らす女性からは、「夫が賞をとるような仕事をしてほしいのだけれど、夫の理想を優先させることはしない。本当にいい男になっていい仕事をしたいと思うって、子どものことや日常生活からつきあっている」と男である筆者にとってはシビアな提起。子どもの問題が加わると議論が一段とホンネに近くなるのだが、「育児」の段階、「教育」の時期、「思春期」の問題と、暮らしている子どもの年齢(親の精神年齢?)によっても課題は、認識は、大いに違ってくる。

星さんからは、「家事育児がうまくいっているからといって男女がうまくいっているわけではないが、男が日常茶飯をやるのが変わるキッカケにはなる」(会場拍手)。板本さんからは「女は炊事をやるときに、ゴミの問題も考えながらやっている。洗濯するときには、布地がどうなっているかを考



えずにやることはできない。電気を使うことと下北半島に核廃棄物処理場を作って農業ができなくなることはつながっている。家事育児は抽象的なことじゃない」と深い突っこみ。ともすれば、「免罪」「自己救済」的に家事育児に向かいがち。な私たち男の抽象論へ、他方で家事を「交渉手段」に使いがちな主婦たちの自己欺瞞へ鋭く迫る。

「子ども」の立場からも二人の高校生が卒直に発言。「好きな「闘い」にうちこんでいる父を尊敬はしているけれど、母と違う女性たちとも一緒にやっている。母だって家族にとらわれず、共感できる男性と一緒に仕事したっていいと思う」。「せっばつまった時に子どものことに逃げこむ大人は、自信がないんじゃない？ 子どもを親が育てなきゃいけないと思ってるようだけど、僕は自分で生きたいから、大人は大人で自分のことを考えたらいいんじゃないかな——」（同じ位の年頃の二人の子を持つ私としては、どうやってこんなになっ立した「子が育ったんだらう、とすぐに「親」の立場になって考えてしまう。イカンイカン）。

子どもをはさんだ男女の関係性の議論をひとまず措いて、「男女の共生」の問題を、もう少し具体的な方へ進めたい。午後のシンポジウムで出された様々な問いに引きよせて、たとえば星さんたちがとりくんでいる日本人男性たちの「アジ

アへの買春ツアー」のこと、板本さんたちが苦闘している「アジアからの花嫁さん」のことと、私たち自身の生き方との関係はどうなっているのか、どう変えていけるのか——。

それから延々深更三時まで、星さんがキーワードとして出した「男の加害性」や「強姦願望」をめぐっても、長谷川さんの「人間的自立性」をめぐっても、また途中脱線して私が加害体験をもつメディアの実態や政治改革論議にまでも話は及んだのだが、自己変革を語りあうべき男性参加者が少なかつたことや、男女の関係性・日常性で議論する方が魅力的で分かりやすいためか、「〈関係の社会性〉の方へはなかなか話が進まなかったという気がして、板本さんが帰りがけに発言した言葉に共感した。「今、いい男といい女のサンプルとか社会の規範とか一切失われた時代に私たちはいる。そこで女やアジアがこの社会の矛盾の調整弁に使われていつている。過去の歴史が活かされていない。アジアからの花嫁のことを議論する時、過去の侵略のこと、現在の貧しさがスポンと抜けおちてしまう。そういう歴史的・経済的構造こそ、現在の「アジアからの花嫁」・買春問題の根源だと思う」。

抽象度の高い政治や文化の中の性差別の変更や、身辺日常での共働共生に止まらず、今私たちに求められているのは、企業や地域の中での差別的・非人間的な様々な構造を変えてゆくことなのだろうと、強く感じた。

## 貴重だった六時間

鈴木 まき子

世話人根津公子さんと参加者二十数名。八王子の地下壕、圏央道建設が予定されている裏高尾、ホタルの生息地の順に、真夏の八王子を巡り、非常に貴重な時間を過ごした。

### 太平洋戦争を語る地下壕

八王子教職員組合の日高・豊島両氏に案内をしていただき、最初に高尾町の地下壕へ。団地の下水工事のうちに、一本の坑道がぼっかりと口を開けたことがきっかけになって、地下壕の存在が明らかになったという。

地下壕掘削は、第二次世界大戦も終局を迎えようとする一九四四年の秋から開始された。当時この地は、南多摩郡浅川町と呼ばれ、陸軍用発動機を作る中島飛行機の疎開地下工場として使われた。掘削を請け負った労働者のほとんどが朝鮮人で、その数は千人(家族を含めると二千人)にもなる。一般に強制連行されてきた朝鮮人は、僅かの食料と少

ない賃金で長時間過酷な労働に奴隷のように使われ、死者も多かったといわれるが、ここは例外だったようで、食料は豊か、負傷者は多かったが、工事による死者は少なかつたという記録が残っている。戦後、千五百人の朝鮮人は帰国し、残る五百人が八王子に住み着いたそうである。当時、その地下壕で働いていた姜寿熙さんの家が落合公園の前にある。姜さんは強制連行されて丹那トンネルの工事に加わったそうで、この壕も丹那トンネルと同じ最新の技術で掘削され、短期間で工事が行われたとのこと。

イ、ロ、ハと三つある地下壕(図1)のうちイの壕内に入った。落合公園の脇を通り抜け、京王高尾線のガードを潜るとすぐ坑口に通じる道がある。坑口は、地平面より数メートル高いので、張り巡らされている有刺鉄線に気をつけながら登る。入り口は大変狭く

急な坂になっているため、頭を打ちそうだ。坑内の温度は外気よりかなり低く湿度も高いので、猛暑を忘れるほどひんやりとしている。断層が縦に入っているため、雨の後にはたくさんの水滴が天井から滴り落ち、水溜りも多い。懐中電灯を頼りに、足元、頭上に気を配りながら壕のなかを歩く。何度か入っている日高さんたちも、いったん中に入ったら入り口にもどれないほど中は真っ暗、入り口付近に二本の蠟燭を立てそれを目印にした。

七十年代にマッシュルームを栽培していた残骸、ワインを貯蔵していたらしい跡や、当時使われていたらしい配線や電灯もあった。何十メートルか行くと岩盤が崩れて先には進めないが、左右に分かれたトンネルがあった。何本ものトンネルが基盤の目のようにつながっているため、当時の様子が少しでも推し量られるような跡が見られるのではと、もっと先に行ってみたかったが、案内の両氏でさえ行ったことがなく、崩落が何時起こるとも知れないと言われ、短い蠟燭がなくならないうちに早々と壕をでた。坑口を出ると、外界の光が眩しく目に刺さるようだった。

高尾の自然と圏央道(首都圏連絡中央道路)生々しい戦争の印象を体のどこかに残した

ま、裏高尾へと向かった。途中「圏央道建設反対！」と書いた立て看板をいくつも見つけた。天狗を大きく描いた凄いいものもあり、反対運動をしている人達の意気が伝わってきた。そうだった。

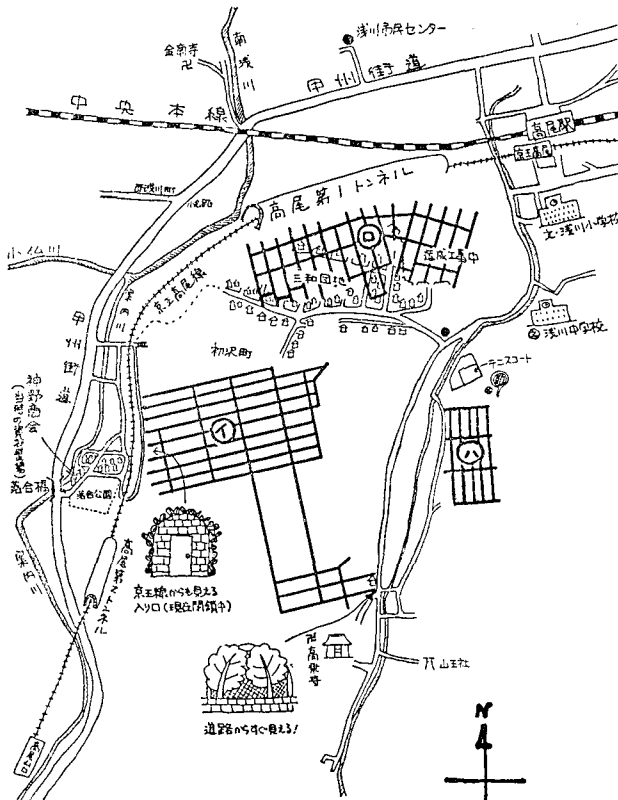
圏央道が通る予定の場所で、私たちは裏高尾圏央道反対同盟の倉橋惇夫氏の話を知った。「圏央道は、東京の都心から四、五十キロのところを神奈川から千葉まで一都四県を跨いでループ状に造る高速道路である。都心の交通を緩和したいというのが、建設省の表向きの理由。国道十六号線の混雑の緩和というのが八王子市当局の言い分だが、圏央道ができるのを当て込んで、すでに開発業者が秋留台団地など、多摩ニュータウンを越える大規模な宅地や工業団地の開発計画を出しており、回りの土地が買い占められている。実態は開発のための道路にしか思えない。

浅川地下壕の先にインターを造り国道二十号ともつなぐという計画。中央自動車道とつながる蛸の足のようなジャンクションがここにある。そのため立ち退きをしなければならぬ家が十七、八軒だったが、反対が激しくてほとんど国有地を通す設計に変更せざるを得なくなり、たった一軒だけが立ち退

く。この計画が発表されたのは一九八四年。もともと保守的なところでお上の意向に逆らうことはしないのだが、生活に根ざした問題なので、町会同士が一緒になって反対同盟のネットができた。高尾山の自然を守れという運動で、専門家の話を聞くシンポジウムも開いている。運動の特徴は、多くのブレインを

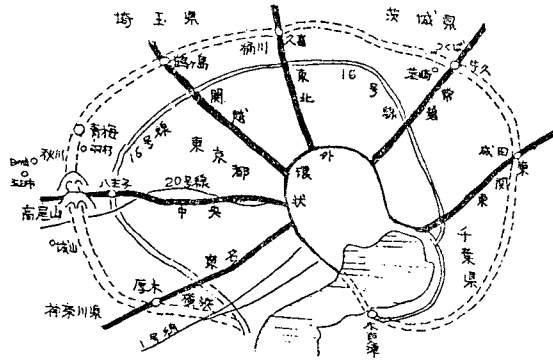
バックにした自主アクセスメントを作成し、建設省のアクセスはデータラメであることを証明し、計画を抑制する運動を七年間続けてきている。そのせいか、いまだに測量に入る様子はない。

高尾のホタルを尋ねて：小俣軍平さんと：長年、雑誌「ひと」の編集にも携わり、高



(図1) 高尾町の地下壕

環境破壊の圏央道計画



尾にホタルの幼虫を一万匹も放し続けてこられた小俣さんの案内で、案内川、小仏川にホタルが生息している様子を見て歩いた。  
 ゲンジボタルは五月の下旬から六月二十日ぐらゐまで飛び、濡れて昔の生えているとこ

ろに五百から六百ぐらゐ産卵する。一カ月ほどで孵化し、水の中に入った幼虫は、来年の三月末から四月の十日ごろの雨の降った晩に川岸に上がって、三センチほどの深さの穴を掘り、ウズラの卵よりちょっと小さい土繭を作り、その中で蛹になる。蛹から成虫になるまで大体一カ月。川の水が少なく、生活排水が多くなつて汚染が一番進む時期に、水の中に住んでいるので全滅してしまう。

案内川沿いで、かつてニジマス釣り場だった家の隣に農薬を使わないたんぼがあった。用水路とたんぼの中に、サカマキガイをいっぱい見つけた。ヘイケボタルはこれを餌にして生きている。この貝は、水田で繁殖する。人間と自然が共生しているところにはホタルがいる。

ホタルは清流のシンボルと言われているがそうではない。人間が程よく汚す水でないと繁殖できない。サカマキガイは、しろかきをする時期まで土の中に潜って生きている。用水路が暗渠になったり、コンクリートで固められてはサカマキガイは生きていけない。サカマキガイは農薬には強いが、除草剤には弱い。ホタルが絶滅しているところは除草剤を使っている。カワニナを餌にしているゲンジ

ボタルの場合、ニジマス↓ふん↓ケイソウ↓カワニナ↓ゲンジボタルという食物連鎖がうまくできている。カワニナが繁殖するの、清流ではない。自然の状態で成虫になれるのは二パーセントぐらゐ。多いときにはクリスマスツリーのように、と聞いて、みな歓声をあげた。今年は十匹にも満たなかったそうだ。国定公園なので、水生動物を守るために下水工事をしてほしいと運動しているがなかなか実現しない。うれしいニュースは、国土庁が、案内川を水生昆虫の保護地域に指定したこと。

電鉄の人達がホタルを増やそうと苦心して失敗した場所があった。今はワサビが群生しているだけだったが、当時の人達の努力は大変なものだったという。ケイソウがたくさん繁殖するように工夫したら次の年に、トビケラが異常発生して、カワニナを食べてしまった。今までにないカワニナを入れたために生態系が崩れてしまった。生態系を維持しながら自然と共存することの大切さを痛感した。

最後に高尾山に登り、展望台で祝盃を挙げ、フォーラムを締め括った。仲間と共有した六時間が忘れられない。

## ● 高尾に行ったあの日から……

### 川名はつ子

「健脚を誇る私に、高尾山のハイキングじゃ物足りないけど……、今年はWe山岳部主催のオプショナル登山も都合により取り止めになったし、まっ、いいか……」「それにしても、たかが高尾山に『懐中電灯持参のこと』だって？」と訝りながら参加した私は、大変な不心得者だった。

地下壕の真暗闇と冷気と、高い石の天井から滴り落ちてくる水滴に身を震わせながら、第2次大戦末期の陸軍の悪あがきとしか思えない突貫工事に強制連行された朝鮮人がこき使われた事実、私は真向かわざされていた。当時の生き残りのひとり、壕の入口付近で廃品回収業を営む姜寿熙さんが小学校PTAの運び込んだ古紙の受け入れ作業をする姿にも接し、日本人の戦争責任を時の流れのなかに消し去ることは許されないということを実感した。

裏高尾の「日影」「摺差」などと名づけられた谷間の住民たちが結成した園央道反対同

盟の倉橋さんのお話を、インターチェンジがこの付近に出来れば移転させられるという農家の前の道路に立ってうかがった。実は、隅田川上流に面した我がアパートも、対岸に建設中の高速道路に視界を遮られ、毎年ベランダで楽しんできた花火見物が今年はや台なされた。この高速道路が開通すれば我が家は騒音と排気ガスを被り、桜や紫陽花の名所、近くの飛鳥山は、地下をくぐるトンネルによって水脈を断ち切られるだろう。予め「影響は少ない」という答えの用意されたアセスメントの空しさ。反対運動に乗っていけなかった後悔に胸をしめつけられた。

高尾山のふもとの案内川や小仏川に蛍の幼虫を放流してもほとんど育たない……小俣軍平さんの嘆きを聞きながら、地方病(風土病)の元凶日本住血吸虫撲滅のためにカワニナを徹底駆除し、カワニナを餌にしていた蛍も巻き添えて死に絶えた甲府盆地の故郷を思い出していた。幼い頃の黄昏とき、竹ぼうきを振

り回して田んぼのあぜや川のへりに蛍を追いかぎ、あきびんの中に捕らえてきた蛍を青蚊屋のなかに放して、明かりを消し、白い小さな火の飛び交う様をしいんと眺めながら、いつしか眠りについたものだった。若い頃この地方病に罹ったのがもとで肝硬変から肝癌のコースをたどり、50代で逝った叔母のことも思い出された。蛍は清流に棲むというのは誤りで、田んぼなど人間の手の加わった環境で初めて育つという小俣さんのお話で、我に返る。

自然と人間の共生は何と難しいのだろうか！車、農薬、プラスチック……私たちの暮らしが生み出す環境破壊に抗って、ダサイと嘲笑されようと、自転車と石鹸愛用の生活を自身は心掛けていた。しかし、ひとは一度覚えた便利さは手放すことができず、生活をレベルダウンさせることはできないという通念に、私も強くは逆らえず、他人にまでそれを押しつけることはとても出来ない、と足踏みしていたのだった。でも、でも……、こうしては環境破壊、生態系の破壊のすさまじい勢いを食い止めることが出来ない！私は高尾に行ったこの日からまた思い悩み、焦り始めてしまった。

## ◆ たのもしかった

### 子どもたち

杉本 千代

昨年、七歳の愛と五歳の太郎をつれて'90 We フォーラムに参加しました。子どもがまだ小さいからとフォーラムに行きたい気持ちを七年の間、おさえていましたので、昨年は行く道すがら、初めて新幹線に乗るとはしゃぐ子どもたち以上に、私の気持ちははやっていかもしれません。そのフォーラムで愛は九州の啓ちゃんと友達になり、一つ下の彼女から毎年お母さんと参加してきたことを聞き、「どうしてお母さんは愛ちゃんたちのこと連れて来てくれなかったの？」と問うたのです。夏休みをとることのむずかしい夫に子どもたちを託すことは無理。でも二人連れては私が疲れてしまう。そんな思いですごしてきたこの数年を、私とは全く異なった状況で送りこえてきた母と子がいたことに私は驚きました。

そして私は、来年は子ども活動をしながらフォーラムに参加しようと思ったのです。

数回の実行委員会を重ね、フォーラムのイメージが固まってきたころ、私は仕事にしている社会教育の講座で保育を担当している来海<sup>まき</sup>さんに声をかけ、三田村さんといっしょに子ども係することにしました。従来、Weの子ども活動は実行委員の中からボランティアで出る形をとっていましたが、今年このお二人にお頼みしたのは異例のことでした。

第一日目は、セミナーハウスの探検ごっこと宿泊棟に表札をつける活動でした。三歳から十二歳と幅の広い子どもたちが集まり、小さい子の手を大きい子が引きながら活動を始めました。受付係になった愛と太郎は、啓ちゃんといっしょに名簿を見ながらチェックしていきます。初対面の子が多い中、不安もありましたが、割合すんなりと、友達意識は育ったようです。夕方の大人たちの立食パーティでは、子どもの紹介してもらい、大きな大人たちの間をすりぬけながら、テーブルから枝豆ばかり、沢山持ってきて、ジンジャエールで乾杯しあう子どもの姿も見えました。ロビーでは、大学生のお兄さんのオセロを借りてきてゲームに興じる姿もあり、夜にはお互いの家を訪ねたり、いっしょにお風呂に入ったりと、大人よりも早く関係づくりが

進んでいる様子には私たちがたのもしく感じました。

## ◆ 府中郷土の森へ

三田村 久子

二日目は二台の乗用車と一台のタクシーに分乗して今日の目的地、府中郷土の森へ分倍河原まで電車、そこからはバス。ところがバがなかなか来ない。真夏の炎天下、すでに子ども達は相当疲れている。小さい子たちはタクシーに乗せ、大きな子たちは歩いて行こうと、二組に分かれたところにバスが来て「ラッキー！」

タクシー組は一足お先に郷土の森の水遊び場へ。皆、イソイソと水着に着替え、水の中心へドボン！上の滝壺からどどん水が流れ、深さは子ども達の膝位。泳ぐ真似をしたり、噴水にビーチサンダルを押し当てて、水がシュワァーと噴き出るのを楽しんだり。

そのうちにバス部隊も到着。やっと全員集合して大きな子たちも遊び出した。水着を持ってこなかったC子ちゃんは、スカートをたくし上げて水に入り、小さい子たちと一緒に



遊んでいる。ちょっと深い所へ行って潜りこしたり、岩影に隠れてかくれんぼしたり、みんな、めいっぱい遊んで早目にお昼。どの子も自分の荷物はきちんとわかり、朝持ってきたおにぎりをバクつく。早々に水遊びにもどる子どもたち。

眠たくなった幼いD君はビニールの敷物の上でゴロゴロし始め、Eちゃんはもう水遊びはしないと、サッサと着替え、自分のリュック

クサックを何度も確かめ、荷物を出したり入れたりしている。きつとみんな保育園で何でも自分でやる習慣がついているのだろう。

一時過ぎ、「そろそろ帰るよ」と声をかけると、全員すんなり水から上がって来た。十分水遊びしたからもう満足したのか。それとも「こうするよ」と言われたら「ハイッ」と素直に従うように普段からしつけられているのか。「イヤダー！ もっと遊んでいたい」という声が出なかったのは意外だった。

帰りのバスや電車の中では、みんな疲れてお昼寝タイム。リュックを何度も確かめていたEちゃんもグッスリ。

セミナーハウスの「子どもだまり」へもどったら、昨日のお絵かきが楽しかったようで、すぐに絵を描き始めた子どもたち。本当にタフですね。三人姉弟で参加していたF子ちゃん、G君、D君のお父さんが迎えに来た時、G君は「イヤダー帰りたくない！」と大泣きして、ご両親をだいぶ困らせた。友達と遊んだのが本当に楽しかったようだ。

夕食の後、子ども達はまたまた元気で、トロの森でキャンプファイヤーをした。熊本から参加したHちゃんが炎の女神から火を受け取り、キャンプファイヤーは始まった。火

の粉がパチパチと夜空を焦し、皆で歌を歌ったり、ダンスをしたり、最後には「サモア」という素敵なマッシュマロのお菓子を残り火で作ったりして、二日目の夜は更けていった。

ひょんなことから、お引き受けした子どもも活動でした。Weっていったいどんなことやってるんだろう？ という興味もありました。

子ども達は近県から来た子たちが多かったようです。今年には現地の関係で、子どもの年齢、人数ともに制限があったようですが、仲間づくりをして一緒に楽しく過ごすには、ちょうど良いグループだったと思います。

夏休み中でもあり、子ども達のお父さんもお二、三日お休みを取って子ども達と一緒に過ごせないものかなアとも思ったりしました。そこは企業戦士の夫が多い日本の社会。個々の家庭にもいろいろ事情はあるのだろうと思います。ただ、子どもと一緒に参加する場合、母親にとって楽しみなWe夏季フォーラムなら、子どもにとっても年一度楽しみに心待ちするようなWe夏季フォーラムであって欲しいと思います。親の都合で参加させるフォーラムではなく、子どもが自主的に参加するフォーラムであって欲しいと思うのです。

# 映画「母たち」を観て

若竹 稜子

この映画は、日本を除くアジア地域の四つの村で実践された、女たちの奮闘記で構成されている。そのうち二つのストーリーのあらすじと、感想を記そうと思う。

## 第一話から

舞台はインドネシア、中部ジャワ。広々とした台地に生い茂る巨木の下で、朝市が開かれている。バナナ、唐がらし、卵、青菜、家具、子供服など、色鮮やかな品物たち。

一つの家族がクローズアップされる。母、イナム40歳。おばあさんと夫、六人の子供たちが、水汲み、大工仕事など、それぞれ朝の仕事に忙しい。朝食がすむと、イナムは内職（と映画では言っていたが、家内労働と言った方が合っている）に精を出す。パティックと呼ばれる、ろうけつ染めの一種である。稲作労働が中心の一家の一日が終わると、

みんなくたびれてぐっすり眠る。イナムは家族が寝静まってきたから、夜なべでパティックを染め続ける。

イナムの息子が結婚した。結婚式は村にあって小さなお祭りである。儀式は、母系社会のしきたりにのっとって、妻となる女性の家で行われ、夫側のイナムたち一家は、自宅待機である。こうしてひとわたり、典型的家族の生活ぶり、夫婦の誕生が紹介されたところで、場面は村のヘルスセンターに移る。

このあたり、女たちは大変だ。結婚したら体を休めるヒマもなく、次々と子を産み、閉経後、まもなく寿命が尽きる。子だくさんの背景には、早婚という要因もある。自分の意志で自由に出産をコントロールできない人生は、ずいぶんつらいだろう。悲惨という言葉が思わす浮かぶ。そこへ、話のわかる村長が

登場。村長は男性で、古老風の人物である。

彼は村の女性一人一人とヒザつき合わせ、悩みの相談にのった。まもなく村に、一人の保健婦が迎え入れられる。村の女たちのために、安全な避妊方法を学習する場所が設けられた。この小さな学習会は、次第に内容を深めてゆき、いつしか子産みのコントロールを学ぶだけにとどまらず、料理や裁縫を学び合ったり、楽しい集いの場ともなっていた。

## 第三話から

バングラデッシュは、北海道の二倍ほどの土地に、一億人の人口を抱えている。

ダッカ郊外の風景。通りを行き交う人々の映像の中に、女の姿は見られない。女たちは一体どこかしら？ 場面が農村に変わり、彼女たちはここにいた。ここも稲作中心の農村。働く男性のまわりで、女たちが落ち穂ひろいしているシーンが映った。子供たちも元気に、ネズミの穴から稲穂を奪い返す仕事に一生懸命だ。

スポットは、一人の女性、アメナに当てられる。アメナは、一度は結婚したものの、夫に見捨てられ、映画では経緯不明。持参金額の問題か？ 子連れで生家に戻っている若い母親である。アメナの生家は、裕福ではない



が、父親の理解が深く、彼女には、ささやかだが安心できる生活がある。

ある日アメナは、民間医療施設である、人民健康センターという、職業訓練施設に出向いて、そこでミシンの扱いを覚えた。彼女にとって生まれて初めての、モノを生産する喜びの発見であった。文字もここで学び、男性次第ではない人間としての生き方をつかみ取っていく。イスラム教社会で、徹底的に男女差別を教え込まれて成長してきた彼女にとって、それは革命的なことであったに違いない。アメナは一気に目覚めていく。

「女たちが胸を張って働ける仕事場がほしい。そうすれば、自分の力でくらしを支えていける」……アメナはまず村長を訪ね、思いを伝えた。村長は、空いている倉庫一つ、開放してくれた。次にアメナは、村の女たちを一人ずつ説得して歩いた。中傷や、いやがらせにも遭ったが、協力者は少しずつ増え、アメナの仕事場づくり計画は、軌道に乗り始める。初日のスターティングメンバーは何と二十二人になった。

アメナの父親は、働く母親たちのベビーンターを買って出た。はじめは、ミシンを使って、簡単な手さげ

袋をつくることから。数カ月後の仕事場は、依然活気に満ち、作品のレパートリーも、竹細工のカゴ、藤家具へと広がっていた。

今まで知らなかった喜びを手にし、生き生きと仕事をこなす女たち。そして、彼女らに力強く引っぱるリーダー、アメナの輝かしい姿が映し出される。

第二話と第四話は、それぞれ、タイのダバオ市で、医療衛生指導に生きるマメルタのストーリーと、メキシコ、ベラクルス州で、無医村のたちが村中を巻き込み、「健康の家」を建てたストーリーだった。

全体を観終わって、いつまでも私の胸に残ってしまったのは、第三話、アメナの言ったセリフである。村の女たちを説いて回るとき「娘に持参金を沢山持たせてやれるようになる。そのためにも一緒にやりましようよ」こんなことを言わせてしまっただけ「あーあ」である。

女の側から視ると不愉快なシーンが少ないように気をつけて作られたドキュメンタリーであった。まずドキュメンタリーに傍点の意味は、なんだか、どのストーリーでもできすぎているように思うからである。制作過程はよ

く分からないが、村長に直談判のシーンなど、うまく撮れているのがかえってやらせっぽいのだ。そして不愉快(?)というか、もっと深刻な、悲しくなるような現実の情報が伏せてある。隠しておいた方がメゲずに励まされるだろうという、作る側の意図も分からないのではないが、そう考えると、カメラを回す男たちの影が、チラつく。

日本でこの映画を観た私たちとしては、こうした実践紹介が、どんな効果につながってほしいか、ということを考えたい。

日本が経済優先のすみ方をしたあげく、水も気体も石も金属も、全く今まであり得なかったところに運んでしまっただけ、もう循環系に返してあげられなくしてしまっている、こんな進歩をくり返さないために、女性としてよりも人として、どんな自立が重要か、探っていく場をつくらなくちゃと思った。こんなこと言ったら、自分からやれ! という声はすぐ飛んでくる。Weは厳しい。

めでたしめでたし、ばっかりの映画だったが、皆さんのご感想はいかがですか。

(配給) 桜映画社 東京都新宿区西新宿1の22の1 スタンダードビル ☎03-3342-5768

## サラダトーク

大西麻里子



例年、フォーラムの最終日は、分科会の報告と、前日までのプログラムの感想その他を述べ合うのが主な日程となっていました。しかし、せっかく顔を合わせていられる貴重な時間を、後から増刊号を読めば済むことに費やすのはもったいない、ということと、今回は、フォーラムに参加された人と人がより親しく交歓できるような、新しい企画がたてられました。担当の内山裕子さんが名付けて、「サラダトーク」です。

「サラダの中のキュウリやトマト、エビ、イカのように、異質なものが集まっておいしい味のハーモニーを創っています。」

る、そんなWeフォーラムにびったり」のさわやかトークの時間。それは七十名ほどの参加者で、まず、アジアの生活着、パンツルックの発表会で始まりました。

昔なつかしいモンペのような、あるいはエキゾチックなアジア風あいのパンツの数々をはいて、にわかモデルの諸橋さん、杉山さんから十数名の方々が会場を一周。見ていると、どれも軽々とはき心地がよさそう。「フォーラムに来て（上の方が）解放され、これで下の方も解放されました」とのあるモデルの方の感想に一同共感、大拍手。前の方に一列になり、机の上に乗っていただいで一着ずつに詳しい説明をききつつ、また、その簡便さや合理的なことに感嘆。前日の分科会のために用意したものであったそうですが、このパンツのファッションショーは大成功。最後の芦谷さん着つけ、相川さんモデルのサリーが華やかだったこともあわせて、今回のフォーラムに不足していた歌舞音曲の類がようやく加味され、最終日にして、五感全部が満足満足と、そんな感じになりました。

会場がなごやかになった後は、平井雷太さん担当の「インタビューごっこ」。参加者同士二人が組になり、相手に十五分間、このフォーラムに参加してどうであったか、などを聞きメモをとり、清書したものを読み上げるといふ手法です。大勢の人の前では十分にしゃべり切れないと感じがちなどこ

るを、一味ちがった体験にしていたかどうかというわけです。

ガヤガヤとしゃべり合った後、十組の方々から、次々に、愉快な意見が発表されました。「昨年は実行委員長だったから、今回のんびりできて楽しかった」「Weの人たちはみな、親しみやすい人でよかった」「男性の参加がもっとあつたらいい」(田代・若竹組：敬称略、以下同様)「分科会・交流会はいい。全体会はいらないのではないか」「シンポジウムは規模の問題でフォーシ切れない所があり、会場からの発言も、礼節を知るものとなっていた」(瀬戸井・中村組)などです。発表されなかった分も含め、次ページに載っていますので略しますが、五組目(酒井・長谷組)の発表後、ちょっとした論議が起こりましたので、紹介します。

前半のパンツのショーでモデルをしていた平井さんが、パンツ型にまぎつけてあつた布を広げて見せた時、「恥ずかしいという思いで(後の本人釈明より)」「ストリップパーになつたみたい」と言いました。それに対し「無意識の中での女性への差別がにじみ出ている」(酒井)、「酒井さんの言うこともわかるが、平井さんと親しいせいか、別に何も感じず、かわいじゃない、ぐらいに思った」(中嶋)、「中嶋さんが何も感じないというのは、人前で衣類を脱ぐことは恥ずかしい、と感じる男性を好もしく思う感情がWeのフォーラムに育っているからだと思う。ストリップイコール女性という先入観その

ものをも問ひ直さなければならぬ」(半田)などの意見が出ました。

私は、平井さんがテレて言っている、とわかっていても、イヤなことを言ったなあ、と思いました。そして皆さんの意見をききながら、もしここに、ストリップパーの人がいたらどう思うだろうか、と考えていました。何でも言える、ということはいいこと、なのでしょうが……。

この件でサラダトークはビリッと隠し味のきいた仕上がりとなりました。来年は、こういうのを最初の全体会でしたらいいなと思いました。(大西)

平井さんが「ストリップパーになつたみたい」と言った時、私はその言葉と女性をなら結びつけてはいませんでした。昔、何かの雑誌でサンフランシスコにある男性のヌードシアターが女性たちで一杯だったという記事と写真をみたことがあり私も一度見たいなと思いました。アメリカの女性解放運動の人たちが作った男性ヌードカレンダーを友人が見せてくれた時も、一部欲しいなと思いました。私は親しい仲間たちと性や裸について語るのはとても好きです。但し許可なく決して公表はしません。サラダトークの後、昼食を食べながら酒井さん、平井さん、間瀬さんと私とで語り合いました。大西さんの提案いつか実現したいですね。(中嶋里美)

## “インタビュー”やってみました

インタビューのすべてを載せたいのですが紙幅が不足です。九組を紹介し、雰囲気をつかんでいただきます  
(編集部)

### ◆高橋優子さん◆

☆分科会は「北欧の旅」に。理科の高校教員だが、家庭科に大変関心がある。Weに「北欧ツアー」の記事がのっていて、すごいなあと思ひ、分科会に出た。介護のこと、自分の親のことを考えると、甘えが出てきたりするので、多分いい関係がつかれないと思う。北欧の人たちは、生きる価値観が日本とは違うのではないか。

例えば、北欧では老人が当然のように大事にされているが、日本では生産性のないものは切り捨てられる。日本に老人福祉が根づくためには、日本の価値観が変わらなくてはダメだと感じた。北欧の場合、乳母車を通れるように道を整備するなど、行政がきちんとしている。そのため、若い人た

ちの発言には、政治に対する信頼が高い。

☆交流会では「女の解放・男の解放」に関心があるが、このようなテーマは、その人の原体験の反映が強いから、私などはただ聞いて終わってしまうことになりかねない。そのため「藤田さんに聞く」交流会に出た。シンポジウムでは、李さんの話に興味があり、思いがよく伝わった (梶原公子)

### ◆梶原公子さん◆

☆今回はじめて分科会・交流会とも家庭科に出席。共学は、何年も前から運動があるが現実には文部省サイドの動きしかみえな。この十年前からやってきたものがだめになってしまっただけではないという危機感がある。

☆分科会では、授業の事例の紹介のような形になった。それはそれでおもしろいが、ただ事例を披露するだけでは意味がない。

☆交流会の最後に、家庭科では生活の自立Ⅱ個の確立が大切だとか、人間のつながりが欠如しているとか、おもしろい議論が出てきて終わりになったのが残念だった。

☆何をどう教えるかというこの前に、その授業を受け入れる生徒の態勢はどうかということを考えてしまう。

☆この十年生徒の変化が甚だしい。人と人とのつながりも希薄だし、親も物質的な充足を子に与えていれればいいと思っている。ヒトに対しての関心がうすく、フワフワして実体のない感じの生徒が多い。こういう生徒の現実を踏まえた上で、何をどう教えるかを話し合いたかった。

——生徒の現実をしっかりと見据えて、それとどう格闘していくのか、現場で悩む梶原さんが少しわかった。(高橋優子)

### ◆高橋富士子さん◆

☆Weとの出会いは一年前。知人からすすめられて、新しい家庭科というサブタイトルは、家庭科がきれいになっていった学生時代の



おとなり同士、インタビュー

思い出とつながるが、執筆者は家庭科の教師が多いものの、多方面にわたって興味あることが取り上げられていると思う。

☆フォーラムには初めて参加したこと、職業が助産婦であることから、時間外で人との出会いが少なく、もっと自分から出ていったほうがよかった。

☆分科会の「親と子が水平に向きあう」は、日ごろ妊産婦や父親に、子育ての指針や母

性・父性の意識がないと感じていたので、参加者の生の声を聞き、共感したり、納得したり、何かしら得るものがあつた。

☆女の解放・男の解放は、受身になって聞く側に回ってしまったためか、もっと続けてそこにいたいという気持ちにはなれなかつた。何度か参加している人たちの再会の様子を見て、こう感じた。(大沼洋子)

◆大沼洋子さん◆

☆高校の家庭科教師。大学のスクーリングへ参加のため、フォーラムは八月三日の全体会・交流会にしか参加できず、残念だった。

☆Weは創刊号からの読者。家庭科の教師だが、フォーラムで教師以外の人たちとふれあい、家庭科以外の話題に接することを求めていたが、交流会は結局「家庭科スクランプルトーク」に参加。もっと他の話を聞きたかったが、初めてなので、積極的に他の参加者と話せなかつた。家庭科の話も、先があまり見えてこなくて、残念だった。毎年参加する人が多く、初めての参加者は、何を話していいかとまどうところが多かった。

☆しかし、仙台では聞けない話がここでは聞

けるので、刺激を受けた。帰って「夫婦別姓ウヌン」というと「何、それ？」と言われるのが悲しいが、めげずに仙台でがんばる。(高橋富士子)

◆山口里子さん◆

☆アメリカ留学から帰国して、久々の参加。

☆留学前から日本人が「違い」を否定的にしかとらえないと痛感していたが、留学して、その感をさらに強めた。日本人が「他」と違う「個」を持ち、違いを肯定的にとらえ、違う人と共存することを学ぶことが、日本社会の性差別、人種差別の問題に根本からつながると思う。今回のテーマ「違いとつきあう」にひかれ、参加した。

☆「女の解放・男の解放」では、経済的にも生活者としても自立している男女が同じテーマで話す時に比べて、日本社会のシステムや現状を前提にしたままで話している感じがした。

☆シンポジウムは、パネラーと会場が話し手と聞き手にはつきり分かれ、平場としてのディスカッションの感じとは大分違った。

☆アラブの世界は女性差別が一段と激しい世界という印象があり、関心をもって学ぼう



風景分科会

としなかった。交流会は大変勉強になったし、今後も勉強の必要を痛感。(藤武礼子)

◆藤武礼子さん◆

☆テーマに惹かれて出席。違う人と出会うことが自分を変えるインパクトを持つし、受容性を豊かにするので、大切にしたい。

☆「どうする家庭科」に出て、共学に伴うカリキュラム編成に、資料が有益だと思った。

☆シンポジウムでは、自己の確立には他者の

個を認めることが条件、が心に響いた。

☆交流会「アジアと私たち」では、自分自身日本人としてのアイデンティティ、現実感というものはつきり持てないので、「よくわからない」感じがあった。(山口里子)

◆入江一恵さん◆

☆今年のWeフォーラムは、例年と比べても密度が濃かった。講演、シンポジウムも、インパクトの強いもので、アジアとのかかわりを考え、行動していく出発点になった。

☆Weフォーラムには二回目から参加。テーマも「自分らしさをこそ」から「暮らしをむぐ」「出会いは歴史をつくる」に変わってきた。第5分科会の最後に出てきた「個の確立」か「人とのつながり」か論争は、ぜひ、もっと突っ込みたいテーマだ。

☆五年前に高校教員をやめてから「自分のやりたくないことはやらない」という気持ちで、水の問題など、市民運動とのかかわりや、Weへのかかわりが強くなり、現在の勤務先も結構居心地がよい。(寺本 勉)

◆寺本勉さん◆

☆大阪府立園芸高校の英語教師、家庭科教員

免許をとるため、日本女子大スクーリング受講中に参加。小五、小三の子どもと中学校教師のつれあいと父親の家族。

☆家庭の中では働かざるもの食うべからずで、家事分担は子どももやっている。母親の没後、父親が生活的に自立していない姿を見て、家庭科の男女共修が前任校ですすめられていたことから興味を持ち、現任校に転任するチャンスに家庭科の免許状習得を決意した。三年目で今年中にはとれると思う。家庭科では住居、食物、家族に興味を持つ。おもしろい。

☆フォーラムには初参加。スクーリングに行き、フォーラムに参加して、疲れた。

。分科会は家庭科。共通した問題点が出たことは勉強になった。生徒の自立を促すか、連帯かの問題が出たものの時間切れになった。この問題は、もっと話を深めたかった。名前だけ知っている人と出会えてよかった。来年もぜひ参加したい。(入江一恵)

◆むらぎ数子さん◆

☆東京のWe城北の読者会のメンバー

☆一九四〇年代にすべての国民に制服を着せようという動きがあった。愛国婦人会、国

防婦人会はかつぼう着で戦争を支えてきたが、さらに男にも女にも、子どもにも制服を着せ、戦意を高め、繊維資源の節約もかねて、男に国民服、男の子にも軍服につながる子ども服を着せた。婦人標準服は型がしほりきれないで遅れて発表。もんべだけが強制という形で普及し、婦人標準服は広く知られるまでに戦争は終わった、という。

☆制服にこだわることの重みを改めて感じた。衣生活をとっかかりに、くらし方を考えようとしている。そういう思いでフォーラムに参加し、「こんな家庭科をやってみよう」で、パンツと出合っただけだった。☆息子が学んでいる家庭科のひどい授業を見ると、Weの人たちとのギャップが非常に大きいと感じ、親の位置からのエールを送りつつけている。

——私も教師としてそういう人と一人でも出会えたらどんなにかうれしい。Weの連載「現代衣生活考」でむらきさんをもっと深く知ることが、楽しみ(村上昌子)

#### ◆村上昌子さん◆

☆共学の高校で、女子だけに家庭科を教えている。専攻は食物だが、十年目になる現任

校には、前から食物担当している先生がいるので、しほりぶ被服領域を担当。

☆でも、既製の時代に「自分がどんな暮らしをしたかを探るのが家庭科だ」と思うから、生徒たちに一度は縫うことを経験させて、感じる機会を持たせたい。縫うことを全部排除する気はない。

☆二年の一学期を衣領域にあてて、実習にとられる時間をなるべく短くするために、二部式ゆかたをミシンで縫わせたり、しつけテープを使っただけのパンツの製作など、四角い布から巻いてみるところから実習は2時間ずつ3回でさせる。生徒は「パンツってこんなに簡単やったんね」と言う。この夏休みには「死蔵品に手を加えて活かす」を宿題にした。

☆「女の解放・男の解放」分科会に出た。家庭科では「家族・保育」に力を入れ、性から入って、家族の歴史などやっている。

☆校区が堺市毛穴町といって、ゆかた生産の地場産業のあることを活かしてきた。大阪は中学校からの輪切りがハッキリしていて、職場は元男子校である進学校。立地条件によっては、実習でなきゃ生徒がもたない学校もある中で、なんとか授業やってこ

られるところ。

☆Weのフォーラムに来て解放されても、この場だけじゃしょうがない。職場でも、地域の生協や、生徒の親にも、話のできる関係ができにくい。たった一人でも、支えてくれる親がいてくれると、どんなによいかと思う。(むらき数子)

#### ◆芦谷薫さん◆

☆今年の実行委員をやり活動的だった。分科会は家庭科にずっと出ているが、今年は内山さんのパンツなど、一歩進んでよかった。☆フォーラムやWeの会はとでもリラックスできる気持ちのいい、不快さを感じることはない場所だ。最近はいく快・不快ということ

を考える。タイの村では人の快・不快の感情が非常に尊重されているのに驚いた。快・不快を感じることに、なぜそう思うのかを問われたり、反対にされたりが一切なく、快・不快の感情があればそのまま尊重する生き方にふれたことが、転機となる。自分の感情に素直にありのままを受けとめることで、非常に楽になった

(古川文月)

◆古川文月さん◆

☆Weフォーラムは、能勢からで四回目。最近  
は来たら楽しいという参加のしかた。

☆今回はじめて、女の解放・男の解放の分科  
会と交流会に。坂本さんの男の結婚難の具  
体的な話が印象的だった。職場ではハード  
面で平等、ソフト面では保守！ 村社会。

☆Weの会は、いいおとなのモデルやらいろい  
ろな年齢層がいる。「こうあるべきだ」と  
迫らずにやっつけていられる運動体に参加し  
たかった。Weはその点を満たしてくれる。学  
生の頃参加した運動体は「べき」で迫られ  
る苦しさがあった、そうでない場面を求め  
て、Weの会と出会った (芦谷 薫)

◆三田村久子さん◆

☆Weのことは漠然と知っていたが、「保育者と  
して参加しない？」との誘いで参加した。

☆預る側がいつも分科会等に出席できない。  
保育係に負担がかかりすぎるので…など聞  
いた時、家庭科の男女共修をめざす人たち  
の集まりに、どーして母親が子どもを連れ  
て来るのか、自分の共同生活者に託して単  
身来られないものか、地域に預けることが  
できないのかと、最初は疑問に思った。

☆小さい子ども三人連れて参加した人を見  
て、あの子どもたち三人を夫に託すことは  
心配で、近くに置いて自分も参加したいと  
思うのは当然と思った。

☆普通子ども同士慣れるのに時間がかかる  
が、一人っ子も多く求め合うものがあるの  
か、子どもも出歩き慣れているのか、非常  
にスムーズに仲間を作っていた。

☆大人の会だから、大人の都合が優先するの  
は当然。子どもの出合いを大切に考えてい  
るのなら、子ども主体の場でなければ、子  
どもは十分楽しめない。(来海桂子)

◆来海桂子さん◆

☆子どもたちは短期間に仲間になった。付属  
的な参加でも、子どもも仲間を求めている。

☆他人と関わることが自然とできている。そ  
れは集団生活の中で訓練されたものなの？  
☆水遊び場へ母親付きで行った子たちは、親  
の指示で動く。親付きでない子は自分で行  
動する(せざるを得ない)。子どもが親だけ

に育てられるのは損だなと感じた。  
☆それなりに充実していたが、Weフォーラム  
に積極的な参加を望むなら、やはり保育の  
合い間に、という訳にはいかず、参加費を

払って参加しないとだめだ。

☆預ける親としては、預かる側がどんな人  
でもよいのか？ Weの理解者であってほしい  
と思っているのか。

☆今回は全面的な保育をしなかった。子ども  
は、友達とも遊べ、親とも過ごせて心が安  
定するが、親にとってはどうだったのか？  
☆施設の関係でスケジュール、人数に制限が  
あったが、結果はよかった。(三田村久子)

◆西本和代さん◆

☆自然の中で解放され、リフレッシュ。自分  
の求めているものに最も合う会場だ。

☆五〜六回参加したが、最初の頃は「勉強」  
に行ったのが、88年ぐらいいからお客様では  
なく主体的にかかわれるようになった。

☆今回は自分の課題が見えてきた。少ない情  
報の中でも深く掘り下げ自分を見つめてい  
く必要がある。知識偏重の限界や、これま  
での知識の消化不良を、頭でなく実感とし  
て感じる事ができた。

☆その方向としては、Weを柱として情報を整  
理する、自分の身近な所から(パートナーを  
含めて)違いつきあっていく。(寺西裕子)



◆寺西裕子さん◆

☆フォーラムには五、六回参加、今回は充実していたと実感。

☆女の解放・男の解放で3時まで、中沢さんとの交流に2時まで、鋭い刺激を受けた。

☆頭でっかちな自分に気づいた。草の根で行動しないと自分が変わらない。小さなことから行動しないと見えてこないと感じく。

☆職場では本音のつきあいができないが、いろんな人と本音で話せる場でききあわないとため。インタビュの手法はおもしろい。

☆今まで自分は一生懸命やっているつもりでも、何かつかめない所があった。岡崎勝さんとコンタクトをとったり、家族ぐるみでアジアの留学生と交流を深めたい。

☆今まで夫婦で参加したが、今回一人で参加してメリットがあった。(西本和代)

◆中山靖隆さん◆

☆楽しい会だった。硬さがなく、集中できた。中沢さんの話が一番インパクトが強く、2

時頃迄話して人間に対する考え方に感動。☆この先生の発想はとても母に似ているので親近感をもった(母は教師)。家庭科の分科会の、どうしていききたいか、どう変え

ていききたいかという熱のある話し合いが、

もつと外部に伝わってほしい。外の人がたちが気軽に家庭科の授業の中に入って協力したりして、もつと広がればいい。

☆知れば知るほど、家庭科ってすごい教科だと思う。女の人が独占してきたのもつたいない。もつと早くふれていければ、世界が変わっていたのではないだろうか。

☆生協の消費者教育の研究会にかかわったことが発端。生活者としてトータルに物を見られる教科は、家庭科しかない。教科書を教えることではなくて、様々な生活の中の題材を可能性の広がりとして与えていくことで、家庭科のすばらしさが見えてくると思う。(吉井路子)

◆吉井路子さん◆

☆小学校の教員20数年のベテラン。教師になりたての頃は、子供を傷つけるんじゃないかと毎日怖かった。叱ることもできない。

☆どうしようもないクラスと向き合い、抜きさしならない状態になった。恥も外聞もなく自分をさらけだし、子供にぶつかっていいくしかなかった。やめてしまおうと思っただ。でも捨てられなかった。そしてまだ教

師をやっている。

☆Weとの出会いは、同僚が読んでいたことから。フォーラムに参加したら「教師の代紋を捨てよう。すごい衝撃だった。今年のフォーラムで、また元気をもらった。もう一度がんばろう。人間ってすごい。そんなふうに思えるから、ここはいい。

☆女の解放・男の解放に出たのは、夫と私のテーマだから。みんな本音を出し合えるってすばらしい。前は女の人ばかりだったが今は男の人も多く参加して、自分を裸にして話してくれる。私も裸になって話せる。話したことが受け容れてもらえ、自分もそうするということは、普通じゃ難しい。

☆ここに来るとどこかで男社会と闘っている男の人たちと、一緒に乗り超えていきたい。また、こういう人たちがふえていくことに、Weは役立ってきたと思う。学校の中で、自分がどうやって男女の壁を超えていくのかは、やっぱり難しいけれど……

☆フォーラムに来てる人は、一生懸命闘っている人ばかりだが、肩に力が入っていない。いったん受け容れるところから始め、ほんとに素敵に闘っている。私も元気になるような気がする。(中山靖隆)

## 編集後記

◆今年の会場は東京八王子の  
大学セミナーハウス。広大な  
敷地に点在する建物の間を、  
事務連絡に何度も走ったこと、  
迷ったことがなつかしく思い  
出されます。

◆宿舎は「素朴な村」の生活  
を思いおこさせる集落風。お  
風呂、洗面所が遠いことにと  
まどった参加者も、かえって  
今の生活を問い直すという、  
Weのフォーラムならではの感  
想もありました。(青木)

◆今年のフォーラムの子ども  
活動は、会場の性格上、子ども  
の宿泊人数を制限せざるをえ  
ない事情があったことに端を  
発し、実行委員会でも、あるいは  
「Weの会だより」の紙上で侃  
々諤々の議論がありました。  
母親が子連れで参加、とい  
うのを前提に出発しているの

か。家族や地域の人に委ねる  
という働きかけも必要なので  
は……。今後につないで  
いきたいと思えます。(稲邑)

♣フォーラムに参加できな  
かった方は、この号を読むこと  
で、フォーラムの内容が分か  
ることになっているわけだけ  
れど、でもあの熱気まで伝え  
ることは難しい。暑い熱い三  
日間、連日深夜まで討論に参  
加する人たちの元気に、ぐう  
たらな私はただただ感嘆。

来年は兵庫とか。ちよつと  
会場を抜け出してぶらっと散  
歩できるような参加の仕方も  
あっていいかな。(河村)

♥ウイ書房にかかわって二度  
目の夏季フォーラム。参加し  
ませんでした。今年、今年、今年  
は緑に囲まれた自然がいっぱ

いの所、自然の中のステキ  
な出会い、思い出が沢山あつ  
たようですね。

♥ウイ書房で手伝わしていた  
だいて一年と八カ月になりま  
した。専業主婦も好きですが  
また違った時間を過ごすこと、  
後の家事がとてスムーズに  
出来るのは不思議。(渡辺)

★「違いつきあう」は、今  
最もビビッドなテーマ。お招  
きした講師も素敵でしたが、  
首都圏で二年続けて開いたこ  
とも、実行委員会のアンサン  
ブルをよくして、フォーラムの  
成功を生んだと思います。来

夏の関西は、すでに豊かなハ  
ーモニーが生まれている所。  
どんな出会いの時が持たれる  
か、楽しみです。福井から実  
行委に参加した方もあって、  
関西の方は励まされたと聞い  
ています。ご意見・ご要望を  
ぜひお寄せ下さい。(半田)

**Weバックナンバー** (在庫があります。ご注文は、最寄りの書店「地方小扱い」  
または、料金をおさえの上、振替で直接ウイ書房へ)

- 89/12 コミュニケーション-私をひらく (¥567)
- 90/1 フェミニズムの“いま”(¥567)
- 90/2.3 教育の中の性差別 (¥567)
- 90/4 '90年代、学校を変えよう (¥567)
- 90/5 生、そして死に迫る教育 (¥567)
- 90/6 「家庭生活」をどう語る (¥567)
- 90/7 「環境・資源」を見つめる (¥567)
- 90/8.9 消費者教育は、何を指す? (¥567)

- 90/夏増刊号 家庭科が変わる  
-情報化のうねりの中で (¥721)
- 90/10 地域をよみがえらせる (¥567)
- 90/11 高齢化社会がやってくる (¥567)
- 90/12 マス・メディアは何処へ (¥567)
- 90/冬増刊号 出合いは歴史をつくる (¥721)
- 91/1 性役割の固定化は揺らいだか (¥567)
- 91/2.3 新しい家庭科を創る (¥567)

### 新しい家庭科

Vol.10 No.10 1991年12月20日発行  
定価700円(本体680円+税20円)送料共  
年間購読料・定価7200円  
編集兼発行人/半田たつ子

### 発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14  
☎・FAX03(3326)1380 郵便振替 東京6-59867  
第一勧業銀行 調布仙川支店 普預1075292  
印刷所/(有)岩佐印刷所〒112文京区春日1-6-7

ウイ書房が贈る最新刊



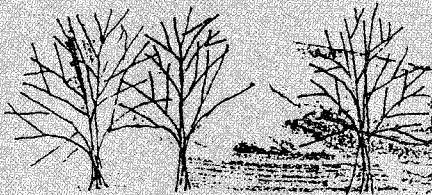
人間と教育を追求するあなたへ

「We」創刊十年！この歳月に、著者が  
出会い、思い、考えてきたことの集大成  
半田たつ子

木犀の  
白うら朝

- 目次
- I ぐらしの中で
  - II 人とのかわりの中で
  - III 女と男
  - IV 教育をめぐる私、そして家族
  - V
  - VI いのちを考える

定価 一八〇〇円  
〒 二六〇円



新しい家庭科 We

一九九一年十二月二十日発行  
一九八二年六月十八日第三種郵便物認可

第十巻第十号

「We」創刊一年の記念として

好評既刊

人間って  
不思議  
の視角

半田たつ子

人間は、人間を信ずることができた時、人間の美しさに酔う時、最高の幸せを味わう。家庭科にかけてきた著者の、人間を見る一つの視角をここに

定価 一五四五円  
〒 三二〇円

- 直接小社にご注文の場合は、書名、冊数および住所・氏名を明記の上、代金に送料を加えた金額をお送り下さい。
- 二冊以上の場合の送料は、実費をご請求いたします。
- 電話、はがきでお申し込みの際は、代金、送料を記入した振替用紙を同封いたしますので、到着次第お支払い下さい。

ウイ書房

〒182 調布市西つつじヶ丘2-25-14 ☎ 03-3326-1380 (振替・東京6 59867)

定価七〇〇円(本体六八〇円)送料共